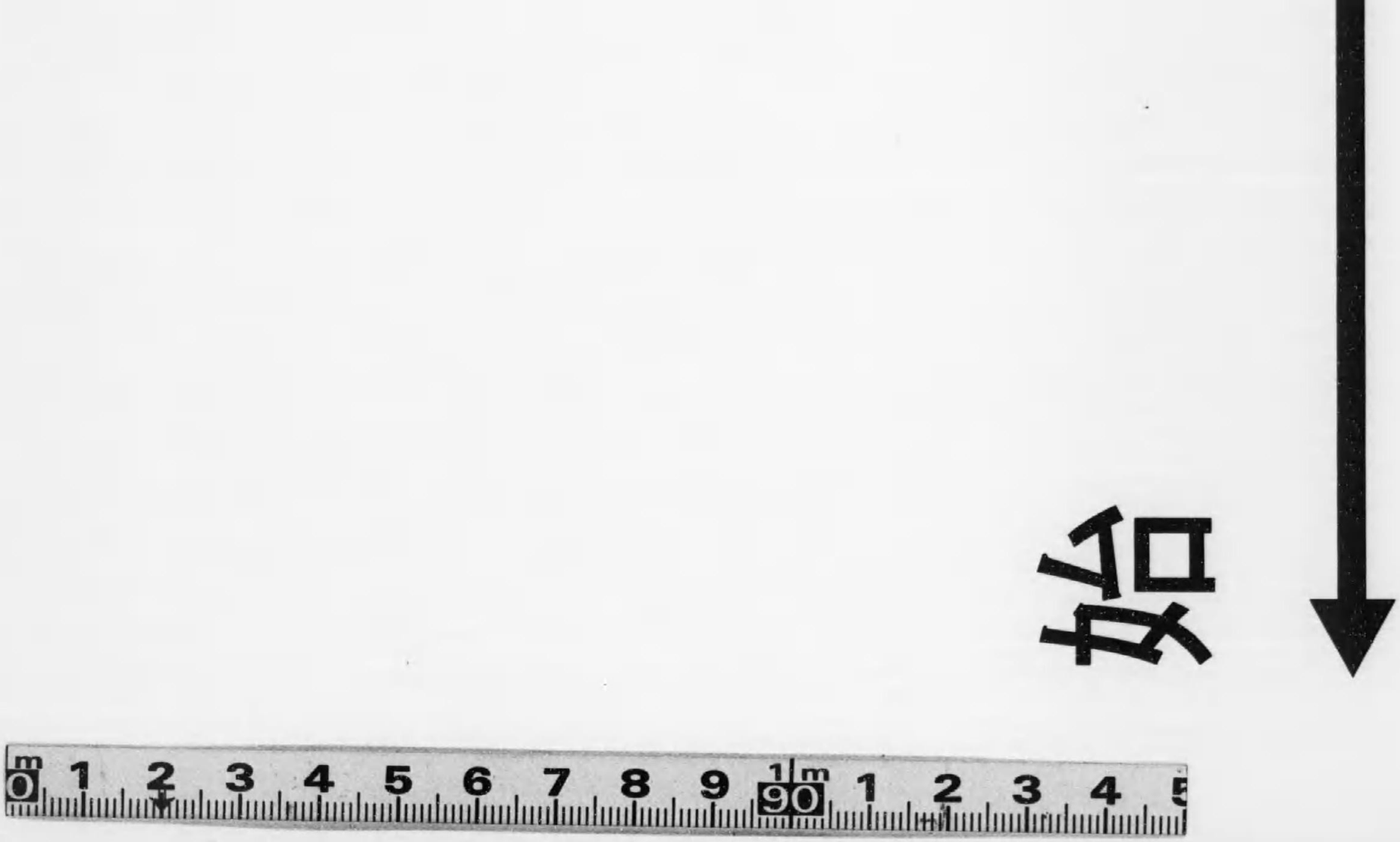

529
15

73

大尉の娘

作原ンキュシープ

譯寛田梅

東京
春陽堂版
日本橋通四丁目

大正
13.7 4
内交

529-15

序

アレクサンドル・セルゲエヴイツチ・プーシユキンは一七九九年五月二十六日モスクワの古い家柄の貴族の家に生れた。父母は上流世間人で、フランス語に巧みであり、フランス文學にも通じてゐた。この集に收めてある『ピヨートル大帝の黑奴』のなかにも見られるとほり、彼の母は、ピヨートル大帝に仕へたアフリカ・ニグロの孫娘にあたり、從つて彼もニグロの血をうけてゐたわけである。

父は當時の典型的貴族で、交際社會に幅を利かし、フランス文學に精しく、哲學を云爲したので、當時の名士はよくその家へ訪れた。その中にはロシヤに初めてセンチメンタリズムを移植したカラムジン(一七六六年——一八二六年)などがゐた。プーシユキンは幼い時からさうした文學的な雰圍氣に包まれて育ち、早くからフランスの一六・七世紀頃の作物を讀んでゐた。彼が滿十二歲のとき、學習院(リツエイ)が創設され、彼は僅かその三十人の貴族の子弟とともにそこへ入學した。この教育は幸にもプーシユキンに詩人的な作家的な傾向を與へるに力があつた。彼は十五六歲ころに

は擬古的な詩を作つたり、アルザマスの文學クラブにも關係したりしてゐた。そして段々と先輩に認められ、デルジャーウイン（一七四三――一八一六）やジュコーウスキイ（一七八三――一八五二）は彼の才能を大いに賞揚したほどであつた。彼は學習院を出てペティエルブルグで官吏となり、社交界にはいつた。俗世間的な、輕薄な、腐敗した社交界にあつて、彼はそこに溺れきらず、かの國事を憂へ社會狀態を慨いた十二月黨（デカブリスト）にも友人をもつてゐて、その詩『自由』の中には當時としては過激な思想が表はされてゐたので、出版禁止の厄を喰つた。一八二〇年、二十一歳のとき、要路の大臣に對する諷刺的短詩が禍して罪されんとしたが、カラムジン等の運動の結果官吏として南方の町へ追はれた。斯して彼は南露の放浪（スタ―ニエ）の生活を送つたのである。カウカーズ、クルイム、オデツサ等を旅行して、これに得た感興、印象は後年の詩や、この集の『大尉の娘』などにとり入れた。

一八二四年、プーシュキンが友人に送つた手紙が官憲の手に入り、父の所領のあつたプスコフ縣へ追放された。こゝで彼は靜かに詩作に耽ることができた。漸く爛熟期にはいつた彼の才能を示すに足る詩及びその後の代表的な詩の構想は、こゝでものされたものが多い。一八二五年十一月十四日、十二月黨（デカブリスト）の暴動が首都に起つたが、幸にして彼はこの追放中にあつて、怖るべき極刑

の難を免れ得た。それから間もなく首都へかへり、冬宮の官吏となり、一八三一年に結婚した。妻は美人であつたが、社交好きな、浮薄な婦人で、プーシュキンの天才を少しも理解してゐなかつた。そして時のオランダ公使の息と忌まはしい關係に陷つた。プーシュキンはそれを知つて、その男に決鬪を申込み、不幸にもペティエルブルグの雪深い郊外で相手の彈丸を胸にうけて殪れてしまつた。それは一八三七年一月二十九日のことで、彼はまだ三十八歳であつた。

プーシュキンは有名な批評家ベリンスキイ（一八一〇――一八四八）が云つてゐるが如く――百川の注ぎ込む大河であつて、百川をうけ入れて自らの大をなし、自らは新しい潮流、源泉となつた――のであつて、近代ロシヤ文學は嚴密な意味に於てプーシュキンより始まつたものと見られる。卽ち、彼は密接に過去と繫がりつゝ過去を完成して、同時にまた當來の文學がその流れを發する源泉となつたのである。從つて、近代ロシヤ文學を研究し、もしくは少くも味はんとすればプーシュキンよりはいつてゆくのが當然である。そのことは今更こゝに喋々する必要はない。

彼は詩人として最も名を馳せてゐるが、また多くの散文を書いてゐる。そのうちこゝに收めた小說『大尉の娘』『ドウブローウスキイ』及び『ピョートル大帝の黑奴』のごときは、プーシュキンの詩を研究し味つたものが亞いで必ず目を通して、その文章の流麗なる、題材の豐富なる、構想

の自由奔放にして精密なるに一驚するものである。プーシュキンの文章或はロシヤ語の韻乃至姿なるものは、不幸にして日本語には十分移し得ない。たゞ譯者はその未熟な筆を以てしてなほ十分の努力はなしたつもりではある。

『大尉の娘』は有名な詩形の小説『エウゲエニイ・オニエギン』八章が完成した翌年、一八三三年から決鬪して殪れた前年、一八三六年までに書き上げられたもので、彼はこの小説のために過去の放浪時代の記憶を呼び起したり、また旅行をしたり、史實を研究したりして非常の苦心を重ねてゐる。從つて、彼の小説の内では最も大きな、勝れたものであることは言を俟たない。こゝではすでに彼のロマンチシズムはその絶頂をつくして、リアリズムの坂を下りつゝあつて、その前面に生々しい現實、嚴肅なる人生の平野がひらけてゐる。『ドウブローウスキイ』は一八三二年の作彼の友人のナシュチョーキンが彼に語つてきかせた事實を題材としたもので、彼の死後一八四一年その遺稿の一つとして出版された。『ピョートル大帝の黑奴』は初めに述べた如く、彼の母方の曾祖父である、ピョートル大帝に仕へたアフリカ・ニグロが主人公とされてゐる。一八二七年の作で未完成のまゝに殘されたが、このまゝでも已でに秀れた短篇をなしてゐる。

一八二四年六月

梅田寛

目次

大尉の娘……一
ドウブローウスキイ……二七二
ピョートル大帝の黑奴……四二七

大尉の娘

一、近衛の軍曹

若き時より名譽に注意せよ。

諺。

彼は明日こそは近衛の大尉になる筈であつた。

「そのことは必要がないから、陸軍に勤めさせておけ」

と、うまい工合に云はれた！　彼の悲しむがまゝにしておくがいゝ。

……

して、彼の父親は誰なのか？

クニヤジュニーン。

一七――年に一等少佐で退職してしまつた。彼はその時から自分の所領のシムビールスクの村で暮した。そこでは又、土地の貧乏な貴族の娘であるアウドーチヤ・ワシーリエウナと結婚もしたのであつた。私達はみんなで九人のきやうだいであつた。みんな私のそれらの男きやうだい女きやうだいは、幼いころに死んでしまつた。母がまだ私を腹にやどしてゐるときに、私は近い親戚にあたる侯爵で近衛の少佐である人のおかげで、すでに軍曹としてセミョーノフ聯隊の兵籍に入れられてゐた。もしもすべての期待に反して、母が娘を產んだ場合には、父はこの世へ顏出しをしなかつた近衛の軍曹が死んだことを、然るべきところへ屆け出たことであらう。そして事はそれなりけりで濟んでしまつたことであらう。私は學問の終るまでは賜暇にあるものと見なされてゐた。その當時、われ〳〵は現代式にではなく教育されたものだ。私は五つの歲頃に馬丁のサウエーリイチの手に養育を委ねられた。彼は行ひの正しいが故に、私の傅役に任じられたのである。彼の監督のもとに、十五の歲には私はロシヤ語の讀み書きを會得してしまつた。そしてボルゾイ種の獵犬の性質を非常に正しく判斷することができた。このころ、父は私のためにボプレといふフランス人を雇つてくれた。この男は一年間の著へとする酒やオリーブ油とゝもにモスクワから呼び寄せられたのであつた。彼がやつてきたことは、サウエーリイチにはいたく氣に入らなかつ

た。

『ありがたいことには』と彼はひとりでぶつ〳〵と云つた『どうやら坊ちやんはよくお湯が使はせてあるし、髪も綺麗に梳いてあれば、よく育てゝもあるんだ。よけいなお錢を使つて、まるでこの國に適當な人がないかみたいに、フランス人なんかを雇ひ入れる必要がどこにあるんだらう！』

ボプレは自分の故郷では理髪師をやつてゐたが、その後プロシヤへ行つて兵隊となり、Pour être outchitel（家庭教師として）この言葉も全く知らないで、ロシヤへやつてきたのである。彼は善良な男であつたが、輕薄で極端に放蕩ものであつた。主なる彼の缺點は美しい女性に對する情熱であつた。自分の軟弱な性質の故に彼はしば〳〵衝動をうけて、そのため晝も夜もまる一日歎息をしてゐた。まだおまけに、彼は（彼の言葉を借りて云へば）酒壜の敵ではなかつた。即ち（ロシヤ式に云へば）酒を餘分にうんと飲むのが好きであつた。だが、葡萄酒は私たちの家では正餐のあとでだけ、それとても小さい盃に一杯づゝ與へられるばかりで、おまけに家庭教師は通例のけものにされてゐたので、わがボプレは非常に早くもロシヤの地酒の浸酒（ナストーカ）に馴れてしまつて、胃の腑のためには比類なく効果あるものとしてこの國の酒を、自分の國の葡萄酒よりもむしろ好む

やうになつてしまつた。私たち二人はすぐと仲よしになつた。彼は約束として私にフランス語、ドイツ語、それからすべての學科を教へなければならない義務があつたにも拘はらず、彼は早くも私からどうにかかうにかロシア語で喋べることを學ぶ方を好んで、そのあとではもはや二人は自分自分のやることをやつてゐた。私たちは仲よく暮した。私はもうほかの先生はほしいとも思はなかつた。ところが間もなく、運命が私たちを別れさせた。といふのはかういふ機會によつてである。

肥つたあばた面の娘である洗濯女のパラーシヤと、片目（かため）の牝牛番のアクーリカとが或るとき同意して、一しよに私の母の足もとに身を投げ出して泣きながら自分たちの罪ある落度を告白してかのフランス人が無經驗な自分たちを欺いたことを訴へたのであつた。母はこの事を冗談にすましてしまふのはいやであつたので、父に訴へた。父の詮議は簡單であつた。彼は直ちにやくざものゝフランス人を呼びつけた。ところが呼びに行つたものゝ報告は、いまフランス人は私に授業をしてゐるからといふのであつた。父は私の部屋へやつてきた。このときボプレは寢臺の上で無邪氣な眠りにおちゐつてゐた。私は自分の仕事をやつてゐたのだ。私のためにモスクワから地圖がとり寄せられたと知つて貰はなければならない。その地圖といふのは、何等使用されることも

なく壁にかけられてあつた。そしてその良質の用紙と廣さとが永いあひだ私を誘惑してゐた。私はこれから凧をこしらへようと思ひたつて、ボプレが眠つてゐるのを幸ひに仕事にとりかゝつたのだつた。私が南アフリカの南端の喜望峰のあたりへもつて行つて、菩提樹の皮から拵へた纖維の尻尾をとつゝけてゐるちやうどその時に、父がはいつてきたのであつた。父は私が地理の學習をやつてゐるのを見て、三度ばかり私の耳をひつぱつた。それからボプレの方へ駈け寄つて、非常にぞんざいに彼を搖り起して、罵詈の言葉を浴びせはじめた。ボプレはまごついて、起きあがらうとしたが駄目であつた。といふのは、この氣の毒なフランス人は、へゞれけに醉ぱらつてゐたからだ。——七度わるいことをすれば一度はやつゝけられる——といふ俚言のとほりだ。父は彼の襟をつかんで寢臺からつるしあげて、扉口からそとへつき出した。そして即日に屋敷から彼を放逐してしまつたので、サウエーリイチの喜びをもたらした。さういふ始末で、私の教育はすんでしまつた。

私は鳩などを追つたり、屋敷の下部の男の子たちと背飛びの遊びをしたりして、未成年者として暮してゐた。その間に、私の十六の歳はくれてしまつた。くれて、私の運命は轉換させられた。

秋の或る日のことであつた。母は客間で蜂蜜のジャムを煮てゐた。私はといへば、そのそばで

舌なめずりをしながら、煮えたぎつてゐる泡をながめてゐた。父は窓のそばで、彼が毎年送達をうける「宮内省通報」を讀んでゐた。その冊子はいつも父に對しては力づよい影響をもつてゐるのであつた。なぜかといふに、彼はこの冊子を決して或る特別な興味なしには通讀したことがなく、これを讀むと彼は常におどろくべく動亂した怒氣を發したからである。母はそらで皆父の習慣及び習癖を知つてゐたので、出來るだけ目につかない遠くへこの冊子を押しかくしておかうといつも努めてゐた。そんなわけで、「宮内省通報」は往々にしてまる一ケ月も彼の目にとまらないでゐることがあつた。その代り、彼が偶然にこれをみつけようものなら、しば〳〵まる何時間といふものぶつ通しで自分の手から放さないでゐるのであつた。まあそんなわけで、父は「宮内省通報」を讀んでゐた、時をり肩をつぼめたり、また小さい聲で

「少將だつて！……奴は俺の中隊で軍曹でゐやがつたのだ！……二つのロシヤ勳章の帶勳者かい！……だが、俺等が別れて久しいものだつたかナア？　そんなにもなれやしないんだが……」

などゝ獨り言を云ひながら、とう〳〵父はその「通報」を長椅子の上に叩きつけた。そして何ごともいゝ事を豫言しない物思ひに沈んでしまつた。

と急に、彼は母の方へむいた。

『アウドーチヤ・ワシーリエウナ、ときにペトルーシヤはいくつになるんだつたつけナ？』

『えゝ、ほら、まる十七になりましたのよ』と母は答へた『ペトルーシヤはナスターシヤ・ゲラーシモウナ叔母さんが歿くなつた、ちやうどその年に生れたのですもの。そしてそのときはまだ……』

『よろしい』さう云つて父は母の云ふことを遮つた『もうあれには奉職させてよい時分だね。女中部屋を駈けまはつたり、鳩の巣へよぢのぼつたりするのは、もう澤山だからナ』

間もなく私と別れねばならぬといふ思ひは、手にした匙を鍋のなかへとり落したほど母をおどろかした。そして涙は彼女の顏に流れおちた。そのことゝ相對して、私の喜びを書き現はすことは六ケしい。軍隊勤務に出るといふ私の思ひは、自由とそれからペチエルブールグの生活の愉快の思ひと一つになつた。私は自分の考へでは人間幸福の最上なるものである近衛の將校となつた自分を、想像してゐた。

父は自分の考へを變へることも好まなかつたし、その實行を延ばすことも好まなかつた。私の出發の日はとり決められてしまつた。その前の日に、父は私の將來の司令官に對する附手紙を私にもたせるつもりだといふことを話した。そしてペンと用紙とを頼んだ。

『忘れちやいけませんよ、アンドレイ・ペトローヴイツチ』と母は云つた『お母さんがね、侯爵樣によろしく申したと云つてね、お母さんは侯爵樣がペトルーシヤをどうぞよろしくお目かけ下さいますやうにお願ひしてゐましたつて、申しあげるのですよ』

『何だつて下らない事を云つてゐるんだ！』と父は顏をしかめながら云つた『何のために俺はあの侯爵に手紙を書かなけれやならないんだね？』

『でも、貴夫はペトルーシヤの司令官になる人に手紙をお書きになるつて、おつしやつたではありませんか』

『うん、それでどうしたつて云ふんだ？』

『それで、ペトルーシヤの司令官となるお方はあの侯爵樣ではありませんか、ペトルーシヤはセミョーノフ聯隊の兵籍に入れられてゐるのぢやありませんこと』

『兵籍に入れられてゐるつて！　あれが兵籍に入れられたつてことが、俺にどういふ關係があるんだ？　ペトルーシヤはペチエルブールグへ行くんではないんだよ。あれはペチエルブールグで勤務に就いて、何を習ふことだらう？　金の無駄使ひをすることや遊ぶことを習ふ位なものだらうぢやないか？　それよりもあれにや近衛隊のほかの陸軍に勤めさせて、苦しみをなめたり、烟

硝の臭ひを嗅いだりして、兵隊にならせるがいゝんだ。その代り怠け者にやなりつこない。近衛隊の兵籍に入れられてるなんて！　どこにあれの旅行券はあるね？　こゝへもつてきておくれ」

母は自分の手箱のなかにシャツと一しよにしまつてあつた私の旅行券をさがし出した。そのシャツといふのは私が生れたての頃にそれを着せられて、洗禮をうけたものなのであつた。母はその旅行券をふるへる手で父に手わたした。父はそれを注意ぶかく讀みとほして、私の前の卓子の上においた。そして自分の手紙を書きはじめた。

私は好奇心に苦しめられた。もはやペチエルブールグへゆかないとすれば、一體どこへ私はやられるのであらう？　私はかなりのろ〳〵と動いてゐる父のペンから目を放さなかつた。つひに彼はそれをかき終つて、旅行券と一しよに一つの封筒に入れて封をしてしまひ、眼鏡を外して、私を呼びよせて云つた。

『さあ、お前にこのアンドレイ・カルローヴイッチにあてた手紙をやる。この人は俺のむかしの親しい友達だつた人だ。お前は明日からオレンブールグへ行つて、この人の指揮のもとに勤務するんだぞ』

この故に、私のあらゆる輝やかしい希望は碎けてしまつた！　愉快なるペチエルブールグの生

活のかはりに、邊僻な遠隔の地方の憂鬱や退屈が私を待ち設けてゐるのであつた。今の今まで私が非常の歡喜をいだいて考へてゐた勤務といふものは、今は私には苦しい不幸と思はれた。さり乍ら云ひ爭ふのは無用のことであつた！　翌る日の朝、屋敷の玄關へ旅行用の四輪馬車（ポーチカ）が寄せつけられた。それにはトランクだとか、茶道具のはいつてゐる箱、それからパン、私の家における最後のわがまゝのしるしである肉饅頭のはいつてゐる包みなどがつみこまれた。私の兩親は私の前途を祝福してくれた。父は私に云つた。

『さやうなら、ピョートル。誓ひを立てた人に忠實に仕へるんだぞ。司令官たちの命令にはよく服從しなければならない。司令官たちの寵愛を得ようとて汲々しちやならない。勤務することから利益を求めようなどゝは思つちやならないぞ。勤務をいやがつてはいけない。そしてかう云ふ諺をおもひ出すんだ――衣服は新しき時より注意し、名譽は若きときより注意すべし――といふことをな。』

母は涙をながしながら、私には自分の體をよく氣をつけるやうに頼み、そして私と一しよにゆくサウェーリイチには、わが子の面倒をよく見てやつてくれと呟ひつけた。私は兎の毛皮製の袖無上衣（トウループ）と、その上には狐の毛皮製の外套（シューバ）とを着せられた。私はサウェーリイチとゝもに馬車に

のつて、涙をながしながら出發したのであつた。

その日の夜、私はシムビールスクに到着した。そこではサウエーリイチに委託されてある、必要な品々を買ひ求めるために一晝夜滯在しなければならなかつた。私は旅館にとゞまつてゐた。サウエーリイチは商店から商店へと品物を買ふために出て行つた。私は窓から汚い横町を見てゐるのに退屈して、あらゆる部屋々々をぶら〳〵歩きにやつて行つた。撞球室へはいつて行つて、私は背の高い紳士を見た。三十五歳くらゐの人で、長い黑い髯を生やし、部屋着をきて、手にはキューをもち、口にはパイプをくはへてゐた。彼は撞球室のボーイと勝負をやつてゐた。そのボーイといふのは、勝てば火酒(ワトカ)一杯を御馳走になり、負けたら四つん這ひになつて撞球臺の下へ這ひこまなければならないのであつた。私は彼等のやつてゐる勝負を眺めはじめた。その勝負が長びけば長びくほど、撞球臺の下の四つんばひの散歩は頻繁になつて、とう〳〵そのボーイは撞球臺の下で往生してしまつた。紳士はその往生したボーイに對して、葬送演說乃至弔辭といふたぐひの、ちよつとぴりつとくる言葉を云つてきかした。それから私に勝負をやらうと申しこんだ。私はそんなことは知らないからといつて斷つた。このことはうち見たところ、彼には不思議に思はれたらしい。彼は私を恰も憐むがごとく見た。けれど、私たちは話しあつて知りあひとなつた。

私はこの紳士がイワン・イワーノヴイツチ・ズーリンといふ人であること、そして某驃騎兵聯隊の騎兵大尉であつて、目下新募の徵兵をうけとるためにこのシムビールスクへやつてきて、この旅館に滯在してゐるのだといふことを知つた。ズーリンは兵隊式にあり合せのもので一しよに正餐をとらうと私を招待してくれた。私は喜んで承諾した。私たちは食卓についた。ズーリンは軍隊勤務に馴れる必要があると話しながら、酒をうんとのみ、私にも亦のませた。彼は私がほとんど笑ひころげんばかりになつた、軍隊の面白い逸話を話してきかせてくれた。そして私たちはもうすつかり友だちになつてしまつて食卓をはなれたのであつた。そこで、彼は私に撞球臺で勝負をする方法を敎へてやらうといひ出した。

『このことはですね』と彼は云つた『軍隊勤務のわれ〳〵仲間にとつちや必要なことなんですよ。たとへば行軍のときにですね、小さい村へ行つたとしませう。すれば何をしようと思ひますね？さう絕えずユダヤ人ばかりをぶつても居られませんや。やむを得ず、旅館へ出かけて撞球勝負をはじめることになりますよ。ところで、そのためにやその勝負の方法を知つておく必要がありますね！』

私はその話ですつかり信用させられてしまつた。そして大變な熱心さで覺えにかゝつたのであ

つた。ズーリンは大きな聲で私をはげまし褒めたり、私の早い上達におどろいたりした。そして少しばかりの教授のあとで、彼は二哥(コペック)づゝのお金をかけて自分と勝負をしようといひ出した。それは儲けるためではなくて、彼の言葉に從へば、最も悪い習慣であるところの只何も賭けないでやることを避けるためなのであつた。私はそれにも同意した。ところがズーリンはボーイにブンシュ酒をもつてくるやうに命じて、これも軍隊勤務には必要なのだからと繰り返して云つて、私にのむやうに說きふせた。だが、ブンシュ酒がなくちゃ勤務が出來ないのだらうか！　私は彼のいふことをきいた。その間に私たちの勝負はつゞいてゐた。私は自分のコップの酒をのめばのむほど、勇敢になつてきた。時々刻々として私の撞く球は撞球臺をとびこした。私はのぼせ上りやつぎとなつて、いゝ加減な球勘定をしてゐるボーイを罵つた。そしてだん〳〵と勝負の數を增して行つて、まあ一口に云へばわがまゝ勝手なことをする少年のやうに自分と自分を扱つた。その間に、時はいつ知らずすぎてしまつた。ズーリンは時計を見て、キューをおいた。そして私が百留(ルーブル)まけたと云つた。そのことは私をちよつと困亂させた。私のお金はサウエーリイチがもつてゐた。私はあやまりはじめた。ズーリンは私が云ふことを遮つて云つた。

「なアにいゝですよ！　どうか安心してゐて下さい。私は待つてられますよ。で、その間二人で

アリーヌシュカのところへゆきませうや」

どうしたつていふのだらう？　一日はまるで私がさうしはじめたものであるかのやうにくれてしまつた。私たち二人はアリーヌシュカのところで一しよに夜食をした。ズーリンはやつぱり軍隊勤務には飲むことに馴れる必要があると繰り返しいひながら、次から次へと私に酒をついで飲ました。食卓をはなれると私はふら〳〵として、やうやくのことで足をふみこたへた。夜なかにズーリンは私を旅館へおくりとゞけた。

サウエーリイチは私達を玄關に出むかへた。彼は私の軍隊勤務に對する熱心さの、一點疑ふところなきしるしを見て、おどろいて歎息した。

「これはまあ、若旦那、どうなすつたといふのです？」と彼は情なささうな聲で云つた「貴方はどこでそんなに醉ぱらつたのです？　あゝ神樣、若旦那は生れながらにこんな罪は知りませんでしたのに！」

「だまつてゐろい、おいぼれ！」と、私は呂律のまはらない舌で彼に答へた。「お前はたしかによつぱらつてゐるんだ、寢に行つた〳〵……俺をねかせろよ」

次の日、私は頭痛をおぼえながら目がさめて、ぼんやりと昨日の出來ごとをおもひ出した。私

の思ひは、お茶をもつて私のところへはいつてきたサウエーリイチによつて切斷された。

『ピョートル・アンドレーヴイッチ、もうはや貴方は』と彼は頭をふりながら私に云つた『もうはや貴方は放蕩をはじめなすつてゐるのですね。そんなことは誰にお似なすつたのでせう？　大旦那様も貴方のお祖父様も酒のみではゐなさらなかつたやうです。お母様のことは云ふまでもありませんが、あの方は生れてから果實酒のほかには、何も口になすつたことがありませんよ。ちや誰がみんな罪があるのでせう？　あのやくざものゝフランス人なんです。しよつちうあの男は女中のアンチピエーウナにおべつかを使つて――奥様、どうぞ、火酒を下さいな――なんて云つてゐました。ほら、そのどうぞが貴方にうつつたのです！　云ふのも野暮です、あの犬ころめが貴方にそんないゝ事を教へてしまつたのですよ。なんだつて、あんな邪教徒を傭役に雇ふ必要があつたのでせう！　まるで、大旦那のところにそれだけの下僕がなかつたかのやうにね！』

私は恥かしかつた。私は顔をそむけて、彼に云つた。

『あちらへおゆきよ、サウエーリイチ、僕はお茶はのみたかないんだよ』

だが、今までゞも時々説教にとりかゝつてゐるときに、サウエーリイチを宥めるのは六ケしかつた。

『さうれ、どらんなさい、ピョートル・アンドレーイッチ、お酒によつぱらつたらどんなものかわかつたでせう。頭も重くるしければ、食べものも食べたくはないといふ始末ですよ。のんだくれの人間は、まつたく無用なやくざものなんですよ……胡瓜の鹽水に蜂蜜を入れてのみますか、それとも一番いゝのは浸酒をコップに半分むかひ酒にやることです。さういたしますか？』

このとき一人の少年が部屋へはいつてきて、私にあのズーリンからの書附を手渡した。私はそれを披いて、次の數行を讀んだ。

親愛なるピョートル・アンドレーヴイッチ、どうかこの子供に百留をもたせてよこして下さい。これは君が昨日私との勝負に負けた金子です。私はいま金が是非とも必要なんですから。

とり急ぎ、失禮。

イワン・ズーリン

せんすべもなかつた。私は自分で無關心な態をよそほつた。そして私の金にも下着にも、それから行爲にも目付役であるサウエーリイチにむかつて、その少年に百留をわたしてやるやうに呟ひつけた。

『どうしてです！　それあ、なぜです？』とおどろいたサウエーリイチはきいた。

『僕はね、あの人にそれだけの負債があるんだよ』私は出來るかぎり冷靜にさう云つた。

『負債があるんですつて！』とサウエーリイチはいよ〳〵益々ひどく驚き入つて云ひかへした。

『して若旦那、貴方は一體いつあの人にそんなお金をうまく借りてしまつたのです？　どうもよくないことですね。それあ、若旦那、貴方のお勝手ですよ、私はお金は差あげられませんから』

私は考へた、もしかこの決定的な一か八かのときにこの强情な爺さんを議論で負かさなければ、もはや時たつうちに結局は彼の後見から免れることは困難となるであらうと。で、彼を見つめながら云つた。

『僕はお前の主人で、お前は僕の召使なんだよ。お金は僕のものだ。僕は勝負に負けてお金を使つたが、それはたゞ僕がさうしたかつたからしたんだよ。でね、僕はお前に忠告しておくが、利口ぶつちや駄目だよ、呰ひつけられたことは何でもしなくちやいけないよ』

サウエーリイチは大變私の言葉におどろいて、兩手を拍つてびつくり仰天したほどであつた。

『何だつて、お前はぼんやりつつ立つてゐるんだ？』と私は腹立たしげにどなつた。

『あなた、ピョートル・アンドレーヴィッチ、』彼はふるへる聲で云つた『私を悲しみのために殺さないで下さいまし。貴方は私の命とたのむお方でございます！　どうぞ私の、この老人のいふ

ことをおきゝなすつて下さい、あの泥棒めに貴方が一寸冗談半分にやつたのだ、私たちはお金ともつてゐないからと書いておやりなさい。百留なんて！　とんでもないことですよ！　ねえ、御兩親樣は貴方が勝負遊びをなさるのは、胡桃を賭けるほかはいけないとお禁めになつたぢやありませんか……』

『無駄口をきくのは澤山だよ』私は彼の云ひかけた言葉をきびしく遮つた『こゝへお金をお出しよ、さうでなきゃ僕はお前の首を引つかんで追ん出すよ』

サウエーリイチは深い悲しみの色をうかべて私を見た。そして私の借金をとりに行つた。私はこの哀れな老人が氣の毒であつた。しかし、私は自由になること、そして自分はもはや赤ん坊ではないことを示すことが望ましかつたのだ。金子はズーリンにとゞけられた。サウエーリイチはこのいやな旅館から、いそいで私をつれ出さうとした。彼は馬の用意ができたことを告げにやつてきた。私は不安な良心、無言の悔恨を抱いて、私の遊戯の先生に別れも告げず、またいつ彼に逢ふといふことも思はずに、シムビールスクを出發したのであつた。

二、道案内

わたしの國か、ふるさとか、
知らない國よ！
わたしが自分でお前の方へやつて來たのだ！
善い馬がわたしを運んできたのだ！。
若ものゝすばしこさ、元氣さ、
そして酒場の酒の醉ひが、
わたしを運んできた、善良な若ものを、

古謠

私の路々での物思ひは、あまり愉快なものではなかつた。私が勝負にまけた金高はその當時とすれば些少のものではなかつた。私はあのシムビールスクの旅館での私の行爲は愚かであつたこ

とを、ひそかに認めないわけにはゆかなかつた。そして自分と自分でサウエーリイチに對して罪があることを感じた。すべてかうしたことは私を苦しめた。老人は私の方へは顏を向けないで、そつぽをむいて馭者臺に腰かけてゐて、默りこくつて時をり溜息をするばかりであつた。私はどうあつても彼と仲なほりをしようと思つたが、何から話し出してよいかわからなかつた。そしてとう〳〵彼に云つた。

『ねえ、ねえ、サウエーリイチ！　もう澤山だよ、仲なほりしようよ。僕がわるかつたのだから僕はね、自分がわるかつたといふことがわかつてゐるんだよ。きのふ、僕は惡いことをしたのに却つてお前を謂はれもなく恥かしめちやつた。僕、約束をするよ、これからもつといゝ行ひをして、お前のいふことはよくきくからね。さあ、もう怒らないで、仲なほりをしようよ』

『いゝえ、貴方、ピヨートル・アンドレーイツチ！』と彼はふかい溜息をしながら答へた。『私はね、自分自身に腹を立てゝゐるのですよ。私がすつかり惡かつたのですから。なぜ、私は貴方を只ひとりで旅館においたのでせう！　どうしたらいゝのでせう！　罪が私を迷はせたのです。私は坊さんのお主婦さんの所へ立ちよつて、敎母さんにちよつとお目にかゝつて來ようと思ひついたのでした。そしてこんなことになつてしまひました、敎母さんのところへ立よつたのが、結局

罪を犯すことになつてしまひました。ほんとに不幸です！　御兩親様がごらんになれば、私は何う思はれることでせう？　お子様の貴方がお酒を飲んで、勝負ごとをなすつてゐるのを御存じになれば何とおつしやることでせう！」

私はこの哀れなサウエーリイチを慰めるために、今後は彼の承諾なしにはたゞの一哥（コペック）だつてわがまゝ勝手に使はないといふ約束をしたのであつた。彼はやはり時をり頭をふりながら、

「百ルーブル！　僅かのお金ぢやありやしない！」と獨り言をぶつ〳〵云つてゐたが、だん〳〵と落ちついてきた。

私は自分の任地の方へ追々と近づいて行つた。われ〳〵の周圍には荒れはてた曠野がひろがつてゐて、丘や谷で横斷されてゐた。あたりはすつかり雪に掩はれてゐた。太陽は沈んだ。馬車は狹い路に沿うて、といふよりもむしろ百姓たちの橇がつけて行つた跡を辿つて進んで行つた。突然、私の馬車の馭者が、一方のはうをぢいと眺めはじめた。そしてとう〳〵帽子をとつて、私にむかつて云つた。

「旦那、ひとつ引きかへさせては頂けますまいか？」

「それあ、なぜだね？」

「天氣の見込みがありませんのですよ、風がちつと出てまゐりました。ごらんなさい、風が降つたばかりの雪を吹きあげてゐるのを」

「それがなぜ惡いのかね？」

「でも、どうです？　むかふをごらんなさい」

さう云つて、馭者は鞭をあげて東の方をさし示した。

「僕は何も見えないよ、眞白な野原と晴れた空のほかには」

「いゝえ、もつと〳〵むかふですよ、あの雲ですよ！」

私は實さいに東の空の端の方に、白い小さい雲があるのを見た。それは最初のほどは、遠方にある丘だと私は解釋したのであつた。馭者はあの白雲は吹雪を豫報してゐるのだと私に說明してくれた。

私はこの地方の吹雪のはなしをきいてゐた。そして荷車の全列がそのために埋められてしまふことが、度々あるといふことも知つてゐた。サウエーリイチは馭者の意見に贊成して、こゝから引きかへすやうに勸めた。しかしながら、私には風はひどくはないやうに思はれた。私は次の宿場まで、吹雪の來ない間に都合よく行きつき得ると信じた。そしてもつと早く馬車をやるやうに

命じた。

馭者は馬をかけさせた。けれど絶えず東の空を眺めてゐた。馬はそろつて駈けた。その間に、風はだん〳〵と力づよくなつてきた。かの小さい雲は白い密雲と變つてしまつて、それが重々しく湧き上り、大きくなつて、次第々々に空を掩うてしまつた。小さい粉雪がやつてきた、そして忽ちに大きな雪の塊となつてふり積つた。風は唸つて、吹雪となつてしまつた。一瞬間に暗黒な空は雪の海となつて混亂した。なにもかもが見えなくなつてしまつた。

『さあ、旦那』と馭者は叫んだ『困つたことになりましたよ、旦那……』

私は馬車からそとを見た、一切は暗黒と嵐とであつた。風はまるで魂をふきこまれたと思はれるほど、猛烈な勢で咆哮した。雪は私にふりかゝり、サウエーリイチにふりかゝつた。馬どもは並足で進んでゐたが、まもなくとゞまつてしまつた。

『お前は何だつてやらないんだ?』と私は我慢ができないで馭者に訊ねた。

『どうして行かれませう?』馭者は馭者臺から降りながら答へた『どこへ行つてよいか、全くわからないんです、路はなし、あたりはすつかり闇なんですから』

私は彼を罵りはじめた。サウエーリイチは彼を庇つた。

『馭者のいふことをおきゝになればよかつたのですよ』と彼は腹立たしげに云つた『宿屋へひきかへして、お茶をのんで、明日の朝までとまつた方がよかつたのです、すれば吹雪も靜まつて遠くへ行つてしまつたでせうに。なぜ、急がなきやならないのでせう? 結婚式にゆくんぢやあるまいし!』

サウエーリイチのいふことは間ちがつてゐなかつた。だが、どうすることもできなかつた。雪は非常にふり積つた。馬車のまはりには雪の山ができた。馬どもは頭を垂れて、ときをり顫へながらイんでゐた。馭者は周圍を歩きまはつて、何もすることがないので馬具をなほしてゐた。サウエーリイチはぶつ〳〵不平を云つてゐた。私は住家もしくは路のそれらしいものでも認めたいと思つて、四方八方を見まはしてゐたが、暗灰色に旋り狂ふ吹雪のほかには何ものも認めることができなかつた……と、そのとき不意に、私はなにか黒いものを目にとめた。

『おい、馭者!』と私は叫んだ『どらんよ、あすこにあんな黒くなつたものが見えるが何だらう?』

馭者はその方角を視はじめた。

『何がわかるものですか、旦那』彼は自分の場所に腰うちかけながら云つた『荷車かと思へば荷

車でもなし、樹かと思へば樹でもなし、でもどうやら動いてゐるらしいですね。きつと狼か、それとも人間なんでせうよ』

私はその何ものだかわからないものに向つて、馬車をやるやうに命じた。そのものは、直ちにわれ〳〵に逢ひにやつてきはじめた。二分間ばかり經つて、われ〳〵は一人の人間と相對したのであつた。

『もし、もし！』と、馭者はその人間に大聲で云つた『ねえ、君は知つてないかい、道はどこにあるんだか？』

『その道は此處なんだよ。俺はしつかりとした硬い畦の上に立つてゐるんだよ』とその旅の男は答へた『それで、どうしたつて云ふんだね？』

『ねえ、お百姓さん』私はその男にさう云つた『お前さんはこの土地を知つてゐますかね？ 私たちを宿屋まで案内して行つてくれませんか？』

『私はこの土地はよく知つてゐますよ』とその旅の男は答へた『おかげとこの土地は縱に横にと歩きまはつたり、乘りまはつたりしましたんでね。だが、どらんのとほりの天氣ですから、すぐと貴方がたは路に迷つてしまひますよ。いつそこゝでこの儘ぢつとしてゐて、待つてゐる方がよ

どさんすよ。すれば吹雪もしづまつて、空も霽れますからね、そのときは星によつて道をみつけませうよ』

彼の沈着さは私をはげました。私はもはや神の意志に自分をお委せして、この曠原のまん中で夜をあかさうと決心した。するとこの時急に、かの旅の男はすばやく馭者臺にのりこんで、馭者に云つた。

『さあ、有難いことにや人の住家がこの近くにあるよ。右へまはして、驅れよ』

『だつて、なぜ右へゆかなきやならないんだ？』と馭者は不滿さうにきいた『君はどこに道があるのがわかるんだい？ ほんとに馬は他人の馬で、軛も君のぢやないんだぜ、驅つて見ろ、止まらないから』

馭者のいふことは私には正しいやうに思はれた。

『實さいに』と私は云つた『なぜ、お前さんはこの近くに人家があると思ふんです？』

『なぜつて、風が彼方から吹いて來たでせう』とその旅の男は答へた『それで、私は煙の匂ひがするのを嗅いだのですよ。つまり、村がこの近くにあるしるしです』

彼の機智と感覺の鋭敏なることゝは私をおどろかした。私は馭者に馬車をやるやうに命じた。

馬は困難して、深い雪を踏んで進んで行つた。馬車は靜かに搖れて、或ときは雪の堆積の上へ乘りあげ、或ときは窪みのなかへ落ちこんで、右へぐら〳〵と動搖するかと思へばこんどは又左へぐらついた。これはちやうど暴風雨の海を航海する船によく似てゐた。サウエーリイチは絶えず私の脇腹にぶつかつては嘆聲を洩らしてゐた。私は莫蓙を下へおろして、外套にくるまり、吹雪の守唄をきゝ、靜かに馬車のゆく動搖にゆられながらうと〳〵とまどろみはじめた。

私は夢を見た。その夢は私は決して忘れることができなかつた。そして私は今日まで自分の生涯のいろ〳〵不思議な出來ごとゝその夢とを想ひあはすとき、そのなかに豫言的感なるものを見るのである。讀者諸君は私のいふことを容れてくれることであらう。何となれば、人間は極力迷信なるものを蔑視するにもかゝはらず、迷信に從ふに如何にふさはしいものであるかといふことを、諸君は多分は經驗に依つて御存じのことであらうから。

私は實在が幻想にうち負けて、眠りそめの不明瞭な夢の中で幻想と一致するときの、感情と魂の狀態にあつたのだ。私はまだ吹雪が荒れてゐるやうに思はれた。そしてわれ〳〵はまだ雪の曠野をまださまよつてゐるやうな氣がした……とそのとき、急に門が私の目にとまつた。そして私は私達の田舍の貴族屋敷へはいつて行つた。私のまづ最初の考へとして、父が私がわがまゝ勝手

に自分の生れた親の家へ歸つて來たのを叱りはしないだらうか、そして歸つてきたことを故意にした背信であると思ひはしないだらうかといふおそれがあつた。私は不安なおちつかない氣もちを抱いて、馬車から降りた。そして見ると、母がふかい悲しみの表情をうかべて玄關へ私を出むかへてゐる。

『靜かにして頂戴』と母は私に云つてゐるのだ『お父さまがね、もうお歿くなりにならんばかりの御病氣でね、お前に別れを告げたがつていらつしやるの』

恐怖にうたれた私は、母のあとについて寢室へやつてゆく。見ると、部屋のなかにはかすかにあかりが點されてゐる。寢臺のそばには人々が悲しげな顏つきをして佇んでゐる。私はしづかに寢臺のそばへ近よつてゆく。母は寢臺におろされてあつた帷をあげて、云ふ。

『貴夫、アンドレイ・ペトローイツチ、あのうペトルーシャが歸つてまゐりましたのよ。ペトルーシャがね、貴夫の御病氣のことをきいて、かへつてまゐりましたの。祝福してやつて下さいまし』

私はひざまづいて、目を病人の上にそゝいだのであつた。どうしたつて云ふのだらう？……見れば、その寢臺のなかには私の父のかはりに、黑い顏髯を生やした百姓が愉快さうに私をながめ

ながら寢てゐるのだ。私は不審にうたれて、母の方をむいて云つた。

『これはどうしたつていふのです？　これはお父さんではありませんよ。何のために、私はこんな百姓の祝福をねがはなければならないのです？』

『どちらでも同じことなのよ、ペトルーシヤ』と母は私に答へた『このお方はね、お前の假りのお父さまなの。このお方のお手に接吻をおし。そしてお前の祝福をさせておあげなさい……』

さう云はれて、私は同意しなかつた。すると、その百姓は寢臺からとびおりて、うしろにあつた斧をとり出して、それを四方八方にふりまはしはじめた。私は逃げようとおもつた……が、できなかつた。部屋のなかは死骸にみたされた。私は死骸につまづき、血の溜りに辷つた……そのおそろしい百姓は深切に私を呼んだ。

『こはがつちやいけない、俺らの祝福をうけにそばへおいで』

私は恐怖と當惑とに捉はれた……かうした瞬間に、私は目がさめたのであつた。馬どもはとまつてゐた。サウエーリイチは私の手をもつて引ぱりながら云つてゐた。

『若旦那、お降りなさい――着いたのですよ』

『どこへ着いたのだい？』と私は目をこすりながらきいた。

『今晩とまるところへですよ。神樣のお助けで、まつすぐにこゝの垣根にぶつかつたのです。さ若旦那、お降りなさい、早く、そして火にあつたまつた方がよろしい』

私は馬車から出た。吹雪はまだ續いてはゐたが、もうずつと衰へた力しかもつてゐなかつた。目玉を抉りとられてもわからないほどに、眞暗であつた。そこの主人は提燈を着物の端にかくして風をさけながら、門のところへわれ〳〵を出むかへた。そして私を狹いが、しかしかなり清潔な部屋のなかへ案内した。松明がその部屋のなかをてらしてゐた。壁間には旋條銃と、長いコサック帽とがかゝつてゐた。

こゝの主人は生れはウラルのコサックで、六十歳ばかりの、まだ活〻とした活潑な人と思はれた。サウエーリイチは私のあとから茶道具をもちこんで、もう私には決して必要なものであるとは思はれなかつたところのお茶の用意をするために、火をもとめた。主人は世話やきにたちまはつた。

『あの路案内をしてくれた人はどこにゐるの？』と私はサウエーリイチにたづねた。

『こゝにをりますよ、貴方』といふ聲が上の方から答へた。

私は煖爐の上にある棚の寢床を見た。そして黑い頤ひげと二つの輝いてゐる目とが目についた。

『どうだね、お前さん、凍えたのかい？』

『一枚のうすつぺらな外套を引かけたきりぢや、どうして凍えないで居られませう！　毛皮の上衣があつたのですよ、別にかくし立てすることもないから申しますがね、昨日のことでさ、寒さは大したこともあるまいと思はれたので酒屋へ質においちまつたのですよ』

このとき、主人がたぎつてゐるサモワールをもつて此部屋へはいつてきた。私はかの路案内の男にお茶を一杯くれてくれるやうにたのんだ。その百姓は寢床からおりてきた。彼の容貌は私には珍らしく思はれた。彼は四十歳ばかりで、中背、痩せて、廣い肩をもつてゐた。その黑い頤髯のなかには、白毛が見えてゐた。いき〳〵とした大きな兩眼は、よくぎよろ〳〵と動いてゐた。彼の顏はかなり愉快な、しかしまた瞞着兒のやうな表情をもつてゐた。髮の毛はまるく刈りこまれてあつた。そして破れた百姓外套を着て、足には韃靼人のはくだぶ〳〵したズボンをはいてゐた。私は彼にお茶のはいつたお茶碗をもつて行つてやつた。彼はお茶を味ひ飲んで、ときをり顏をしかめた。

『旦那、私に一つかういふお惠みをおかけ下さいませんか……お酒をコップに一杯もつて來させていたゞきたいもので。と申しますのは、お茶は私どもコサックの飲みものではありませんです

からな』

私はよろこんで彼のねがひを充たしてやつた。主人は戸棚から酒の角壜とコップとを取り出して、彼の方へもつて行つて、その顏をぢいと見つめてゐたが

『おや』と彼は云つた『君はまたこの土地へやつて來てゐるんだね！　どこから神樣に連れてきて頂いたのだい？』

私の道案内の男はさうきかれて意味ありげに目くばせをして、寓話でもつて答へた。

『野菜畑で飛んで、蝿の實を啄いたのさ。婆さんが小石を投げたが、よこへ外れちやつた。ときに、お前さんたちはどうだね？』

『なアに、俺たちのことなんざあ！』と主人は答へて、やはり意味のある言葉を續けて云つた『晩の祈禱式に鐘を鳴らしはじめたところがさ、坊主のおかみが許さないんだ、坊主がお客に行つて留守で、お寺にや惡魔がゐたからだよ』

『おだまりよ、おぢさん』私の道案内の男はさう云つた『小雨が降れば茸も生えるだらうよ、そしてさ茸が生えれば籠もあるだらう。だが今はな……』そこで彼は再びめくばせをした『斧を背中にかくしておいでよ、林の監督の奴がうろついてゐるからナ。旦那、旦那の健康をお祝ひいた

じます！』

さう云つて、彼はコップをとりあげ、十字を切つて、一息にその酒をのみほしてしまひ、それから私にお辭儀をして又もとの寢床へかへつて行つてしまつた。

私はさうした泥棒の合言葉みたいな話からは、その節は何ごとも理解することができなかつた。しかしずつとあとで、その話は一七七二年の叛亂（譯者註、エカチエリーナ二世の時、ポーランド叛亂す）ののちに鎭壓されたばかりの、ウラルのコサック軍に關してのことなのであつた事を察した。サウエーリイチは非常に不滿足さうな顏つきで、彼等の話をきいてゐた。彼は胡散くさうに或ときは主人を眺め、或ときは道案内の男を眺めたりしてゐた。この宿屋は、卽ちこの土地の言葉で云へば旅籠（クレヨート）は曠原のまんなかにあつて、あらゆる村落からはかけはなれてをり、まるで泥棒の家によく似てゐた。しかし、せんすべはなかつた。もつと路をつゞけてゆかうと考へることもできなかつた。サウエーリイチが不安を抱いておちつきがないことは、私を大へん面白がらした。その間に、私は宿泊する支度をした。そして長椅子の上に横になつた。サウエーリイチは思ひきつて、煖爐（ペーチ）の上の寢床へゆく支度をした。主人は床の上にねころがつた。まもなくこの小屋のなかのみんなは、鼾をかきはじめた。私も殺されたものゝやうに、眠りにおちいつた。

あくる朝、かなりおそく目をさまして、私はあの吹雪がをさまつてしまつたのを見た。太陽がきら〳〵と輝いてゐた。雪は眩ゆい布を敷しつきめたかのやうに、果しなき曠野に積つてゐた。馬どもは馬車につけられた。私は宿の主人に對して勘定をすました。彼はわれ〳〵からそれ相當の宿代だけしかとらなかつたので、さすがのサウエーリイチもいつもの自分の習慣どほり主人と爭ひはじめたり、宿代のかけ引きをやつたりしなかつた。そして昨日の猜疑はすつかり彼の頭から消え去つてしまつてゐた。私はかの道案内をしてくれた男を呼んで、きのふ助けを與へてくれたお禮を云ひ、サウエーリイチに命じてこの男に酒手半留（ルーブル）をくれてやるやうに云つた。ところがサウエーリイチの奴は顏をしかめた。

『酒手に半留ですつて！』と彼は云つた『なぜですか？　若旦那があの男にこの宿まで案内させなすつたお禮なんですか？　それあ、若旦那、あなたのお勝手ですよ、わたし達にはそんな餘分な半ルーブルなんてお金はないのですからね。誰にも彼にも酒手なんどやつてゐちや、しまひにゃ自分が飢ゑなければなりませんよ』

私はサウエーリイチと爭ふことができなかつた。私が彼に誓つたとほり、金は全然彼の支配のもとにあつたのだ。しかしながら、私は自分を不幸からでないまでも少くも非常に不愉快な狀態

から救ひ出してくれた人に、お禮ができないなんて情なかつた。

『いゝよ』と私は冷淡に云つた『お前が半ルーブルをやるのがいやなのなら、何か僕の着てゐるものを剝がして呉れるがいゝよ。あの男はあまりと薄着すぎる。僕の兎の毛皮の上衣をくれておやりよ』

『どういたしまして、若旦那、ビョートル・アンドレーヴイッチ！』とサウエーリイチは云つた『なぜ、あの男に貴方の兎の毛皮の上衣をくれてやるのです？　あの男は、あの犬めはもうそれを着て最初にとびこんだ酒店で、それを飲みしろにしてしまひますよ』

『おぢいさん、それあ、俺がのまうとのむまいと、なにもお前さんの損ぢやないだらう』とその浮浪人は云つた『旦那が御自分の體からぬいでこの俺に下さらうといふんだよ。それあ、旦那のお心なんだ。だが、お前さんは云ひさからはないで旦那のおつしやることをよくきくのが、召使の勤めなんだよ』

『お前は神さまがおそろしくないんだな、泥棒め！』サウエーリイチは腹立たしげな聲で彼にさう云つた『お前は、若旦那が物心のつかない子供だと見てとつてゐるんだろ、そしてさ、若旦那が慾のないのにつけ込んで、その上衣を盗みとらうと思つてゐるんだ。どうしてお前なんどに毛

皮の上衣が要るんだい？　お前はそんな呪はれた肩に、毛皮の上衣なんぞつけるわけにもゆくまいて』

『利口ぶらないでおくれよ』と私はサウエーリイチに云つた『すぐと此處へあの毛皮の上衣をもつておいで』

『まあ、とんでもないことです！』と私のサウエーリイチは呻つた『あの兎皮の上衣はまだまるで新しいんですよ！　誰かほかの人にならまだしも、すかんぴんの酔つぱらひにくれてやるなんて！』

さりながら、兎皮の上衣はもつて來られた。この百姓はそこでそれの寸法をはかりはじめた。實さいのところ、その上衣は私にはまだ十分着られるのであつたが、彼にとつてはやゝ狹かつた。けれど、彼は何とかかとか工夫をして、その縫ひ目をぴり〳〵云はせながら着こんでしまつた。サウエーリイチは縫ひ目がぴり〳〵と綻びはじめる音をきいては、もうほとんど叫び出さずにはをられないほどであつた。その浮浪人はさうした私の贈物をもらつて、大變滿足さうであつた。彼は私を馬車まで見おくつてきて、低くお辭儀をしながら云つた。

『旦那、ありがたうございました！　貴方の善い行ひのために、神様が貴方をおほめ下さいます

やうに。私はいつまでも旦那のお惠みを忘れませんでございます』

彼は自分のゆく方角へ行つてしまつた。そして私はサウエーリイチの悲しみなんぞには注意を拂はないで、また遠くの旅へ出發した。そして早くも昨日の吹雪のことやあの道案内をしてくれた男のこと、それからあの兎皮の上衣のことを忘れてしまつた。

オレンブールグへついて、私はまつすぐに將軍のところへ出頭した。私は背が高いが併し老衰のためにもはや腰のまがつた男に出あつた。彼の長い髪の毛はすつかりまつしろであつた。その着てゐる古い、色のさめた軍服は、アンナ・ヨアンノウナ女帝(譯者註、ピョートル大帝の姪にあたる。大帝よりも三代後に即位した。一七三〇—四〇。)時代の軍人を彷彿せしめた。それに彼の言葉にはひどくドイツ訛りがひゞいてゐた。私はその老人に私の父からの手紙を手わたした。父の名前を見ると、彼はすばやくちらりと私の顔を見た。

『おや〳〵!』と彼は云つた『あのアンドレイ・ペトローヴイッチがまだお前さん位な年頃だつたのは、ついこの間のことだつたやうに思はれるのに、もうあの人にはこんな若い息子があつたのかなア— ほんとに時だ、時だ、時といふものは爭へんー』

彼は手紙を開封して、低聲に自分の註釋も加へて讀みはじめた。

『——仁慈なるアンドレイ・カルローヴイッチ閣下、小生は閣下にお願ひ申しあげます……——これはまあ、何といふ遠慮ぶかいこつた? まあよくもあの男は恥かしくないナー もつとも軍規なるものは第一に大切なことだが、といつて昔の友人に對してこんな書き方をするものか?……——閣下はお忘れにならないことでせうが——うむ——故人となられたあの元帥の麾下にゐて……行軍をした……ときに……その同じ……カロリーシカを——おや〳〵兄弟ー あの男はまだわれ〳〵の昔の惡戯を覺えてゐるのかね?——餘事はさておき……閣下に小生の惡戯息子をお願ひいたしたいのです——うむ〳〵——悴を針鼠の手袋のなかに保つて……——針鼠の手袋つて何のことだらうね? これはきつとロシヤの諺にちがひない……ねえ君、針鼠の手袋のなかに保つつて何といふことだね?』

彼はさうくり返しいひながら、私の方をむいた。(譯者註、針鼠の手袋のなかに人を保つとは、無慈悲に人を使役するといふ意味のロシヤの諺である。)

『それはかういふ意味をもつてをります』と私は出來るだけ無邪氣な樣子つきをして彼の問ひに答へた『人をあまりきびし過ぎないやうに、深切にあしらつて、出來るだけ自由を與へることを針鼠の手袋のなかに保つと申します』

『うむ、なるほどナ……――どうか悴には自由をお與へ下さらないで――……いや、どうも針鼠の手袋は君がいふ樣な意味ではないらしいぞ……――それに就きましては……悴の旅行券がこゝにあります――どれ、どこにある？　うん、これか……――セミョーノフ聯隊に編入されてあるのですが――……よろしい、よろしい、萬事は手ぬかりなくやつてあげるから――小生が官位なくして、只むかしの親友として閣下を抱くことをお許し下さい――さうか！　とう〳〵用件はわかつた！　そしてと、かう〳〵しか〳〵と……』

『さて、君』彼は手紙をよみ終へ、私の旅行券を傍において、さう云ひだした『萬事は都合よく取扱つてあげるがね、君は將校として△△聯隊へ編入替されるんだ。そして君が時期をとりにがさないうちに、明日すぐとベロゴールスク要塞へゆきたまへ。その要塞へ行つて、君はミローノフ大尉の配下となるんだ。この大尉は深切な、正直な人だからな。彼處で君は實際の軍務に就いて、軍律を習ふんだね。オレンブールグにゐちや、君のなすことは何もないんだ。何もすることがなくて、ぼんやりしてゐるつてことは、若いものにや害がある。ところで、今日は私と一しよに食事をお願ひしようかね』

――だん〳〵と困つたことになつて來たな！　――と私は心のうちで思つた――僕がまだお母

さんのお腹の中にゐたときに、もう近衛の軍曹になつてしまつてゐたことは、いまの僕にどんな役に立つのか？　僕はどこへ連れてゆかれるのだらう？　△△聯隊へ、邊僻な要塞へ、キルギス草原の國境へ！……――。

私はアンドレイ・カルローヴイッチのところで、この人とそれからこの人の老副官と三人で食事をともにした。ひどいドイツ式の經濟はその食卓を支配してゐた。そして私は、時をり自分の獨身の食卓に餘分な客たちを見なければならぬ恐怖が、幾分は私がとりいそいで守備隊へ出發したといふ原因をなしたものと思ふ。あくる日、私は將軍に別れをつげて、自分の任地へむかつて出發したのであつた。

三、要　塞

おれらは要塞でくらしてゐる。
パンを喰ひ、水たのんでゐる。
だが、おそろしい敵がおれらの方へ、

肉饅頭をとりにやつて來たら、
その客人に小宴をひらいてやらう、
大砲に散彈をこめてやらう。

兵隊の唄。

古人はわれ等の師父である。

未成年者。

ペロゴールスク要塞はオレンブールグから四十露里（ウエルスト）（譯者註、一ウエルストはわが九町四十五間にあたる）の距離にあつた。道路は嶮岨なるウラル河の岸邊に沿うてすゝんでゐた。河はまだ凍りはじめてゐなかつた。そして鉛色の波は白い雪におほはれた單調な兩岸の間に、憂鬱に黑く見えてゐた。そのむかふにはキルギスの草原がひろがつてゐた。私は大部分はものかなしいふかい物思ひに耽つてゐた。守備隊生活は私にとつてはあまり魅力的な力をもつてゐなかつた。私は自分のこれからの上長官であるミローノフ大尉を、努めて想像して見ようとした。そして大尉を自分のつとめのほかには何ごとも知らない、そしてあらゆる些細なつまらないことのために私を

パンと水の禁錮に處さうとしてゐる、きびしい、短氣な老人のやうに想像した。さうかうするうちに、あたりはほの暗くなりはじめた。われ〳〵はかなり早く馬車を驅つた。

『要塞まではまだよほどあるのかね？』と私は自分の馬車の馭者にきいた。

『遠くはありません。』と彼は答へた『ほらもう見えてゐますよ』

私は嶮しい堡壘や櫓、それから濠などが見えるものと思つて、あたりを見まはした。けれど、丸太棒の垣根にとりまかれてゐる小ぽけな村のほかには何ものも目にはいらなかつた。片側の方には三つ四つ半ば雪におほはれた、乾草のつみ重ねたのがあつた。そして又べつの側には、ものうさゝうにぶらさがつてゐる樹の皮製の羽をもつたところの、ひんまがつた風車があつた。

『一たい要塞はどこなんだね？』と私はおどろいて訊ねた。

『えゝ、これがさうなんですよ』ちやうど馭者はいまはいりかけてゐたところの村を指しながらさう答へた。

私は村の入口のところで、古い鑄鐵の大砲を見た。通路はせまくつて、まがつてゐた。百姓小屋は低くつて、その大部分が藁で葺いてあつた。私はまつすぐに、指揮官のところへ馬車をやるやうに命じた。まもなく馬車は小高い場所の村の教會のとなりに建てられてある、木造の小さい

家の前にとまつた……。

誰も私を出迎へるものがなかつた。私は玄關へはいつて行つて、玄關の間の扉をあけた。そこでは老癈兵が卓子の上に腰かけて、綠色の軍服の肘のところに青い繼布をぬひつけてゐた。私は彼に私のやつてきたことを報告してくれるやうにたのんだ。

『おはいり下さい、貴方』とその癈兵は答へた『私どもはうちに居りますから』

私は古風に飾りつけられた小さい部屋へはいつて行つた。その部屋のすみつこには食器のはいつてゐる戸棚が立つてゐた。壁には框と硝子のはまつた將校の辭令書がかけてあつて、そのまたとなりにはキストリン及びアチヤコーフ(譯者註、ともに歐露の港市)占領の有樣を描いた粗末な繪、それから「妻の選擇」及び「猫の埋葬」の繪畫が飾られてあつた。窓のそばには袖無上衣をきて頭布を被つた老婦人が腰かけてゐた。彼女は將校の軍服をきた、片目の老人が兩手にかけてもつてゐる絲を捲きかへしてゐた。

『貴方、なに御用でございませうか?』と彼女は自分の仕事をし續けながらきいた。私は勤務にやつて來たこと、そして自分の義務として大尉殿に面會に上つたことを答へて、同時にそこにゐる片目の老人が司令官だと思つて、その方へ身を轉じたのであつた。ところが、その女主人は私

の談を遮つた。

『イワン・クージミイチはいま留守でございますの』と彼女は云つた『ゲラシム神父さんのところへお客さまにまゐつてゐませんのですよ。でも、どちらでもかまひませんわ、貴方、私はその家内なのでございますから。どうぞよろしくお願ひいたします。お掛け下さいまし、貴方』

彼女は女中を呼んで、コサツク兵の下士を呼んでくるやうに云ひつけた。老人はその片一方の目一つで、私をもの珍らしさうにぢろ〳〵と眺めてゐた。

『はなはだ失禮でございますが』と彼は云つた『貴方はどこの聯隊へお勤めになる筈でございますか?』

私は彼の好奇心を滿足させてやつた。

『ところで、はなはだ失禮でございますが』と彼はなほ續けて云つた『なぜ、貴方は近衛から守備隊なんぞへ轉任なさつたのでございますの?』

私はそんなことは司令官の意志にあつたことだと答へた。

『おほ方、近衛の將校殿としてはふさはしからぬ行ひがおありだつたからでございませうな?』と倦まずに質問を續けた。

『下らないことをおしやべりするのは澤山ですよ』と大尉夫人は彼に云つた『ねえお前さん、若いお方は旅でお疲れになつてゐるのですよ。お前さんのことゞころではないんですよ……その兩手をちやんとまつすぐにしておいでなさい……で、貴方』と彼女は私の方へむいて、續けて云つた『貴方はこんな邊僻な土地へ追ひやられなすつたことをおなげきなさいますな。貴方が最初のことでも貴方がおしまひのことでもありませんのよ。辛抱しておいでになれば、好きになりますよ。シユワーブリン・アレクセイ・イワーヌイチは人殺しをしましたためにね、私どもの方へ轉任させられてからもうこれで五年目になりますわ。あの人がどういふ罪に迷つたのですか、神様が御存じのことで私どもの知つたことではありませんけれど、この人はね、貴方考へてごらんなさいましよ、或る一人の中尉と一しよに市の郊外へまゐりましてね、お互にサーベルを抜いて、それから突きあひをはじめましたの。そしてアレクセイ・イワーヌイチはその相手の中尉を突き殺したのですよ、而かも二人の立會人の前でね！　貴方、どうお思ひでございます？　罪には先生が要らないつて申しますけれど、ほんとのことですわね』

このとき、若い、體格のいゝコサック下士がはいつてきた。

『マクシームイチ！』と大尉夫人は彼に云つた『この將校のお方を一番きれいな宿舍へ御案内申しなさい』

『承知いたしました、ワシーリサ・エゴローウナ』とその下士は答へた『このお方をイワン・ポレジャーエフさんのお所へお入れ申しちや知何でせうか？』

『冗談お云ひでない、マクシームイチ』と大尉夫人は云つた『ポレジャーノフさんのところは大へん狹いでせう。あの方はまた私には教父さんだし、あの人も私のうちがあの人の上長官だつてことを知つてゐますよ。この將校のお方を……貴方、貴方のお名前と御父稱は何とおつしやいますかしら？』

『ピョートル・アンドレーイツチです』

『それではね、このピョートル・アンドレーイツチさんをセミョーン・クーゾフさんのところへ御案内申し。あの人は惡ものですよ、自分の馬を私んとこの野菜畑へ追ひ入れちやつたのですよ。で、マクシームイチ、どう、別に變つたことはなくつて？』

『おかげ樣と何ごとも異狀がございません』とコサックは答へた『たゞ伍長のプラホーロフが風呂屋で湯桶のことからウスチーナ・ネグリーナと毆りあひをやりましたばかりです』

『イワン・イグナーチイツチ！』と大尉夫人はめつかちの老人に云つた『プラホーロフとウスチー

ナとを調べあげなさい、どちらがいゝのだか悪いのだか。そして二人とも罰しておやりなさい。それではマクシームイチ、御苦勞ながらさうして下さい。ピョートル・アンドレーイッチさん、マクシームイチが貴方の宿舍へ御案内申しあげますから』

私は別れを告げた。コサック下士は私を宿屋の小屋へ案内して行つた。その小屋は要塞の一番はしにあつて、高い河岸の上に建つてゐた。小屋の半分はセミョーン・クーゾフの家族が占領してゐて、その片半分が私に分たれたのである。なかは只一つの部屋があるきりで、かなり清潔であり、仕切りによつて二つに區分されてゐた。サウエーリイチは部屋のなかをとり片づけはじめた。私は狹い窓からそとを眺めはじめた。眼前には憂鬱な草原がひろがつてゐた。斜めむかふには五六軒の百姓小屋が立つてゐて、通路に數羽の牝鷄が遊んでゐた。老婆がかひば槽をもつて入口のところに立つて、豚を呼んでゐた。豚は彼女の呼び聲に親しげな唸り聲をあげてゐた。私はほんとに、何といふ土地で自分の青春を送るやうに運命づけられたのだ！　憂鬱が私を捉へた。私は窓ぎはをはなれて、サウエーリイチが忠告するにもかゝはらず、夜食もとらずに眠るために横になつた。彼は悲しさうにくり返してゐた。

『あゝ神様、若旦那は何もおあがりになりません！　もしかお子様が病氣におなりになつたとお

きゝになつたら、くにの奥様はどんなにおつしやることでせう？』

翌る日の朝、私が着物を着替へはじめるとすぐ扉があいて、若い將校がひとりはいつてきた。脊の高からぬ、淺ぐろい、甚だ醜いがしかし大變活きゝとした顏つきの青年である。

『失禮いたします』と彼は私にフランス語で云つた『私はもう禮儀ばつた事をぬきにして、貴方とお知りあひになりたくてまゐりました。きのふ、私は貴方がこゝへお着きになつたといふことをきゝました。どうとかして人の顏を見たいものだといふ希ひが、もう我慢できないほど私を占領してしまつたのですよ。そのことは、貴方がこゝで暫くお暮しになればおわかりになりますがね』

私はこの將校が決鬪をやつたが爲に近衛から除名されて、こゝへ轉任して來た男だと推察した。私たちは直ちに知合ひとなつた。シュワーブリンは大變才ばしつた男であつた。彼の話は徹底して奇拔で、面白かつた。彼は非常に愉快さうに私に指揮官の家庭の話、その交際社會、それから運命が私を導いてきたこの土地の話などをきかしてくれた。私はきのふ指揮官の家の玄關の間で軍服を繕つてゐた、その癈兵が私の部屋へはいつてきて、ワシーリサ・エブローウナからの用事だと云つて彼女が正餐に私を招待してゐると告げたときには、心から笑つた。シュワーブリンは自

分も私と一しよにゆくからと申し出た。

われ〳〵は指揮官の家へゆく途中で、長い辮髪をたらし、三角帽を被つた老癈兵が二十人ばかり廣場にゐるのを見た。彼等は横隊に整列してゐた。その前には指揮官が立つてゐた。元氣のある、背の高い老人で、夜帽を被り、部屋着をきてゐた。彼はわれ〳〵がやつてきたのを見て、われ〳〵の方へやつてきて私に數語深切な言葉をかけて、再び教練の指揮をやりはじめた。われわれは教練を見るために止まらうとしたが、彼はすぐとあとから歸ることを約束して、われ〳〵が先にワシーリサ・エゴローウナのところへ行つてゐてくれるやうにたのんだ。そして

『それに、こんなことを』と彼はつけ加へてそつと云つた『君たちにや見る必要がないんだから』

ワシーリサ・エゴローウナはわれ〳〵にさばけたもてなし方をした。そして私をまるで百年の知己でゞもあつたかのやうに、深切に扱つてくれた。癈兵とパラーシュカとが食卓の用意をした。

『なぜ、うちのイワン・クージミイチはけふはこんなに教練に身が入つてゐるのでせうね？』と大尉夫人は云つた『パラーシュカや、旦那を食事なさるやうに呼んでおいで。それから、マーシャはどこにゐるの？』

するとそこへ、十八歳ばかりの娘がはいつてきた。丸がほで薔薇色の顔をして、淡亞麻色の髪

は耳のうしろの方へなめらかにときつけてあつて、その兩耳はぽつと紅くなつてゐた。はじめてちらと見たとき、私は彼女が氣に入らなかつた。私は彼女をひが目で眺めてゐたのであつた。といふのは、シュワーブリンが大尉の娘のマーシアは全く馬鹿女だと話してくれてゐたからであつた。マリヤ・イワーノウナは片すみに腰かけて、刺繍をしはじめた。その間に、菜汁（シチー）が出た。ワシーリサ・エゴローウナは夫がかへつて來ないので、また〳〵パラーシュカを呼びにやつた。

『旦那にかうお云ひ、お客様がたが待つていらつしやいますし、菜汁が冷めてしまひますつて私が云つたつてね。きつとまだ、教練がすまないで、あの人は大聲があげたりないのだらうね』

大尉はまもなく、めつかちの老人に伴はれてかへつてきた。

『まあ、どうなさいましたの、貴夫？』と妻は彼に云つた『お食事はもうずつと〳〵前に出來てゐますのに、貴夫はなか〳〵歸つてらつしやらないのですもの』

『だつてねえ、お前、ワシーリサ・エゴローウナ』とイワン・クージミイチは答へた『私は教練をやつてゐたのだよ、兵隊たちを教へてゐたのだよ』

『もうそんな事は澤山ですよ』と夫人は云ひかへした『兵隊を教へることばかりが名譽ではありませんわ、兵隊たちも教練をしようとはしないし、貴夫だつても教練をさう大事とは思つていら

つしやらないのですもの。家にゐて、神様にお禱りしてゐた方が、よつぽどよどさんすわ。どうぞ大事のお客様方、食卓におつきなすつて下さいまし』

われ〳〵は食事をするために席についた。ワシーリサ・エゴローウナは片ときも默つてゐないで、私にいろ〳〵な質問をあびせかけた、私の兩親はどんな人たちだとか、まだ二人とも生きてゐるかとか、どこに住んでゐて兩親の財産はどれだけあるかとか。私の父が三百人の農奴のゐる領地をもつてゐることをきいて、彼女は云つた。

『まあ、すばらしい！　世の中にはお金持の人たちもあればあるものですことね！　私たちと云へば、ねえ貴方、たつたひとりの女中のパラーシュカがゐるきりですわ。それでもおかげ様で、細々とどうにか暮しをしてゐますの。たつた一つの不仕合せは、うちのマーシャがもうお嫁にゆかなければならない年頃でゐますのですけれど、あの娘にはお嫁に持參するものがほんとにどれだけあることでせう！　目の荒い櫛に箒、それからお湯にゆくだけしか間にあはない（まことに神様にはすまないことですけれど）三哥（コペック）くらゐなものですわ。いゝ男のかたがみつかればよろしいのですけれどね、さうでなければあの娘は嫁にゆくことなしに一生涯娘でゐなければなりませんのよ。』

私はマリヤ・イワーノウナをちらと見た。彼女はすつかり紅くなつてしまつて、涙さへ彼女の食事の上に落ちてゐた。私は彼女が可哀さうになつた。それで、いそいで話頭を轉じた。

『私はかういふことをきいたのですがね』と私はかなりとんちんかんに云つた『この要塞へバシユキル人が攻撃しようとしてゐるつていふのですが、ほんとうでせうか？』

『誰から君、そんなことをきいたのです？』とイワン・クージミイチが尋ねた。

『オレンブールグでそんなことをきかされたのですが』私はさう答へた。

『それあ愚にもつかない話です』と大尉は云つた『われ〳〵はながい間そんなことは何もきかない。バシユキル族といへば、臆病な人民だし、キルギス族は教化された種族だからね。だから、われ〳〵を襲撃するやうなことは萬なからうと思ふ。むかふから突かゝつてくればさ、私は奴等がもう十年ぐらゐはぐうの音も出ないやうに、うんと懲らしめてやるよ。』

『さういふ危險にとりかこまれて』と私は大尉夫人の方をむきながらつゞけて云つた『この要塞にゐのこつてゐるのは、貴女にもおそろしいことではないのですか？』

『習慣ですよ、貴方』と彼女は答へた『私どもが聯隊からこゝへ轉任してきてから此方へ二十年ばかりといふものは、私はどの位あゝした呪はしい異教徒たちをこはがつたことでせう！　時を

り、毛皮の帽子を見たり、その叫び聲をきいたりするとすぐに、ほんとに貴方、お信じになりますかしら、もう私は失神してしまふばかりでしたの！　でも、いまはもう惡漢たちが馬で要塞の近所を駈けまはつてゐるなんてことをきかされても、自分の場所を動かないほどに馴れてしまひましたの』

『ワシーリサ・エゴローウナさんは最も勇敢な御婦人でいらつしやいますよ』とシュワーブリンは大げさに口をさしはさんだ『それは大尉殿が御證明なさることができます』

『さうだ、ねえ君』とイワン・クージミイチは云つた『この女は臆病女の仲間ぢやあないよ』

『ところで、マリヤ・イワーノウナさんはどうですか？』と私はきいた『やつぱりお母様と同じやうに勇敢でおゐでですか？』

『マーシャが勇敢ですかつて？』彼女の母親はさうこたへた『いゝえ、マーシャは臆病娘ですのよ。まだいまも鐵砲の音をきくことができないで、もうすつかりふるへ上つてしまふのですものね。ちやうど今から二年あとのことですけれど、うちのイワン・クージミイチがね、私の命名日にこの要塞にある大砲をうたうと考へましたの。するとまあ、あの娘ときたらもう怖ろしさにあの世へでも行つてしまはんばかりになりましたのよ。それでもうその時から今日まで、そんな因つ

た大砲は發砲しないでゐますの』

われ〳〵は食卓をはなれた。大尉夫妻は寢に赴いてしまつた。私はシュワーブリンのところへ行つて、彼とゝもにその夜をあかしたのであつた。

四、決　鬪

彼よ、よろしい、身がまへせよ。
いかにわが、汝の體を貫くかを見よ。

クニャジュニーン

數週間はすぎてしまつた。そしてペロゴールスク要塞における私の生活は、私にとつては耐へられないどころか、愉快なものとさへなつてしまつた。要塞指揮官の家では、私は身内のものと同じやうにとり扱はれた。大尉夫妻はともに最も尊敬すべき人たちであつた。下級な兵隊から昇進して將校となつたイワン・クージミイチは教育のない、純樸な人であつたが、しかし最も正直

な、善良な人であつた。彼の妻のワシーリサ・エゴローウナは彼の投げやりな平常と調和せんがために、彼を支配してゐた。ワシーリサ・エゴローウナは自分の家庭内のことゝ同じに、軍務のことにも世話をやいた。そしてまるで自分の家と同じやうに要塞のなかのことを處理し、指揮してゐた。マリヤ・イワーノウナはまもなく人に對して羞むのをやめてしまつた。私は彼女と知己になつてしまつた。私は彼女のなかに高尚なる、感動しやすき娘心を見出した。それとはわからず自然と私はその善良なる家庭に、また片目の守備隊中尉であるイワン・イグナーチイッチに結びついてしまつた。

私は將校に昇進した。軍隊勤務は私を苦しめなかつた。のんきな要塞にあつては閲兵もなければ教練もなく、當番勤務もなかつた。指揮官は時々自分の特別な興味によつて兵隊たちを教練したのであつたが、兵隊たちはみんなまだどちらが右なんだか左なんだか解る程度には達しなかつた。而かも彼等はその何れかへ廻轉するに際して間ちがはないやうに各自十字を切つてやつて、その通りであつたのだ。シュワーブリンのところには數册のフランス語の書籍があつた。私はそれらを讀みはじめた。そして私の心には文學に對する興味ができて來た。朝はいつも私は本を讀み、飜譯の練習をやつた。またとき折りは詩作もやつた。正餐はほとんどいつも指揮官の家でや

つて、普通半日はそこで暮すのであつた。またこの家へはとき〴〵神父ゲラシムがこの要塞のある村ぢうで一番のお喋べり女であるところの、自分の妻のアクリーナ・パムフイローウナを連れてやつてきた。私はむろんのことアレクセイ・イワーヌイチ・シュワーブリンとは毎日のやうに出逢つた。しかし、だん〴〵と彼の話は私にとつてはあまり面白くはなくなつてきた。指揮官の家庭に關する彼のいつもの冗談、特にマリヤ・イワーノウナに關する辛辣なる批評は、私には非常に氣にくはなかつた。要塞のなかではほかの交際はなかつた。だがまた私はほかの交際を望みもしなかつた。

オレンブールグの將軍の豫言があつたにもからはらず、バシュキール人どもは叛亂をおこさなかつた。平和はわれ〴〵の要塞全體を支配してゐた。だが、かうした平和は突然内輪におこつた爭ひのために破られてしまつた。

私が文學に耽りはじめてゐたことは、すでに述べたとほりである。私のやつてゐた試作はその頃ほひとしてはかなり佳かつた。それから數年たつて、アレクサンドル・ペトローヴイッチ・スマローコフ(譯者註、ロシヤの劇作家、諷刺詩作家である。一七一七—一七七七)はそれらのものを大變ほめてくれた。あるとき、私は小唄を書きあげて、滿足であつた。作者といふものは、とき

折り忠告を要求するやうな體裁で、忠實なる聽き手を探すものであることは、よく知られたことである。それで、私は自分の小唄をうつしとつて夫れをシュワーブリンのところへもつて行つた。彼はこの要塞中で詩作を鑑賞し得る只ひとりの人間であつたからだ。私はちよつとばかり前置きを述べておいて、それからポケットから手帖をとり出して、彼に次のやうな詩を讀んできかした。

愛する思ひをうち消しながら、
美しき者を忘れようと努めながら、
あゝ、マーシヤまでも避けながら、
私は自由を得ようと思ふのだ！

けれど、その目は私を虜にした。
絶えずその目は私の前にあつて、
私の心を困亂させた、
私の平安を破つてしまつた。

お前よ、私の不幸を知つて、
マーシヤよ、この惡しき所にゐる私を見て、
私がお前のために虜になつてゐることを、
不憫とおもつてくれよ。

「これを君はどう思ふね？」私は自分にまちがひなく獻じられるところの貢のやうに、シュワーブリンがほめてくれることを豫期しながらさうきいたのであつた。しかるに、悲しいことには、普通謙遜なるシュワーブリンは斷然私の詩はよくないと云つた。

「なぜ、よくないんだね？」と私はおのが悲しみをおしかくして彼に尋ねた。

「なぜつてさ」と彼は應へた「かうした詩は僕の先生のワシーリイ・キリールイチ・トレヂヤコーフスキイ*の詩によく似てゐるんだよ。僕はこの人の戀愛詩はよく覺えてゐるからね」（* 譯者註、エリザヴエータ女王朝に活動した文學者、詩韻學及び正字學を以て有名である。一七〇三―一七六九）

そこで、彼は私の手からその手帳をとりあげて、もつとも辛辣な態度で私を嘲弄しながら、一

行一句を無慈悲にしらべはじめた。私はがまんができなかつた。彼の手からその手帳をもぎとつて、もう決して彼には自分の作品は見せないからと云つた。シュワーブリンはその脅かしに對してもあざ笑つた。

『また見てゐようや』と彼は云つた『君がその言葉が守れるかどうか。詩の作家といふものはね、ちやうどイワン・クージミイチが正餐の前には必ず火酒(ウトカ)一杯が必要なのと同じやうに、聽き手なるものが必要なんだよ。ところで、柔かい情熱と愛の苦しみとを抱いてかきくどいてある、このマーシャつて云ふのは誰のことなんだね？　あのマリヤ・イワーノウナにちがひなからう？』

『そのマーシャが誰であらうが、君の知つたことぢやないよ』と私は顏をしかめながら答へた『もう僕は君の意見も、君の憶測も要求しないよ』

『ほー　うぬぼれ强き詩人よ、謙遜なる戀人よだ！』とシュワーブリンは時がうつるにつれて、いよ〳〵私を腹立たせながら續けて云つた『だがね、友人の忠告をきゝたまへ、もしも君が戀の成功を望むならばだね、そのときは詩なんぞ作つたつて駄目だつてことを忠告するよ』

『それあ君、どういふ意味なんです？　おつしやつて頂きませう』

『よろしい。それはね、なまめかしい詩なんぞ作る代りに、彼女に耳輪一對をくれてやれつてい

ふ意味だよ』

私の血は湧き立ちはじめた。

『だが、なぜ君は彼女に關してそんな意見をもつてゐるんだ？』私はやうやくのことに自分の不平不滿を抑へつけて、さう云つた。

『なぜつてさ』と彼はにく〳〵しい笑ひをうかべてこたへた『僕が實驗によつてあの女の性質、習慣を知つてゐるからだよ』

『君は嘘をついてゐる、惡黨！』私は夢中になつてどなつた『君は最も恥を知らぬ態度で嘘をついてゐる』

シュワーブリンの表情は變つた。

『僕は君をそのまゝでは見のがせない』と彼は私の手をつかみながら云つた『君は僕の名譽を恢復したまへ』

『どうぞ、君がお望みならば！』と私はよろこんでこたへた。

この瞬間、私は彼を引きさいてやりたいくらゐだつた。

私はすぐとイワン・イグナーチイッチのところへ行つた。そして手に針をもつてゐる彼に出逢

つた。彼は大尉夫人の依頼によつて、茸を冬の蓄へに乾しておくために絲にとほしてゐたのだ。

『や、ピヨートル・アンドレーイッチさん！』と彼は私を見て云つた『よくいらつしやいました！失禮ですが、どうしておいでになりました、何をやつていらしたのです？』

私は簡單に彼に、自分はアレクセイ・イワーヌイチ・シュワープリンと爭論をしたこと、そしてこのイワン・イグナーチイッチに私の立會人となつてほしいといふことを話した。イワン・イグナーチイッチはそのたつた一つの目玉をぐるつと大きくして私を見ながら、注意して私のいふことを聽きをはつた。

『貴方はかうおつしやるのですな』と彼は私に云つた『貴方はアレクセイ・イワーヌイチを刺し殺さう、そしてそれに就いては私が立會人でゐて貰ひたいとおつしやるのですな？　失禮ですが、さうなんですな？』

『たしかにさうです』

『どういたしまして、ピヨートル・アンドレーイッチさん！　なんだつて、貴方はそんなことを目論見なすつたのです！　貴方はアレクセイ・イワーヌイチと喧嘩なすつたのでせう？　なあに、大したことぢやありませんよ！　言葉の喧嘩に怪我はありませんよ。あの男が貴方の惡口を云つた、

それで貴方はあの男を罵りなさる。あの男が貴方の顏をぶつ、それで貴方はあの男の耳をぶたれる。その次はかう、その次はかうと――そして別れちやつたのですな。すれば、われ〳〵が貴方がたの仲裁をする段取りですよ。だのに、失禮ですが御自分の近しい人を刺すなんて、そんなことはいゝ事でせうかね？　もう已でに貴方があの男を刺殺してしまつたのなら――ああ、あの男はアレクセイ・イワーヌイチは仕方がないといふものですよ、私も實はあの男がきらひなのですからね。さあそこで、もしかあの男があべこべに貴方に風穴をあけたときにや、どういたします？それは何に似てゐませうな？　失禮ですが、誰がそんな馬鹿げたことをやりますかね？』

この老中尉の賢い判斷も、私を動かさなかつた。私はやはり自分の企てに我執してゐた。

『貴方の御都合のよろしいやうに』とイワン・イグナーチイッチは云つた『貴方のお考へどほりになすつて下さい。だが、なぜ私がそんなことの立會人にならなければならないのです？　何のためにです？　人間といふものは爭ひをするものですよ、失禮ですが、それが不思議なことでせうかね？　おかげ樣と私はスウェーデンとの戰ひや土耳古との戰ひに參加して、あらゆるさうしたことを飽きるほど見ましたよ』

私はどうにかかうにか、彼に立會人の義務なるものを說明した。けれど、イワン・イグナーチイ

ツチはどうしても私のいふことが理解できなかつた。

『どうぞ、貴方の御勝手になすつて下さい』と彼は云つた『私がそのことに關係しなければならないのなら、やつぱりイワン・クジーミイチ大尉殿のところへもゆかなければならないではありませんか。そして大尉殿に軍隊勤務の義務として、この要塞内に政府の利害とは相反する惡行がもくろまれてゐるつてことを、報告しなければなりませんよ。すれば、指揮官殿は必要なる手段をとらうとお思ひになることでせうから……』

私はおどろいた。そしてイワン・イグナーチイツチに何ごとも指揮官には話してくれないやうにたのみはじめた。やうやくのことに彼を說きつけることができた。彼は他言しないといふ約束をした。で、私は彼から遠ざかつてゐなければならぬと決心した。

晩は私はいつものやうに指揮官の家でおくつた。私は如何なる疑惑も起させず、またいやな問題を避けるために、努めて自分を愉快に、無關心に見せようとした。とは云ふものゝ私は白狀するが、私と同じやうな地位にあつた人たちが殆んど常に自慢してゐる沈着さをもつてゐなかつたのである。この晩、私はおだやかに靜かにしてゐようと望んでゐた。マリヤ・イワーノウナはいつもよりも以上に私の氣に入つた。もう今晩で彼女も見納めかも知れぬといふ思ひは、私の目では

彼女に何かセンチメンタルなものをつけ加へてゐた。シュワーブリンもやはりこゝへ來てゐた。私は彼をよこつちよへ連れて行つた、自分とイワン・イグナーチイツチとの話のことを報らせた。

『なぜ、われ〳〵に立會人なんぞが必要なんだね？』と彼はぞんざいに云つた『そんなものは抜きにしてすませようや』

われ〳〵は要塞の近くにある積藁のかげで決鬪をやること、明朝の六時にはそこへゆくことを約束した。われ〳〵は外見では非常に仲よさゝうに話してゐたので、イワン・イグナーチイツチは喜びのためにかう云ひすごしたほどであつた。

『とつくにさうならなければならなかつたのですよ』と彼は滿足げな樣子で私に云つた『わるい平和でもよい喧嘩口論よりかいゝもの、でなくなつて、多少不正直だつて丈夫で生きてられりや結構ですよ』

『え、何ですつて、イワン・イグナーチイツチ？』部屋の片隅でカルタ占ひをやつてゐた大尉夫人はさうきゝ咎めた『わたし、貴方が今云つたことを聞きそくなつたの』

イワン・イグナーチイツチは私の顏の不滿げな色に氣がついて、自分の約束をおもひ出し、どう答へてよいかわからないで狼狽してゐた。シュワーブリンはうまい工合に彼に應援した。

『イワン・イグナーチイッチは』と彼は云つた『私たちが仲なほりしたのを喜んで下すつてゐるのですよ』

『ぢや、一體貴方、貴方は誰と喧嘩なんぞをなすつたの？』

『私とビョートル・アンドレーイッチとかなり大きな辭ひをやりかけたのです』

『何がもとで？』

『全くのつまらないことからです、小唄のことからですよ、奥様』

『なぜ、喧嘩なんぞしなければならなかつたのです！　小唄なんかがもとでだつて、まあ！……そして、どうしてそんな喧嘩になつたのです？』

『それあ、かういふわけなんです、ビョートル・アンドレーイッチがつい此間唄を作つたのを、今日それを私のところで唄つたのです。ところが、私は私の好きな、かういふのを唄つたのですよ——。

大尉の娘よ、
夜なかに散歩にゆくな。

といふのをね。それで仲がわるくなつたのです。ビョートル・アンドレーイッチがむかつ腹を立て

かけたのですが、やがて誰だつて自分の好きな唄をうたふのは自由だと考へついたのですよ。それで、事はすんだのでした』

シュワーブリンの厚顏無恥はほとんど私を狂氣にさせんばかりであつた。だか、私のほかには誰も彼の亂暴無禮な恥かしめを理解するものがなかつた。少くとも、誰もその恥かしめに注意をむけたものはなかつた。小唄のことから話は詩人の方へ轉じていつた。そして大尉は詩人なんていふものはつまらない人間たち、甚だしき酒のみだと云つて、詩作は軍隊勤務にや反するもの、善良な人間には何等利益をもたらさないものとして、私がそんなことをするのをやめるやうに親しく忠告してくれた。

シュワーブリンがこの場へやつて來てゐることは、私には耐へがたかつた。私はとりいそぎ大尉やその家族に別れをつげて家へかへり、自分の劍をしらべてその切先をためしてみた。そしてサウエーリイチに朝の六時には目をさましてくれるやうに言ひつけておいて、眠りについた。

あくる日の約束の時間に、私はもうすでに積藁のかげにゐんで自分の敵手のくるのを待つてゐた。まもなく、彼もやつてきた。

『うつかりすると僕等はめつけられかも知れない』と彼は云つた『急いでやる必要がある』

二人は軍服をぬぎすてゝ、チョッキのみとなりめい〳〵に劍をひきぬいた。かゝる瞬間に、突然積藁のかげからイワン・イグナーチイッチと五六人の憲兵とがをどり出した。イワン・イグナーチイッチはわれ〳〵が指揮官のところへゆくやうに要求した。私たちは恨みをのんで仕方なく彼の云ふことに從つた。兵隊たちはわれ〳〵をとりかこんでゐた。われ〳〵はイワン・イグナーチイッチのあとについて行つた。彼はおどろくほど勿體ぶつた歩き方をして得々然と私たちを導いて行つた。

私たちは指揮官の家へはいつて行つた。イワン・イグナーチイッチは扉をあけて、大げさに『連れてまゐりました！』と云つた。すると、ワシーリサ・エゴローウナが私たちを出迎へた。

『まあ、貴方がた！　何ごとです？　なぜです？　どうしたのです？　この要塞のなかで人殺しをするなんて！　イワン・クージミイチ、すぐとこの人たちを營倉に入れて下さい！　ピョートル・アンドレーイッチ！　アレクセイ・イワーヌイチ！　此方へ貴方がたの劍をお出しなさい、お出しなさい、お出しなさい。パラーシュカや、この劍を二つとも天井裏へもつて行つておしまひ。ピョートル・アンドレーイッチ！　私は貴方がこんなおそろしいことをなさらうとは思つてゐませんでした。貴方はどうしてこんなことをして恥かしくないのです？　アレクセイ・イワーヌイ

チはよござんす、あの人は人殺しをしたゝめに近衛隊を除隊された人で、あの人は神様を信じてゐないのですから。だのに、貴方はどうなんです？　なぜ、貴方はそんな危い眞似をするのです？』

イワン・クージミッチ大尉はすつかり自分の妻の云ふことに同意してしまつて、こんなことをつけ加へて云つた。

『で、君、ワシーリサ・エゴローウナの云ふことはまちがつてゐないよ。軍律ぢや決鬪なるものは全然禁じてあるのだからナ』

その間に、パラーシュカはわれ〳〵の劍をとりあげて、天井裏へもつて行つてしまつた。私はわらひ出さないわけにはゆかなかつた。シュワーブリンは自分のまじめさを保つてゐた。

『奥様に對しまして私は十分の尊敬をもつて申しあげますが』と彼は彼女に冷やかに云つた『貴女は私たちを貴女の裁決に服さしめて、只わけもなく心配していらつしやるのを私は認めないわけにはゆきません。このことは大尉殿におまかせなすつて下さい。このことは大尉殿のなさることなのですから』

『まあ、貴方は何をおつしさるのです！』と夫人はいひ返した『夫も妻も同心一體ぢやありませ

んか？　イワン・クージミイチ！　貴夫は何をぼんやりしていらつしやるのですよ？　すぐとこの人たちをパンと水の別々の禁錮につけておやりなさい、この人たちのわがまゝがなくなつてしまふやうにね。そしてゲラシム神父さんに、この人たちが神様にお許しをお祈りして人々の前で懺悔するやうに、教罰を加へさせなさい』

イワン・クージミイチはどう思ひきつてしてよいかわからなつた。マリヤ・イワーノワナは大へん蒼ざめてゐた。だん〳〵と嵐はをさまつた。夫人は心がおちついて來て、私たちにお互に接吻をさせた。パラーシュカは私たちにめい〳〵の劍をもつてきてくれた。私たちは、外見では和睦したものゝごとく大尉の家を辭し去つた。イワン・イグナーチイツチはわれ〳〵を見送つてきた。

『貴方はよく恥かしかありませんね』と私は彼に腹立たしげに云つた『僕にあれほどそんなことはしないからと固く約束しておいて、そのあとで大尉殿に報告するなんて？』

『誓つて申しあげますが、私はそんなことは決してイワン・クージミイツチ大尉殿には話さなかつたですよ』と彼はこたへた『ワシーリサ・エゴローウナ夫人が私から何もかもを究らべあげちやつたのです。あの女は指揮官殿の許しもうけずに、あらゆることに采配をふつてゐるんです。でも事件がすつかりかういふ風に濟んでしまつたのは有難いことですよ！』

さう云つておいて、彼は家へ歸つて行つてしまつた。ところがあとには私とシュワーブリンとが二人きりで殘つた。

『この事件はこんなことぢやすまされない』と私は彼に云つた。

『全くだ』とシュワーブリンは答へた『君は君のあの傲慢無禮のために自分の血でもつて僕にこたへるんだ。しかし、きつとわれ〳〵はこれから監視されることだらう。四五日の間はわれ〳〵は仲なほりしたごとく伴つてゐる必要があるよ。では、失敬』

さうして、私たちは何ごともなかつたかのごとく、別れたのであつた。

私はまた指揮官の家へかへつてきて、いつものとほりマリヤ・イワーノウナのそばへ行つて腰かけた。イワン・クージミイツチは不在であつた。ワシーリサ・エゴローウナは家の用事をやつてゐた。私たちは低聲で話しあつた。マリヤ・イワーノウナはしとやかに、私がかのシュワーブリンとの爭ひをやつたが爲に一同に與へた心配のことを、私に咎めた。

『私ね、貴方がたが劍で切りあひをなさるといふお話をきかされたときには、ほんとにもう死ぬほどびつくりいたしましたのよ』と彼女は話した『なんて男の方つて不思議なんでせうね！　一週間もたてば大ていは忘れてしまふやうな、たつた一言のために、切りあひをして御自分の命ば

かりか良心も、或る人々の幸福までも犠牲にしようとしていらつしやるのですもの……でも、わたし貴方がそんな爭ひを引起しなすつたのではないことは信じてゐますわ。きつとあのアレクセイ・イワーヌイチがいけなかつたのでせう』

『だが、なぜ貴女はさうお思ひになるのです、マリヤ・イワーノウナ？』

『えゝそれはね……あの人は恥知らずな人ですから！　私あのアレクセイ・イワーヌイチはきらひですの。あの人、わたし大へんいやですわ。でも不思議ですことね、私もやつぱりあの人に氣に入られないやうに、私はなぜともなくあの人が嫌ひなんですもの。このことが私は大へん心配ですの』

『で、貴女はどうお思ひですか、マリヤ・イワーノウナ？　貴女はあの男の氣に入つてゐるのですか、それともさうぢやないのですか？』

マリヤ・イワーノウナは口どもつて、ぽつと紅くなつた。

『私には思はれますの』と彼女は云つた『わたしあの人の氣に入つてゐるんだと思ひますわ』

『なぜ、貴女にはさう思はれるのですか？』

『なぜつて、あの人は私に結婚を申しこんだのですもの』

『結婚を申しこんだ！　あの男が貴女に結婚を申しこんだのですか？　それあ、いつのことです？』

『去年のことですの、貴女が此處へおいでになる二月ばかり前に』

『そして、貴女はその申し込みに應じなかつたのですね？』

『どらんのとほりですわ。アレクセイ・イワーヌイチは實さいは賢い人で、名門の出で、財産がありなんですのね。でもわたし、すべての人々の見てゐる前で冠を被つて、あの人と接吻しなければならないなんて、どんなことがあつても、どんな幸福があらうとも、考へられませんもの！』

マリヤ・イワーノウナの話は私にいろ〳〵の理解を與へ、多くのことを説明したのであつた。私はシュワーブリンが彼女に浴びせてゐる、頑固な惡口の理由がわかつた。きつと彼はわれ〳〵お互が親しいのを認めて、努めてわれ〳〵お互の仲をさかうと努めてゐたのだ。無禮な、不作法な嘲笑とゝもに、私はそれらの中に故意の誹謗があるのを知つたとき、われ〳〵の爭ひの原因をつくつたあの言葉はいよ〳〵益々私には卑劣なものと思はれた。狂妄なる毒舌者を懲らしめてやりたいといふ希ひは、私の心のなかになほ一層力強いものとなつてしまつた。そして私は耐へがたい心を抱きながら、都合のよい機會を待ちまうけるやうになつた。

私はその機會をながい間は待たずにすんだ。次の日、私は詩を作らうと思つて卓子にこしかけて、詩韻を考へながらペンを嚙んでゐると、シュワーブリンが私のところの窓の外からノックをした。私はペンをおいて劍をとつて、彼の方へ出て行つた。

『なにも延期する必要がないぢやないか？』とシュワーブリンは私に云つた『われ〳〵を見張つてゐるものは誰もないんだから。河の方へ降りよう。あすこへゆけば、誰もわれ〳〵のすることを妨げないだらうから』

私たちは默つて出發した。險しい小徑を下つて行つて、私たちは河のすぐそばに立ちどまつて劍をひきぬいた。シュワーブリンは私よりも巧みであつた。しかし私も彼よりは力がつよく、勇敢であつた。といふのは、いつかは兵隊になつたことのある、あのフランス人の家庭教師のボプレが、私に少しばかり擊劍術の課業をやつてくれたので、私はそれを利用したのだ。シュワーブリンは私がかくのごとく危險なる敵手であることを知らうとは期待してゐなかつた。ながい間、私たちはお互にいかなる傷害も與へあふことができなかつた。遂に、私はシュワーブリンが弱つてきたのを認めて、勢ひするどく彼におそひかゝりはじめて、彼をほとんど河のその間際まで追ひつめてしまつた。と、このとき突然、私は大きな聲で自分の名を呼ぶのをきいた。私はふり向

いて、山の小徑を私の方へ駈け降りてくるサウエーリイチを目にとめた……と同時に、私は右肩の下、胸のところをひどく突き刺された。私はだうと倒れて、氣を失つてしまつた。

五、戀

れえ、お前、娘さん、丈夫な娘さん！
若くて嫁になんぞゆきやるな。
お前、娘さん、とうさん、かあさんに
とうさん、かあさん、身うちの人に頼むがいゝ。
娘さん、智慧をお蓄め、
智慧はお嫁の持參金。

俗　諺。

私よりよい人を見つければお前は、私を忘れて、
私より惡い人を見つければお前は、私を思ひ出さうもの。

だん〳〵と意識が恢復しながらも、私は數時間正氣づくことができなかつた。そして自分はどうしたのだか、解らかなつた。私は知らない部屋の寢臺にねてゐて、甚だしい衰弱を身におぼえた。私の前にはサウエーリイチが手に燭臺をもつて立つてゐた。誰かゞ、私の胸と肩とに捲いてある繃帶をそつと用心ぶかく解いてゐた。だん〳〵と私の意識は明瞭になつてきた。私は自分がやつた決鬪を思ひ出し、自分は傷を負はされたのだと察した。このとき、扉がギイと軋つた。

『どう、どんな鹽梅でして？』といふひそ〳〵聲がした。私はその聲に顫へはじめた。

『やつぱり、同じ有樣なんですよ』とサウエーリイチは答へた『やつぱりまだ無我夢中で、もうこれで五晝夜になるのですけれどね』

私は寢返りしたいと思つたが、できなかつた。

『僕はどこにゐるの？　誰がそこにゐるの？』と私は力を出して云つた。

マリヤ・イワーノウナが私の寢臺のそばへやつて來て、私の方へ身をこゞめた。

『どう、貴方どんな御鹽梅？』と彼女はたづねた。

おなじく

『おかげさまで！』と私は弱々しい聲でこたへた。

『貴女は、マリヤ・イワーノウナさん？　私に話して下さい……』私はそれ以上續けて云ふ力がなかつたので、だまりこんだ。

サウエーリイチは喜びの聲をあげた。喜悅が彼の顏にあらはれた。

『氣がつきました！　氣がつきました！』と彼はくりかへした『ありがたいことです、神樣！まあ、若旦那、ピヨートル・アンドレーイッチ、貴方は私をおどろかしましたね！　ちつとやそつとではないではありませんか？　これでもう五晝夜ですよ！……』

マリヤ・イワーノウナは彼の話を遮つた。

『若旦那といろんなことを話しちやなりません、サウエーリイチ』と彼女は云つた『まだ衰弱していらつしやるのですからね』

彼女は靜かに部屋を出て、扉をしめた。私の思ひは騷ぎはじめた。つまり、私は指揮官の家のなかに寢かされてゐたのだ。だから、マリヤ・イワーノウナがやつて來たのだ。私はサウエーリイチに少しばかり質問をしたいと思つたが、老人は頭を横にふつて自分の耳を塞いでしまつて聞かうとしなかつた。私は殘念ながら目をつぶつて、まもなく眠りにおちてしまつた。

私は目がさめて、サウエーリイチを呼んだ。すると、彼の代りに目の前にマリヤ•イワーノウナが立つてゐるのを見た。彼女の天使のやうな美しい聲は、私をよろこばした。私はこのときの私の心に充ちあふれた甘い感情を書きあらはすことができない。私は彼女の手をとつて悅びの涙に浸しながら、その手に口づけをした。マーシヤはその手を引こめなかつた……と、急に彼女の唇が私の頰に觸れた。そして私はその唇の熱い、さわやかな接吻を感じた。あつい思ひの火は私の胸に燃えしきつた。

『可愛い、深切なマリヤ•イワーノウナ』と私は彼女に云つた『私の妻になつて下さい。私の幸福に贊成して下さい』

彼女は氣をとりなほした。

『どうぞ貴方、落ちつきなすつて下さいまし』と彼女は私がとつてゐた手をひつこめながら云つた『貴方はまだ危險でいらつしやいますのよ。うつかりしますとね。まだ傷口が開くかも知れませんから。せめて私の爲にでもどうぞ貴方のお體を大事になすつて』

さう云つて、彼女は喜びにみち〳〵た私を殘して立ちさつてしまつた。幸福は私を復活させてくれた。彼女は私のものとなるんだ！　彼女は私を愛してくれてゐる！　かうした思ひは私の體

ぢうに一ぱいになつた。

そのときから、私はだん〳〵と恢復して行つた。私を聯隊の理髮師が治療してくれたのであつた。なぜかといふと、この要塞にはほかに醫者がなかつたからで、幸ひありがたいことにはこの男は利口ぶらなかつた。若さと自然とは私の恢復を速かならしめた。指揮官の家族はみんな私の看護をしてくれた。マリヤ•イワーノウナは私のそばからはなれなかつた。無論のこと、私は最初の都合よき機會に、この前うち切つてあつた告白をしたのであつた。マリヤ•イワーノウナも私の云ふことを以前よりも辛抱してきいてくれた。彼女はあらゆる修飾を試みることなく、私に眞實の戀をうちあけて、彼女の兩親はきつと彼女の幸福を喜んでくれることだらうと話した。

『けれど、よく考へてみて下さいな』と彼女はつけ加へて云つた『貴方の御兩親たちの方から邪魔が出はしないでせうか？』

私は思案した。母の溫愛をおもへば、この事に贊成してくれるかどうかを疑ふ餘地はないのであつた。しかし乍ら、私は父の平常の物事の考へかたを知つてゐるので、私たちの戀はあまり父を動かし得ないだらうといふ感じがした。そして彼は私たちの戀を若いものたちの出來心として見るだらうといふ思ひがした。私は心底からそのことをマリヤ•イワーノウナにうちあけて、何は

あれ父にあて〻出來るだけ言葉巧みに兩親の祝福を希ふむねの手紙を書かうと決心したのであつた。私はその書きあげた手紙をマリヤ・イワーノウナに見せた。彼女は非常に切なる、また感動させられた樣子でその手紙を見たほどであるから、その成功を疑つてはゐなかつたし、また若さ及び戀のあらゆる信じやすき心を抱いて己がやさしい心の感情に浸つてゐた。

私はシュワーブリンとは、私が全快したその最初の日に仲直りをした。イワン・クージミイチは私が快闘をしたことを非難して、私に話した。

『ねえ、ピョートル・アンドレーイッチ！ 君は禁錮處分にされねばならなかつた筈なんだが、君はもうすでに禁錮されなくとも懲罰を食つてしまつたんだ。ぢやがあのアレクセイ・イワーヌイチは私んとこの穀物倉庫へ監視つきで監禁されてゐるんだ。そしてあの男の劍はワシーリサ・エゴローウナが藏つて鍵をかつてゐる。あの男に自分と自分で悟つて、惡かつたと懺悔させればいゝんだ』

私は心のなかに不愉快な感情を保たうためには、あまりと幸福すぎた。私は哀れなシュワーブリンのために許しを乞ひはじめた。善良な指揮官は自分の妻の同意を得て、彼を放免する決心をつけた。シュワーブリンは自分のところへやつてきた。彼はわれ〳〵の間に起つたことに就いて深き遺憾の意を表明して、全然あの事は自分が惡かつたのだからと告白した。そして私にもう今

までのことは忘れてしまつてくれるやうに賴んだ。生れつき怨恨をもち得ない私は、まゞゝろから彼を許し、われ〳〵の爭ひ、私の彼からうけた負傷を許容した。私は彼のあの中傷のなかに、恥かしめられたる自負心、拒絶されたる戀を見たのであつた。だから、大まかに自分の不幸な相手を許したのである。

私はすぐに全快してしまつた。そして自分の住居へ引移ることができた。私はあゝして出しておいた手紙の返事を、敢て望みをかけ得ず、努めてもの悲しい豫感をうち消さうとしながら、いら〳〵する耐へがたい心を抱いて今日か明日かと待つてゐた。私はイワン・クージミイッチ大尉及びワシーリサ・エゴローウナにはまだわれ〳〵のことを話してゐなかつた。しかし私の申出では彼等をおどろかす筈はなかつた。私もマリヤ・イワーノウナも自分たちの感情を彼等兩親にかくさうとはつとめなかつた。そしてわれ〳〵は豫めすでに彼等の承諾を固く信じてゐたのだ。

つひに或る朝のこと、サウエーリイチが一通の手紙を手にして私のところへはいつてきた。私は動悸うつ胸をおさへてその手紙をうけとつた。宛名は父の筆蹟で書かれてあつた。これは何か重大なことを意味する豫言を私に與へた。何となれば、通例私への手紙は母が書いて、父はおしまひの方に五六行書き入れるのが常であつたからである。ながい間、私はその封筒を開かずに立派

な宛名をよみかへしてゐた。そこには――オレンブールグ縣、ベロゴールスク要塞内、わが息子なるピョートル・アンドレーイッチ・グリーニエフへ――と書いてあつた。私はその筆蹟によつて、父がこのなかの手紙を書いたときの機嫌を推察しようと骨を折つた。とう〳〵それを思ひきつて開封した。そして最初の一行によつて、一切のことは面白くないといふことを知つた。手紙の内容は次のごとくであつた――

愛するピョートルよ！

お前の手紙はこの月の十五日に受取つた。文面に依れば、お前はミローノフ大尉の令嬢マリヤ・イワーノウナとの結婚に對する兩親の祝福及び同意を我々に求めてゐたが、私は私の祝福もまた同意もお前に與へようとは思はないのみならず、お前が將校の位をもつてゐるにも拘はらずまるで子供に對するやうに、お前が仕出かした惡戯のために道理を以てお前を訓誡し、責めようと思つてゐる。近いうちに私はオレンブールグのアンドレイ・カルローヴイッチ將軍に、お前をそのベロゴールスク要塞からもつと遠いところの要塞へ轉任させてくれるやうに頼んでやるつもりだ。轉任してほかの土地へゆけば、お前の頑な馬鹿氣分もなくなることだらう。お前のお母さんは

お前が決鬪したことや負傷したことをきいて、悲しみのあまり病氣になつて寢てゐる。ほんとにお前はどんな人間になることだらう？　私は神樣に、たとへ大きな惠みを望み得ないまでも、お前のだらしなさが直つてくれるやうに、お祈りしてゐる。

お前の父、アンドレイ・グリーニエフより。

この手紙を讀んで、私にはいろ〳〵の感情が湧きおこつた。父が惜しむところなく書いた殘酷な文言は、ふかくも私を恥しめたのであつた。父がマリヤ・イワーノウナのことを云つてゐるその侮蔑は、まるで不正非道であるかのごとく私には無禮であると思はれた。私がベロゴールスクの要塞からほかへ轉任させられるかも知れぬといふ思ひは、私をおどろかしたが、なほ何よりも以上に私を苦しめ悲しませたのは母が病氣になつてゐるといふ報らせであつた。私は私が決鬪をやつたといふ報らせをサウエーリイチが疑ひもなく兩親にしらせたのだと察して、彼に不平を云つた。私はせまい自分の部屋のなかを前へ後へと歩きまはつて、彼のゐる前に立ちどまり、その顏をおそろしく見つめながら云つた。

『僕がお前のおかげで怪我をして、まる一ケ月死ぬか生きるかの目にあつたのが、どうやらお前

にはまだ不足だと見えるね、なぜつてさ、お前は僕のお母さんまでも殺さうと思つてゐるんだからね』

サウエーリイチはその言葉に雷にうたれたかのやうにおどろいた。

『どういたしまして、若旦那』と彼はほとんど聲をあげて泣き出さんばかりになつて云つた『一體、貴方は何をおつしやるのですか？　私が、貴方がお怪我をなすつた原因なんですつて？　いいえ神様が御存じです、私は自分の身で貴方を、アレクセイ・イワーヌイチの劍からかばはうと思つて駈け出して行つたのですよ。この呪はしい老年が、さうは思ふやうにさせてくれなかつたのです。それに、私は貴方のお母様に何をしたのですか？』

『何をしたつて？』と私は答へた『僕の惡いことをそつと報らせてやるなんて、誰がお前に頼んだことなんだ？　お前は間諜として僕につけられて來たのぢやないか？』

『私が貴方のことをそつと告げ口しましたつて？』サウエーリイチは涙をながしながら答へた『まあ、神様！　若旦那、どうぞ大旦那様が私におよこしになりましたお手紙をおよみになつて下さい、私がそんなことをそつとおしらせしたかどうかわかりますから』

そこで、彼はポケットから一通の手紙をとり出して次のやうに讀んだ。

サウエーリイチ！　老いぼれ犬、お前は私のきびしい命令にもかゝはらず、悴のピョートル・アンドレーイッチのことを密かに訴へることをなさず、却つてほかの人が悴が惡戲をしたことを、私に報らせてくれねばならなかつたがごときは恥となさねばならぬ。そんな風に、お前は自分の義務、主人の望みを果してゐるのか？　サウエーリイチ、私は事實を隱し、また若いものに對する怠慢のあつたが故に、お前を豚飼ひにやつてしまふぞ。此手紙をうけとつたら直ちに、人が報らせてくれた悴の容態はいまのところどうであるか、癒つたかどうか、そして特に悴は如何なる個所に傷をうけたのであるか、よく療治をうけてゐるかどうか、此方へ折りかへし知らして寄起せ。

これによつて、サウエーリイチが私に對して眞實でゐること、並びに私が彼を非難したり疑ひをかけたりして輕蔑したのは無駄であつたことは明かであつた。私は彼の許しを乞ふた。けれど老人の機嫌はなほらなかつた。『ほんとにこんな悲しい目を見るまで、私は生きながらへてゐたのです』と彼はくり返し云つた『ほんとに私は大旦那様から永い勤めのお禮にどんなものを頂いたのでせう！　私は老いぼれ犬でもあるし、豚飼ひでもありませう、でも、なぜ私ゆゑに貴方が怪我をなすつたと云はれるのでせう？　それはちがひます、若旦那、ピョートル・アンドレーイッチ

！　私ゆゑではないのです、あのいやなフランス人のボブレの奴が萬事に罪があるのですよ。あの男が、まるで悪ものに出逢つたときの用心にもつて來いであるかのやうに、貴方に鐵の棒で突くことや足踏みをすることを敎へたからです！　あんな碌でもないフランス人を雇ひ入れて、よけいなお錢をつかふ必要がどこにあつたのでせう！」

然らば、一體だれが私の行動を私の父にしらせる勞をとつたのであらう？　將軍であらうか？しかしあの人は私のことはあまり心にかけてゐないらしかつた。しかもイワン・クージミイッチ大尉は私が決鬪をしたことを通知する必要をみとめてゐなかつた。私は判斷に苦しんだ。私のうたがひはシュワーブリンにとゞまつた。彼のみは密告することによつて利益をもつてゐたのである。密告の結果として、私はこの要塞から他所へ轉任となり、指揮官の家族と別れ去ることがあり得たからだ。私は一切のことをマリヤ・イワーノウナに話しに行つた。彼女は私を階段に出むかへた。

『貴方はどうなさいましたの？』と彼女は私をみてきいた『なんて、まあお顏の色がわるいのでせう！』

『萬事休すですよ！』私はさう答へて、父から來た手紙を彼女に手わたした。

彼女がこんどは顏の色を變へた。彼女はそれを讀み終つて、ふるへる手で私に返して、ふるへ

る聲で私に云つた。

『たしかに私の運命はわるうございますのね……御兩親は私を貴方のお家へ入れるのをいやがつていらつしやるのですわ。なにごとも神樣のお意志におまかせいたしませう！　神樣は私たちがどうしなければならないかといふことを、一番よく御存じなのですから。どうともいたし方がありませんわ、ピョートル・アンドレーイッチ、せめて貴方だけでもお仕合せでお暮し下さいまし……』

『そんな馬鹿なことがあるものですか！』と私は彼女の手をとりながら叫んだ『貴方は僕を愛してくれてゐます。僕はあらゆる覺悟をもつてゐるのです。一しよにゆきませう、行つて貴女の御兩親の前に跪いてお願ひしませう。御兩親は無頓着な人たちです、殘酷な傲慢な人たちではありません……御兩親は私たちを祝福して下さいますよ。すれば私たちは結婚するのです、そして時が經てば、私は信じてゐるのですが私たちはうちの父を說き伏せられます。母は私たちの肩をもつてくれますよ。父は私を許してくれますよ……』

『いゝえ、ピョートル・アンドレーイッチ』とマーシャは答へた『私は貴方の御兩親の祝福なしには、貴方のところへ嫁きませんわ。御兩親の祝福がなければ、貴方は仕合せになれませんもの。

神様のお意志にしたがひませう。貴方が神様にお授かりになつた女の方をおみつけになるのなら、ほかの女の方をお愛しになるのなら、それはかまひませんわ。ピョートル・アンドレーイッチ、私は貴方がたお二人の御幸福をお祈りいたしませう……」

彼女はさう云つて泣き出した。そして私のそばを立ちさつてしまつた。私は彼女のあとについて、部屋のなかへはいつてゆきたかつた。けれど私は自分と自分が制御できないやうな狀態にあるのを感じて、家へたちかへつた。

私はふかい物思ひに沈んで腰かけてゐた。するとだしぬけにサウエーリイチが私の物思ひを破つた。

『さあ、若旦那』と彼は一枚の紙一ぱいに文字の書きつめてあるのを私に手わたしながら云つた『私が自分の御主人の密告人でありますかどうか、私が御主人親子を苦しめようと骨を折つてゐますかどうか、御らん下さいまし』

私は彼の手からその紙をとりあげた。それはサウエーリイチが私の父からうけた手紙の返事であつた。その手紙の一字一句は次のとほりである——

大旦那、アンドレイ・ペトローヴイッチ様、私どもの「お惠みぶかい父上様」

貴方様のお惠みぶかいお手紙拜見仕りました。御文面によりますれば、大旦那様の御命令どほりのことを果さなかつたのを恥とせよととてこの私を、この貴方様の奴隷めをお怒りでおいで遊ばす様子。なれど私めは老いぼれ犬ではございませぬ。貴方様の忠實なる召使ひでございまして、大旦那様の御命令はよく守つてをります。そしていつも當日頃までゝろからお仕へ申してまゐりこの白髮になる歳まで勸めあげたのでございます。私は若旦那、ピョートル・アンドレーイッチ様の御負傷につきましては貴方様の方へ何事も御しらせ申上げませんでした。それは只徒らにお驚かせしないやうにとの心からでございました。承りますれば、奥様、私どもの母上様でいらせられまするアウドーチヤ・ワシーリエウナ様におかせられましては、若旦那御負傷の通知にてお驚きのため御臥床あそばしてゐますよし、私めは奥様のため一日も早く御全快のほど神様にお禱りいたしてをります。さて若旦那、ピョートル・アンドレーイッチ様御事は右肩の骨のすぐ下の胸に、深さ一ヴェルショーク半ほどの（澤者註、一ウェルショークはわが一寸五分弱にあたる）傷をお受けになつたのでございまして、私どもが河岸からこゝの指揮官殿のお宅へ運んでまゐり、そしてお寢みになつてをりました。そして若旦那様の治療は當地の理髮師のステパン・パラモーノフが

いたしました。けれど今はもうビヨートル・アンドレーイッチ様は傷もなほり、おかげ様にて御健康におなり遊ばしましたので、若旦那様に就きましてはもはや善いことのほか何事も申上ぐべきことはございませぬ。上官皆様は承りますれば、若旦那様がお氣に入りとのこと、それに大尉殿御夫人、ワシーリサ・エゴローウナ様は若旦那をまるで御自分の御子様同様にお可愛がりでございます。でも、若旦那様にあんなことができましたことも、お若い人としては咎め立てするにも當らないことで——馬は四ツ足なれども、なほ躓くことあり——でございます。お手紙には、私めを豚飼ひに追ひやつてしまふぞとお書きになつてをりましたが、それは御主人様のおこゝろ一つにありますこと、如何様ともお取はからひ下さいまし。まづこれにて謹んで筆をとめます。

貴方様の忠實なる奴隷、

アルヒープ・サヴエーリイチ

私はこの善良なる老人の手紙をよみながら、數回微笑せざるを得なかつた。私は父への返事を書き得るやうな狀態にはゐなかつた。それに、母を安心させるためにはこのサウエーリイチの手紙で十分であるやうに私には思はれた。

その時から、私の環境は一變してしまつた。マリヤ・イワーノウナはもう殆んど私とは話をしなかつた。そして樣々に私を避けようと骨を折つてゐた。指揮官の家は私にとつては厭ふべきものとなつてしまつた。だん〳〵と私は自分のうちで、只ひとり腰うちかけてゐることに馴れてきた。ワシーリサ・エゴローウナは初めのほどは私を叱つてゐたが、私の頑固なのを見てとつてそのまゝそつとうつちやつといてくれた。イワン・クージミイッチ大尉とは、勤務上逢はねばならないときのみ出逢つた。シュワーブリンとは時たま、しかも澁々に出逢つた。逢へば逢ふほど、いよいよ彼には私に對する恨みがあるのがわかり、私の疑惑をふかめて行つた。私の生活は私にとつては耐へがたいものとなつてしまつた。私は孤獨と無聊とが培つた陰鬱な物思ひにおちいつた。私の戀ごゝろはさうした孤獨にあつて燃えしきり、だん〳〵と自分には苦しいものとなつて行つた。私は讀書及び文學に對する興味をうしなつてしまつた。私は生氣を失つた。自分は發狂するか或は放蕩に耽りはしないかとおそれた。私の全生涯に重大な影響をもつてゐるところの、意外なる出來ごとが、突然に私の魂に力づよい、執拗なる騷擾を與へたのであつた。

六、プガチョーフの亂

お前たち、幼いものたちよ、おきゝ、
私たち、年寄がお話をしてあげるから。
唄

この私がぶつかつて目擊した不思議な事件の記述にはいるに先立つて、私は一七七三年末におけるオレンブールグ縣の狀態について數言話しておかねばならぬ。

この廣い、豐穰なる縣には、まだロシヤ皇帝の主權が最近認めたばかりの半野蠻な國民の多數が住んでゐた。彼等のとき〳〵の叛亂、法則および社會的生活に不馴れなこと、それから輕率なること、慘酷なること等はおのづから、政府側から彼等の服從を强ひるためにたえまなき監督を要求したのである。各要塞は便利と認められたる所に設置されて、そこには大部分ふるきウラル河畔の住民であるコサック族が住んでゐた。さりながら、この地方の安寧と無難とを守るべき義

務を負うてゐたウラルのコサック等は、いつのほどからともなく政府にとつては不安且つ危險なる臣民どもとなつたのであつた。一七七二年には彼等の主要都市において、叛亂が起つた。その原因は、陸軍少將トラウベンベールグの目論んだ嚴重な手段で、義務を遵奉させんために軍隊の力を借りたことにあつた。結果としてトラウベンベールグの野蠻なる殺害と管理とに依つて我儘勝手な改革が行はれ、つひにはその動亂は榴散彈と殘酷な刑罰とを用ひて鎭壓されてしまつた。

このことは、私がベロゴールスク要塞へやつてくる少し前に起つたことなのである。一切は靜謐であつた、いや云ひかへればさう見えてゐたのだ。官憲は狡猾なる暴徒等の佯りの悔悟を、あまりと輕く信じすぎてゐたのだ。彼等暴徒はひそかに惡心を抱いて、叛亂再擧の都合よき機會を待ちかまへてゐたのである。

大尉の娘

さて、これから私の話にたちかへらう。

或る晩のこと(これは一七七三年十月初旬のことである)私は自分の家でひとり腰かけて、秋の風の唸りをきゝながら、月のそばをかすめて飛んでゆくむら雲を窓から眺めてゐた。使ひのものが指揮官の名前で私を呼びにやつてきた。それで、私はすぐとやつて行つた。指揮官のところにはシュワーブリンやイワン・イグナーチイッチ、それからコサックの下士が來てゐるのを見た。そ

の部屋のなかには、ワシーリサ・エゴローウナもゐなければ、マリヤ・イワーノウナもゐなかつた。指揮官は心配さうな顔つきをして私と挨拶を交はした。彼は扉をしめきつて、それから扉口のところに立つてゐるコサック下士は除いて、われ〳〵皆を掛けさせ、ポケットから一葉の書面をとり出した。そしてわれ〳〵に話した。

『將校諸君、重大な新事件が出來した！　いま將軍から到着した書面をよむからきゝたまへ』

さう云つて大尉は眼鏡をかけて、次のとほりのことを讀みあげた——

ペロゴールスク要塞指揮官、ミローノフ大尉殿。

要秘密。

こゝに貴官に通報すべきことあり。そはわが官憲の監視を遁れたるドン河のカサックにして、わが正教を奉ぜざるものエメリヤーン・プガチョーフが、故ピョートル三世陛下の御名を己れに冒用するの許すべからざる横暴を行ひ、悪黨どもを集めて、ウラルの村々に叛亂をひき起し、到る所掠奪と殺人とを行ひつゝ已でに五六ケ所の要塞を打破り、占領したることとなり。そのため、貴官はこの書面をうけとらるゝや直ちに上記の皇位僭稱者なる悪黨を撃退すべき然るべき方法を執らるべく、なほ能ふべくんば彼が貴官の監督に委任されたるその要塞に襲來せば、完全なる剿滅に致すの手段を執らるべし。

（＊譯者註、ピョートル三世はピョートル大帝の孫にあたり、カテリーナ二世の夫である。稀世の女丈夫たるカテリーナは一七六二年即位間もなきピョートル三世を廢し、自ら位につき大いにその手腕を揮つた。三世はその後南露の温泉地にて死因不明のまゝ殺したのが事實である。然るに、カテリーナが即位して十二年目即ち一七七三年に前記の本文の如くプガチョーフが、首都を遠く隔てたウラル地方で、自らは再生のピョートル三世なりと僭稱して叛亂を起したのである。これを歴史上プガチョーフシチナ——プガチョーフの亂——といふ。）

『然るべき方法を執らるべしだ！』指揮官は眼鏡を外し、その書面をたゝみながらさう云つた『然り諸君、云ふまでもない。その悪黨こそは有勢であるのは明らかだ。然るに、われ〳〵のもとにはコサック等を入れないで全部で百三十名の兵力があるだけだ。コサック等は、マークシムイチ、お前を咎めだてするわけではないが、望みはかけられない。（さう云はれて、扉口のところに立つてゐたコサック下士は微笑した）しかし、せんすべもないのだ、將校諸君！　正當に盡してくれ

大尉の娘

たまへ、哨兵を置き、夜の監視をおくんだ。敵が襲來した曉にはこの要塞の門を閉ざして、兵隊を出動せしめなければならぬ。マークシムイチ、お前はしつかりお前たちの方のコサック等を監視してゐるんだぞ。大砲を檢査して、よく掃除をしておかねばならない。なほ最も肝要なことは、まだ機の至らないうちはこの要塞内の誰もが知り得ないやうに、この事を祕密にしておく必要がある』

かうした命令を與へておいて、イワン・クージミイッチ大尉はわれ〳〵を歸らせた。私はシュワープリンと〻もにそこを立去つて、われ〳〵が今きいたことを色々と判斷した。

『君はどう思ふね、この事件はどう結果がつくだらう？』と私は彼にきいた。

『それあ、わからないね、』と彼は答へた『まあ見てゐりやわかるさ。だが、僕はまだ何等重大なことを認めないよ。もしか……』

さう云ひさして彼は考へこんだ。そして取りみだした風でフランスの歌曲を口笛で吹きはじめた。

われ〳〵がみんな氣をつけてゐたにもかゝはらず、プガチョーフ出現の噂はこの要塞ぢうにひろまつてしまつた。イワン・クージミイッチは自分の妻を大へん尊敬してゐたけれども、軍事に關

することで彼に委ねられたる祕密は如何なる事があらうとも彼女にはうちあけて話さなかつた。將軍から手紙を受とつて、彼はかなり巧妙な方法でワシーリサ・エゴローウナを逐ひ出したのであつた。といふのは、神父ゲラシムがオレンブールグから非常な祕密をもつてゐる或る奇妙な報知を受けたかのやうな話を、彼女に話したのである。だからワシーリサ・エゴローウナは直ちに神父の妻君のところへお客に行かうと思つた。そしてイワン・クージミイッチのすゝめによつて、マーシャがひとりあとに殘つて退屈しないやうに一しよに連れて行つたのである。

イワン・クージミイッチはそれですつかり一家の主人になりすまして、すぐとわれ〳〵を呼びに使者を立てたのだ。女中のパラーシュカはどうかといふと、彼女はわれ〳〵の話すことを立ちぎきしないやうに物置のなかへ閉ぢこめられてしまつてゐた。

ワシーリサ・エゴローウナは神父の妻君から何一つ探索して掘り出し得ないで家へ歸つてきた。そして自分の留守のまにイワン・クージミイッチが何か會議をひらいたこと、そしてパラーシュカが物置の中へ鍵をかつて閉ぢこめられてゐたことを知つた。彼女は夫にだまされたことを知つて、なぜ欺したかと夫に迫つた。しかしイワン・クージミイッチはさうした攻擊に對する準備はをさをさ怠りなかつた。彼は少しもあわてないで、元氣よく自分の物ずきな妻に答へたのである。

『まあおきゝよ、お前、この邊の百姓女たちはさ、煖爐に藥を焚くことを考へついたのだよ。ちやが、それでは思はぬ不幸を起すことがあるので、俺は今後煖爐には絶對に藥を焚くことはならぬといふ嚴重な命令を女どもに與へたのだ。その代りに枯枝、枯木を燃すやうにつてナ』

『でも、なぜ貴方はパラーシュカを物置の中へなんぞ閉ぢこめておきなすつたのです？』と夫人はきいた『なぜ、可哀さうにあの娘は私たちが歸つて來るまで物置に入れられとほしてゐたのです？』

イワン・クージミイッチはさうした質問に對する準備を忘れてゐた。彼はまごついてしまつて、何か大へん連絡のないことをもが〳〵云つてゐた。ワシーリサ・エゴローウナは自分の夫の狡猾なことを知つたが、もはや夫からは何も得られないことを知つて自分の質問をうち切つてしまつた。そしてお寺の妻君のアクリーナ・パムフイローウナが全く特別な方法で拵へてゐたといふ、胡瓜の鹽漬の話をしはじめた。よつぽどワシーリサ・エゴローウナはねむることができず、また夫が考へてゐたのはどんなことだつたのだらう、自分が知ることができなかつたのは何ごとだらうと考へてもどうしても推察し得なかつた。

次の日、彼女はお寺の祈禱文式から歸つてくる途中で、イワン・イグナーチイッチが大砲のなか

から、子供たちが惡戯につめこんでおいたボロ布だとか石ころ、木屑、草、あらゆる種類の埃などを引き出してゐるのを見た。

『かうして戰爭の支度をしてゐるのはどういふわけなのだらう？』と大尉夫人は思つた『きつとキルギス人の襲擊を期待してゐるのではあるまいか？』

彼女は自分の女性的な好奇心を苦しめてゐたところの祕密を、イワン・イグナーチイッチから探り知らうといふ固い考へをもつて、彼に話しかけた。

ワシーリサ・エゴローウナは彼に少しばかり家政に關する注意を與へた。それはちやうど被訊問者の用意を散らせるために、その問題外の訊問を以て始める裁判官と同じやうに。彼女はそれから一寸の間だまつてゐて、深い溜息をした。そして頭をふりながら云つた。

『あゝ、あゝ！　まあ何といふ出來ごとなんでせうね！　これはどうなるつていふのでせう？』

『でも、奥樣！』とイワン・イグナーチイッチは答へた『神樣はお惠みぶかくていらつしやいます。こゝには兵隊が十分にありますし、火藥も澤山あります。大砲は私が掃除をいたしました。多分は私どもはプガチョーフに對抗することができますよ。神樣さへ私どもをおみすてにならなければ、私どもはきつと安全で居られます！』

『して、そのプガチョーフつてどんな人ですの？』と大尉夫人は尋ねた。

そこで、イワン・イグナーチイツチは云つちやならないことを云ひ洩らしてしまつたと知つて、口を噤んだ、噤んだがもうおそかつた。ワシーリサ・エゴローウナはこのことに就いては決して誰にも云はないからといふ約束をして、彼がすべてのことをうちあけるやうに强ひた。

ワシーリサ・エゴローウナは自分でその約束をかたく守つて、只お寺の妻君のほかには誰にも話さなかつた。お寺の妻君に話したといつても、只自分のうちの牝牛がまだ野原をぶらついてゐたが、ひよつとしたら悪者にとつつかまるかも知れないと云つたゞけであつた。

ところがまもなく、もう皆がプガチョーフのことを話し出した。その風説はぱつと散りひろがつた。指揮官はコサツクの下士に依頼して、近隣の村々及び要塞の情況一切をよく偵察して來るやうに派遣した。その下士は二日經つて歸つて來て、自分はこの要塞を去る約六十露里ほど彼方の曠野に、多數の火がもえてゐるのを見た、そしてバシュキル人たちからなにかわけの解らぬ軍勢が進軍しつゝあるといふことをきいたと報告した。しかし乍ら、彼はもつとむかふへ進んでゆくのが恐ろしかつたので、それ以上正確なることは何も話せなかつた。

要塞のなかにゐるコサツク人たちの間には、明らかに異常なる動搖が生じた。彼等はあらゆる

通路に集まつてはお互ひにひそ〳〵と話しあつてゐた。そして龍騎兵とか衛戍兵の姿が見えると散り〴〵になつてしまつた。彼等の方へは間諜がひそかに派遣された。ロシヤ正教の洗禮をうけたカルムイク人であるユーライといふのが、指揮官に重大な上申をなした。ユーライのいふ所によれば、あのコサツク下士が偵察に行つて歸つての報告は伴りのものであつたのだ。なぜかといふに、かの悪かしこいコサツクは自分が偵察から歸つてきて仲間に出逢ひ、自分は暴徒のところへ行つてその首領に出逢つてきた、首領は自分が面謁するのを許し、自分と長い間いろ〳〵の物語りをしたと話してきかせたといふのだ。指揮官は即刻かのコサツク下士を捉へて禁錮に處し、その代りにユーライをその地位に任じた。この出來ごとはコサツク人たちにとつては明らかな不滿であつた。彼等は聲を大きくして不平をならした。指揮官の命令代理者であるイワン・イグナーチイツチも自分自ら彼等が『どうなるものか見てゐろい、守備の鼠めー』と云つてゐるのをきいた。指揮官はその日に、かの禁錮に處したコサツクを訊問しようと思つた。然るところ、禁錮にした筈のコサツクは多分自分の一味徒黨の助けによつたものであらう、逃亡してしまつて姿が見えなかつた。

新しい情況は指揮官の不安を增大した。不穩宣傳文をもつたバシュキル人がつかまつたのであ

る。この機會に指揮官は再び己が配下の將校をよび集めようと思ひ、再びワシーリサ・エゴローウナを何とか體裁のよい口實で遠ざけようと思つた。けれど、イワン・クージミイッチ大尉は最も實直な、また正直な人であつたから、もはや彼がいつか用ひた方法のほかには別のいゝ方法を見つけることができなかつた。

『ねえ、お前、ワシーリサ・エゴローウナ』と彼は咳ばらひをしながら彼女に云つた『何でも人の話ではね、ゲラシム神父さんが町から……』

『もう嘘をつくのは澤山ですよ、イワン・クージミイッチ』と夫人は夫のいひかけたことを遮つてしまつた『貴夫はどうやら將校會議をひらいて、私のゐないところでエメリヤーン・プガチョーフのことをお話しようと思つておいでなさるのですわ。それはいけませんよ、嘘をつかないで下さいよ』

イワン・クージミイッチは目を大きく見はつた。

『ちや、ちや、お前』と彼は云つた『お前がもう何もかも知つてゐるのなら、それちやどうか殘つておいでよ。われ〳〵はお前の前だつてお話はするよ』

『さうれ、どらんなさい、貴夫』と彼女はこたへた『ずるい事はなさらない方がよどさんすよ、

將校たちを呼びにおやりなさいな』

われ〳〵は再び集合した。イワン・クージミイッチは妻のゐる前でわれ〳〵に、半ば讀みかきのできる或るコサックの手にて書かれたるプガチョーフの檄文を讀みきかした。暴徒はその檄文に、己が計畫として直ちにこの要塞へ襲撃すること、己が一味徒黨へコサック人及び兵卒を招じ、一方指揮官等には反抗しないやうに說きすゝめ、もし反抗する場合には刑罰をもつて脅威することなどを書いてゐた。その檄文は粗野な、と云つて力强い表現を用ひて書かれてあつた、たしかに平凡な人間の頭に危險なる感銘を持ち來すにちがひないものであつた。

『何といふ惡黨でせうね！』と大尉夫人は叫んだ『まだ何をそら〳〵しく私たちに申込まうつて云ふのでせう！　惡黨を私たちが出迎へて、その旗印の下にひれ伏せばいゝのでせうがね？……ほんとに、プガチョーフつて男は犬の悴ですよ！　それに、私たちがこれでもう四十年も軍隊勤務をしてゐて、おかげさまで世の中のことは何もかも知りぬいてゐるのを知らないのではないでせうか？　でも、あんな惡黨の云ふことをきくやうな、そんな指揮官があつたことでせうか？』

『どうもそんなのはないに違ひないね』イワン・クージミイッチは答へた『しかし、きく所では惡黨は多くの要塞を占領してしまつたといふことだよ』

『實際、この惡黨は有勢であるのは明らかなことですね』とシュワープリンが口を入れた。

『だがほら、われ〳〵は今すぐと奴の眞實の勢力を知るとしよう』と指揮官は云つた『ワシーリサ・エゴローウナ、こちらへ倉庫の鍵をお出し。イワン・イグナーチイッチ、君はあの監禁中のパシュキル人を連れてきてくれたまへ。そしてユーライにこゝへ鞭をもつてくるよやに呑ひつけてくれたまへ』

『ちよつと待つて下さい、イワン・クーヂミイッチ』と大尉に夫人が云つた『マーシヤをどこか家から外へやらせて下さいな、さうでないとあの娘は叫び聲をきいて、びつくりしてしまひますから。それで私も、ほんとを申せば拷問がきらひなのですから、幸ひこの場を外させて頂きますわ』

拷問は往昔にあつては裁判法の慣例によく數へ含められてあつたので、その拷問を廢止すべき仁慈なる詔勅が下されにもかゝはらず、ながい間何等の効果もあらはさないでゐたほどであつた。犯罪者の告白なるものは、その犯罪者の完全なる立證として必要なものであると考へられたのである。これは根據なき考へにみならず、全然合理的な法律的意義に反する考へである。何となれば、もしも被告の否定が無罪の證據として受け入れられない場合には、彼の告白なるものはいよいよ彼の有罪の證據であつてはならないことゝなるからである。今日ですらも私は野蠻なるさう

した風習の滅びるのを惜しむ、古い裁判官の話をきくことがある。われ〳〵のこの時代にあつては、裁判官も被告も拷問が必要であるとかないとかいふことに疑問をさしはさむものは誰もなかつた。そんなわけで、指揮官の命令をわれ〳〵の誰一人おどろくものも、またさわぐものもなかつた。イワン・イグナーチイッチは大尉夫人に鍵をかけられて倉庫に監禁されてゐるパシュキル人を連れにやつて行つた。まもなく囚人は立闘の間へつれて來られた。大尉はその囚人を自分の方へ連れ出すやうに命じた。

パシュキル人はやうやくの骨折で闘をまたぎこした（彼は足桎梏をはめられてゐた）そしてその背の高い帽子をぬぎ、扉口のところにたちどまつた。私は彼の顏をちらと見て、ふるへあがつた。私はさうした人間は今まで一度として見たことがなかつたのだ。彼は七十歳を越えた年頃と思はれた。彼は鼻もなければ、耳もなかつた。その頭は剃りおとされてゐた。頤髯のかはりに、五六本の白い毛がさがつてゐた。彼は背がひくゝつて痩せてゐて、背むしであつた。しかしその細き兩眼はちやうど火のやうにきら〳〵と輝いてゐた。

『こら！』指揮官は彼のおそろしい人相によつて、この男が一七四一年（譯者註、イワン六世の頃の叛亂）に罰せられた暴徒の一人であることを知つてさう云つた『貴樣はたしかに古い狼だな、

われ〳〵の民にかゝつたことがあつたらう。貴様の鼻や耳はそんなにずべら坊に削りとられてゐるんだから、貴様はもはや始めて謀叛に組したのでないことは確かだ。もつと近くへ來い。誰がお前をこちらへ密かに派遣したのだか云へ』

老バシュキル人は默りこくつたまゝ、全くおろかしい樣子つきで指揮官をながめてゐた。

『何だつて貴樣は默つてゐるのだ？』 イワン・クージミイッチは續けて云つた『それとも貴樣は馬鹿でロシヤ語がわからないのか？ ユーライ、誰がこの男をこの要塞へ派遣したのだか、お前たちの言葉で訊ねて見ろ？』

ユーライは韃靼語でイワン・クージミイッチの問ひをくり返した。けれどバシュキル人は相變らず同じ表情で彼の顏を眺めてゐて、一言も答へなかつた。

『この畜生』と指揮官は云つた『貴樣はいまに云はしてやるぞ。兵卒たち！ この馬鹿の縞の部屋衣をぬがしてしまつて、背中をぶて。注意して、ユーライ、うんとぶて！』

二人の癈兵がそのバシュキル人の着物をぬがしはじめた。哀れなるものゝ顏は不安の色をあらはした。彼は子供たちにとつつかまつた小さい獸のやうに、あたりをきよと〳〵と見まはしてゐた。一人の癈兵が彼の兩手をとつて、後むきに自分の首へかけ、その爺さんを自分の兩肩で背負

ひあげた。そしてユーライは鞭をとつて、ふりまはした。そのとき、バシュキル人はかぼそい、哀願するやうな聲を出してゝなつた。そして頭をふりながら口をひらいた。その口の中には舌なんぞではなく、短い木切のやうなものが動いてゐた。

私はわれ〳〵のこの時代にこんなことがあつたこと、そして現に自分はアレクサンドル皇帝の平和なる御代まで生き永らへたことをおもひ合せるとき、迅速なる文明の進歩と博愛主義の普及とにおどろかざるを得ない。若い人たちよ！ もしも私の書いたものが諸君の手に入つたならば、よりよき、より強固なる變遷なるものは、いかなる無理な援亂もなくて、風俗の改良よりして來るものであることをおもひ出したまへ。

一同はおどろいた。

『いや』と指揮官は云つた『此奴から何の利益も得られないのは確かだ。ユーライ、倉庫へ連れて行つてしまへ。ところで、諸君、われ〳〵はなほ或ることを協議するとしよう』

われ〳〵はわれ〳〵の狀況に就いて協議をしはじめた。するとそこへ突然ワシーリサ・エゴローウナが非常に困亂した顏つきで息を切らしながらはいつてきた。

『どうしたんだ、お前は？』 おどろいた指揮官はさうきいた。

『貴夫、大へんなことになりましたー』とワシーリサ・エゴローウナはこたへた『ニジュネアジョールナヤの要塞が今朝占領されてしまひました。ゲラシム神父さんところの下男が只今あすこから歸つてまゐりましたの。その下男はね、あすこの要塞が占領される有樣を見てきたのですよ。指揮官と將校たち一同は縊り殺されましてね、兵隊はみんな虜になつてしまつたのですつて。愚圖々々してゐますと、惡黨は此方へもやつてまゐりますよ』

さうした意外の報知はいたく私をおどろかした。ニジュネアジョールナヤ要塞の指揮官は、靜かな、謙遜な若い人で私とは知己であつた。それはこの事から二ケ月ばかり以前に、彼はオレンブールグから若い妻をつれてこゝをとほりすぎて、イワン・クージミイッチ大尉のところに滯在したことがあつたからだ。このニジュネアジョールナヤ要塞はわれ〳〵の要塞からは二十五露里ばかり距つたところにあつた。刻一刻とわれ〳〵もプガチョーフの襲來を待ちうけねばならなかつた。マリヤ・イワーノウナの運命はまさ〳〵と私におもひうかんできた。そして私の心臟はうち沈んでしまつた。

『申上げます、大尉殿ー』と私は指揮官に云つた『われ〳〵の義務はわれ〳〵の最期の息のつゞくまで敵を防ぐにあります。このことに就いては、いふまでもないことです。しかしながら婦人

たちの不安といふことを考へなければなりません。婦人たちはオレンブールグへおやりなさるがよろしい、それとも道中が安全ならばもつと遠い、もつと安全な要塞で、惡黨が達し得ないほどの所へおやりになるがよろしいとおもひます』

イワン・クージミイッチは妻の方をむいて、云つた。

『ねえ、お前、實際にわれ〳〵が暴徒等の始末をつける間、お前たちは遠方へ行つてゐないかねー』

『まあ、つまらないことをおつしやいますのねー』と夫人は答へた『鐵砲の丸のどんで來ないやうな、そんな要塞がどこにあります？　なぜ、ベロゴールスクの要塞は見こみがないのですか？　おかげ樣と私たちはこゝでまる二十二年も暮してきたのですよ。バシュキル人たちもキルギス人たちもさうでした、きつとプガチョーフも待ちくたびれにすんでしまひますよー』

『ぢや、お前』とイワン・クージミイッチは云ひ返した『お前がこの要塞にのぞみをかけてゐるのなら、こゝにとゞまつてゐるさ。ぢやがマーシャはどうしたらいゝだらうね？　疲れまうけで、安全といふことがわかつてればそれで結構だが、もしか惡黨たちがこの要塞を占領するやうなことがあれば、どうするんだね？』

大尉の娘

『さあ、そのときは……』

さう云ひかけて、ワシーリサ・エゴローウナはつまつてしまひ、非常に不安げな面持でだまりこんだ。

『いや、ワシーリサ・エゴローウナ』おそらく妻に對して自分の言葉のきゝめのあつたのは彼の生涯にはじめてのことであらうが、大尉はそのきゝめを知つて話をつゞけた『マーシヤをこゝに殘しておく必要はないね。あれをオレンブールグのあれの敎母さんの所へやらう。あすこにや軍隊も大砲も十分あるし、城壁は石造りになつてゐるからナ。私はお前にもマーシヤと一しよにオレンブールグへゆくやうにすゝめたいんだ。お前はお婆さんだと云つたつて、この要塞が敵の襲擊で占領された場合、お前はどうなるかつていふことを考へてごらんよ』

『よどざんすわ』と指揮官夫人は云つた『どうしてもマーシヤは彼方へやりませう。でも私は夢にもゆきたいとはおもつてゐませんの。私はこんな年寄になつて貴夫と別れる必要もありませんし、知らない土地で獨りのお墓を求める必要もありませんもの。生きるのが一しよなら、死ぬのも一しよではありませんか』

『それはさうだ』と指揮官は云つた『さあそれぢや愚圖々々してゐちやいけない。マーシヤに道

中の準備をさせろ。明日、夜があけるとすぐ、こゝには餘分な人はないのだけれども、あれに護衛兵を一人つけて出發させることにしよう。どこにマーシヤはゐる？』

『お寺のアクリーナ・パムフイローウナさんのところに居りますの』と夫人は答へた『あの娘はニジュネアジョールナヤの要塞が占領されたことをきいて、氣分がわるくなつてしまひましたの。病ひつかなければよいがと私心配ですわ。神樣、ほんとに私たちは生きながらへて何といふ憂き目を見ることなのでせう！』

ワシーリサ・エゴローウチは娘の出發の世話をしに立ちさつた。指揮官の話はなほ續いた。けれど私はもはやその話に口を入れなかつたし、何事も耳に入れてゐなかつた。マリヤ・イワーノウナは蒼ざめて、泣きながら夜食にあらはれた。われ〳〵は默りこくつて食事をした。そしていつもよりは早く食卓をはなれた。われ〳〵は家族一同と別れをつげて、めい〳〵の家へ歸つたが、私はわざと自分の劍を忘れてきて、それをとりにひき返した。私はマリヤ・イワーノウナたゞひとりと出逢へるであらうといふ豫感があつた。實さいに、彼女は扉口で私をむかへて、忘れて行つた劍をわたしてくれた。

『さやうなら、ピョートル・アンドレーイッチ！』と彼女は涙をながしながら私に云つた『私はオ

レンブールグへやられますの。おたつしやでお仕合せでおくらし下さいまし。きつと神様は私たちが又お互に出逢へるやうにして下さいますわ。もしか逢へないやうなことがあつたら……」

さう云つて彼女は泣きはじめた。私は彼女を抱きしめた。

『さやうなら、私の天使』と私は云つた『御機嫌よう、私の愛する、私の好きなマーシヤー　たとへどんなことがあらうとも、私の最後の思ひ、最後の祈りは貴女に就いての思ひ、貴女に對しての祈りであるといふことを信じてゐて下さい！』

マーシヤは泣いて、私の胸にしがみついた。私は夢中で彼女に接吻をした。そして急いでその部屋を出て行つてしまつた。

七、襲撃

私の頭よ、頭よ、
よく盡してくれた頭よ！
私の頭はちやうど
三十三年間をつとめあげた。
あゝ、頭は自分に善良な言葉も
また高い地位も求めなかつたやうに、
慾も悦びも勤めのお禮に
貰ひはしなかつた。
只頭は二本の背の高い柱と
楓の横木と、それから
絹の首締縄とを
貰つたばかりだつた。

民謡

私はこの夜ねむりもせず、着物も着替へなかつた。私は曉にマリヤ・イワーノウナが馬車で出てゆく筈の要塞の門のところへ行つて、彼女と最後の別れをするつもりであつた。私は自分の心のなかに大きな變化を感じた。私の魂の動搖は、自分がまだ最近におちいつてゐたところの憂悶より

はまだはるかに辛くないものであつた。私の心のなかでは離別の哀愁と、それとははつきりわからぬが併し甘い希望、危險の耐へがたい期待、それから高尚なる名譽心とがごつちやになつてゐた。夜はいつのまにか過ぎてしまつた。私がすでに家を出て行かうとしてゐるところへ、扉があいて、一人の伍長が私のところへ報告をもつてやつてきた。それはこの要塞のコサック等が夜のまに要塞から逃げ出して、かのユーライをもむりから引つぱつて行つてしまつた、そしてなほ要塞附近には何者だかわからない人間たちが馬をのりまはしてゐるといふ報告であつた。それではマリヤ・イワーノウナは出發できないだらうといふ思ひは、私をおどろかした。私はとりいそぎその伍長に二三の訓戒を與へておいて、直ちに指揮官のところへとんで行つた。

すでに夜はしら〳〵とあけはなれた。私は通路(とほり)をとんでゆくと、うしろから私を呼びとめる聲をきいた。私は立ちどまつた。

『君はどこへゆきます?』とイワン・イグナーチイツチが私に追ひつきながらきいた『イワン・クジミイツチ大尉殿は土堤の上にゐますよ。私はそのお使ひで貴方を呼びに來たのです。梟(フクロウ)がやつて來たのですよ』

『マリヤ・イワーノウナは出發しましたか?』と私は心からのときめきを感じながらきいた。

『駄目でした』とイワン・イグナーチイツチはこたへた『オレンブールグへゆく路を斷たれてしまつたのです。この要塞は包圍されてゐます。困つたことになりました、ピヨートル・アンドレーイツチ!』

私たちは土堤といつても自然にできたもので、垣根によつて固められてある高見へ行つた。そこにはすでに要塞のあらゆる住民が集まつてゐた。守備兵は銃をもつて立つてゐた。大砲はそこへ前日に運ばれてあつた。指揮官は己が少數の軍隊の前を徘徊してゐた。危險の接近はこの老戰士に異常なる勇敢さをあふつたのである。要塞から近距離の平原には、二十人ばかりの乘馬のものが乘りまはしてゐた。彼等はコサック達だと思はれた。その中にはバシュキル等もまじつてゐた。彼等は獸皮の帽子を被り、箭筒をもつてゐるので、見分けるのは容易であつた。指揮官はおのが軍隊をまはつて、立つた。

『さあ、お前たち、けふはわれ〳〵は女帝陛下(譯者註、エカチエリーナ二世のこと)のために防禦して、全世界にわれ〳〵は勇敢なる、忠節な國民であるといふことを示してやるんだぞ!』

兵隊たちは大きく發奮の聲をあげた。シュワーブリンは私のそばに佇んでゐて、ぢつと敵の方を凝視してゐた。平原を馬をのりまはしてゐたものどもは、要塞内のさわぎをみとめて、一塊り

により集まつてお互に相談をしはじめた。指揮官はイワン・イグナーチイッチに命じて大砲を彼等集團の方へむけさせ、自ら口火をつけた。彈丸はすばらしい音をたてゝぶーんと彼等の上をとびこえて、何等の損害も與へなかつた。乘馬の人々はちり〳〵に散つて、眼界から去つてしまひ、平原は空虛となつた。

ところへ、その土堤の上へワシーリサ・エゴローウナがやつてきた。マーシヤもあとにのこるのがいやさに母についてきた。

『如何ですか？』と指揮官夫人は云つた『戰ひはどんな鹽梅に進んでゐますの？　どこに敵はゐますの？』

『敵は遠くはないんだよ』とイワン・クージミイッチはこたへた『何ごとも運だ、萬事うまくゆくだらう。どうだ、マーシヤ、おそろしくはないか？』

『いゝえ、お父様、おそろしかありませんわ』とマリヤ・イワーノウナは答へた『うちにひとりゐる方が私おそろしいんですの』

さう云つて、彼女はちらと私を見て、つとめてほゝ笑んだ。私は昨日彼女の手からうけとつた劍を、ちやうど私の愛するものゝ防禦をなさんがためにうけとつたかのやうに、思はずも劍の柄(つか)

をひきつけた。私の心は燃えた。私は自分を彼女の忠實なる騎士のやうに想像した。そして彼女に信頼されてゐる資格があることを示さうと熱望した。そして耐へがたい焦燥を抱いて、決定的な瞬間を待ちはじめた。

この時にあたつて、要塞から半露里ばかりのところにある丘陵のかげから、新しい騎馬の群があらはれて、まもなく草原には多くの人々が撒き散らされた。それ等はみな槍や弓矢の武裝をしてゐた。そのなかにまじつて、白い馬にのり、赤い外套(カフタン)をきて、片手には拔身のサーベルをもつた人間がやつてきた。これこそプガチョーフなのであつた。プガチョーフはたちどまつた。彼を部下たちがとりまいた。そして見たところでは、彼の命令によるものらしく、四人の騎馬がその群をはなれて、全速力で疾驅しながら要塞をぎはへ近よつてきた。その内の一人は帽子の上に紙片をさしてゐた。も一人のものは槍の先にかのユーライの首を突きさしたのをもつてゐたが、それをうちふつて垣根をこしてわれ〳〵の方へ投げこんだ。哀れなカルムイク人ユーライの首は指揮官の足もとに落ちた。謀叛者たちは叫んだ。

『發砲するな。此方へ、皇帝陛下の方へ出て來い。陛下はこちらにいらつしやるのだぞ！』

『さあ、貴様たち、覺えてろ！』とイワン・クージミイッチ大尉は叫び出した『兵隊たち、狙へ、

撃て！』

兵卒たちは一齊射撃をやつた。手紙をもつてゐたコサツク人はよろ〳〵として、馬からまろびおちた。ほかのもの等は後へ退却してしまつた。私はマリヤ・イワーノウナをちらと見た。ユーライの血だらけな首の顏におどろかされ、一齊射撃につんぼにされた彼女は、ぼんやりと正氣を失つたやうになつてゐた。指揮官は伍長を呼びよせて、あの殺されたコサツクの手から紙片をとつて來るやうに命じた。伍長は野原へ出て行つて、殺されたコサツクの馬の手綱を引いてかへつて來た、彼はその手紙を指揮官に手わたした。イワン・クージミイツチはそれを自分ひとりで讀んでしまつて、それから切れ〳〵に引き裂いてすて〻しまつた。一方、謀叛人どもは明らかに行動にうつる準備をしてゐた。やがて彈丸がわれ〳〵の耳をかすめて唸りはじめた。そして數本の矢はわれ〳〵の近くの土の中、垣根の棒に射込まれた。

『ワシーリサ・エゴローウナ！』と指揮官は云つた『こゝは女のゐるところではない、マーシヤを連れてあちらへおゆき。それごらん、マーシヤはもう半死みたいになつてゐるぢやないか』

彈丸のとびかふ下におちついたワシーリサ・エゴローウナは、明らかに大なる動搖のおこつてゐる草原を見つめてゐた。それから夫の方をむいて云つた。

『イワン・クージミイツチ、生きるのも死ぬのも神様のお意志(こゝろ)でございます。マーシヤを祝福してやつて下さい。マーシヤ、お父様のそばへおゆき』

顏色蒼ざめ、をの〻いてゐるマーシヤはイワン・クージミイツチのそばへ行つて、跪(ひざまづ)き、父に頭をさげた。老指揮官は彼女に三たび十字を切つて、それから立ち上り、接吻を與へて、變つた聲で彼女に云つた。

『では、マーシヤ、仕合せでおくらし。神様にお祈りするんですぞ、神様はお前をお見すてにはならないから。もし善良な人がありますならば、神様、この娘(こ)に愛と相談とをお與へ下さい。お前はね、結婚してもお父様がお母様と暮してゐたやうに暮しなさい。では、さやうなら、マーシヤ。ワシーリサ・エゴローウナ、それでは一刻も早くマーシヤを彼方へつれておゆき』

マーシヤは父の肩にとびついて、泣きはじめた。

『私たちもお別れの接吻をいたしませう』と夫人は泣き出しながら云つた『さやうなら、私のイワン・クージミイツチ。もし私が何かで貴夫を歎かせたことがあつたら、お許し下さいまし！』

『さやうなら、御機嫌よう、お前！』と指揮官は已が老妻を抱きしめながら云つた『さあ、もう澤山だ！　おゆき、家へおゆき。そしてできることなら、マーシヤに袖無服(サラファン)をきせてやつておく

れ』(譯者註。特にロシヤ婦人の用ふる袖無上衣にして、いろ〳〵の美しき刺繍ありて、祭日などにはこれを着飾る)

指揮官夫人はその娘と共に立ち去つてしまつた。私はそのマリヤ・イワーノウナの立ち去つてゆくのを見おくつてゐた。彼女はうしろをふり返つて、私に頭をさげて別れの挨拶をした。さうしてイワン・クージミイツチはわれ〳〵の方へたちかへつて來た。そして彼のすべての注意は敵にむかつて注がれた。暴徒どもは己が首領のまはりにあつまつてゐたが、急に馬から降りはじめた。

『さあ、しつかり構へてゐろ』と指揮官は云つた『襲撃してくるぞ……』

この瞬間におそろしい叫聲、喊聲がひゞきわたつた。暴徒は駈足で要塞にむかつて突撃をはじめた。われ〳〵の大砲には榴散彈が裝彈された。指揮官は最も近距離へ彼等を近よせておいて、俄かに再び發砲した。榴散彈は敵集團のまん中に命中した。暴徒は兩側へたじ〳〵とたじろいで、やゝ後退した。彼等の首領は只ひとりその前面にとゞまつてゐた……彼はサーベルをうちふつて、熱心に部下を說き伏せてゐるらしかつた……喊聲、叫聲は一寸の間しづまつてゐたが、直ちに又あがつた。

『さあ、お前たち』と指揮官は云つた『いまは門をひらいて、太鼓をうて。お前たち! 前進、

逆襲、おれのあとについて來い!』

指揮官とイワン・イグナーチイツチそれから私とは忽ちに要塞の砦(とりで)のそとにあつた。然るに卑怯なる守備兵たちはその場をうごかなかつた。

『何だつて、お前たちはそんな所にとまつてゐるんだ?』とイワン・クージミイツチは叫び出した。

『死ぬんだ、死ぬんだ、御奉公だぞ!』

かゝるときしも、暴徒はわれ〳〵に襲ひかゝつて、要塞内へ侵入した。大鼓の音はやんでしまつた。守備兵はその銃を投げ出した。私は足をすくはれて倒れんとしたが、ふみとゞまつて暴徒とゝもに要塞のなかへはいつた。頭に負傷した指揮官は暴徒の群れのなかに立つてゐて、彼等から降伏を要求されてゐた。私は大尉をすくひにとびこんで行つた。が、數人の頑丈なコサツクが私を捉まへて『ほら、こいつは皇帝陛下の謀叛人なんだ!』と云つて、皮帶で縛りあげてしまつた。われ〳〵は通路(とほり)をひきまはされた、要塞の住民たちはパンと鹽とをもつて家を出てゐた(譯者註、ロシヤでは貴人を誠意をもつて迎へるときは斯するのが昔時よりの習慣であつた)鐘の音がひゞきわたつた。すると突然、群集の中で、皇帝が廣場で捕虜をまち、皆の誓ひをうけてゐるといふ叫びが起つた。人々は廣場へ殺倒した。われ〳〵もそこへ追はれて行つた。

プガチョーフはかの指揮官の家の表階段の上で、肱付椅子に腰かけてゐた、彼は金絲で刺繍のしてある、赤いコサック外套(カフタン)をきてゐた。金色の房のついた、背の高い黒貂(くろてん)の帽子は、彼のきらきらと輝く目の上まで被さつてゐた。彼の顏は私には見知りあひのやうに思はれた。コサックの首領たちは彼をとりまいてゐた。神父ゲラシムは顏色蒼ざめて、うちふるひながら、兩手に十字架をさゝげてゐんでゐて、やがて現はれるべき犧牲に對して彼の許容(ゆる)しを心のなかで祈つてゐるが如く思はれた。庭場には手取りばやく絞殺臺が立てられた。われ〳〵が此處へ近づいてきたときバシュキル人どもは見物の人々を追ひちらして、われ〳〵をプガチョーフの面前へ連れて行つた。鐘の音はやんだ。深い靜寂がやつてきた。

『指揮官はどれか？』と皇位詐稱者はたづねた。群集の中からあの以前のこの要塞にゐたコサック下士が進み出て、イワン・クージミイッチを指した。プガチョーフはおそろしく老指揮官を睨みつけて云つた。

『お前はよくもこの私に、お前の皇帝に對して反抗したな？』

指揮官は負傷に苦しみながら、最後の力をこめて、しつかりした聲をあげて答へた。

『貴樣は俺にや皇帝ではないんだ。貴樣は泥棒なんだ、伴りの皇帝なんだ、どうだ！』

プガチョーフは陰氣に顏をしかめて、白い手布をうちふつた。すると數名のコサックが老大尉をとつておさへて、絞殺臺の方へ連れて行つた。その臺の横木には、昨日われ〳〵が訊問したところの、不具ものにされてゐるバシュキル人が股がり乘つかつてゐた。彼は兩手に繩をもつてゐた。そしてまもなく私は氣の毒なイワン・クージミイッチが宙にぶら下げられたのを見た。そのとき、プガチョーフの方へイワン・イグナーチイッチがつれてゆかれた。

『誓ひをせよ』とプガチョーフは彼に云つた『ピョートル・フョードルヴイッチ皇帝に誓ひをせよ！』

『お前はわれ〳〵の皇帝陛下ではないんだ』とイワン・イグナーチイッチは己が大尉の言葉をくり返して答へた『お前は、おぢさん、泥棒なんだよ、伴りの皇帝なんだよ！』

プガチョーフはふたゝび手布をふつた。善良な彼中尉は、おのが老指揮官のそばにぶらさげられた。

私の番となつた。私は自分の膽力の大きな同僚と同じ答へをしようと思つて、大膽にプガチョーフの顏を見た。そのとき、私が名狀しがたいほどおどろいたことには、私は暴徒の首領たちの間にシュワーブリンがゐるのを見たのである。彼は頭を丸く刈りこんで、コサックの外套をきてゐ

た。彼はプガチョーフのそばへ近寄つて、彼に何ごとか數語耳うちをした。

『こやつを懸けろ！』プガチョーフはもはや私には目をくれないで、さう云つた。

私の首には繩がかけられてしまつた。私は心のなかで祈りの言葉を唱へはじめた。神に自分のあらゆる罪の懺悔をさゝげ、自分に心から親しかつたあらゆる人たちの救ひを神に祈つた。私は絞首臺の下へつれてゆかれた。

『こはがるな、こはがるな』殺人者たちは或は實さいにも私を勇氣つけてやりたいと思つたのであらうか、さうくり返し云つた。

すると、この時突然私は叫び聲をきいた。

『待て、お前たち！　一寸まて！……』

死刑執行者たちは手をやめた。見ると、サウエーリイチがプガチョーフの足許に身を伏せてゐるのだ。

『陛下！』と私の哀れな傅役は云つた『貴族の子供を殺して陛下には何の御利益がございます？放してやつて下さい！　その代りに陛下は身の代金をお取りになることができます。みせしめや皆を脅かしの爲になら、この老いぼれの私めでも絞殺臺にかけて下さいまし！』

プガチョーフは合圖をした。私はたゞちに繩をほどかれて、そのまゝにすておかれた。

『陛下がお前をお許しになるのだ』と人々は私に云つてゐた。

この瞬間、私は自分が救命されたことを喜んだとも云ひ得ない。して又、救命されたのを殘念がつたとも云ひ得ない。私の感情はあまりに混亂しすぎてゐた。私はふたゝび皇位僭稱者の前へつれて行かれて、その前で跪づかされた。プガチョーフはその筋ばつた片手を私にさし出した。

『お手に接吻せよ。お手に接吻せよ！』と私のまはりにゐるものが云つた。しかし乍ら私はそんな卑しむべき醜態よりも、あの最もおそろしき刑罰の方がまさりとした。

『若旦那、ピョートル・アンドレーイッチ！』とサウエーリイチは私のうしろに佇みながら私をつついて囁いた『强情を張つちやいけませんよ！　そんなことをして何の役に立ちます？　唾を吐いて、この惡……（シッ！）この人の手に接吻しておやりなさい』

私は頑として動かなかつた。プガチョーフはその手をひつこめて、笑ひながら云つた。

『君はどうやらうれしさでぼんやりしてしまつてゐるらしい。これを立たせてやれ！』

私は起こされて、自由にされた。私はひきつゞき怖ろしき喜劇を眺めはじめた。

住民たちは誓ひを立てはじめた。彼等は次から次へと進み出て十字架に接吻をなし、それから

皇位僭稱者にお辭儀をした。守備の兵士等もやはりそこに立つてゐた。自分の鈍き鋏で武裝してゐる中隊の裁縫師は、自分の辮髪を斷ち切つてしまつた。彼等は首をふりながら、彼等に許容を示して、自分の一味に加入させたプガチョーフの手に接吻するために近づいて行つた。すべてこのことは三時間ばかりも續いた。遂に、プガチョーフは肱付椅子から立ち上つて、おのが手下の首領どもに伴はれて階段を降りた。彼には高價な馬具で飾られてゐる白い馬がつれて來られた。二人のコサックが彼の手をとつて、鞍の上にのつけた。彼は神父ゲラシムに、お前のところで食事をするからと云つた。かゝる折しも、女の叫び聲がひゞきわたつた。數人の暴徒が階段の上へ、とり亂して殆んど裸體になつてしまふほどに着物をぬがされた、ワシーリサ・エゴローウナをひき出してきたのだ。彼等暴徒のひとりは、もうすでに彼女の袖無襤褸をきこんでしまつてゐた。ほかの者等は羽毛入の蒲團やトランク、茶器、肌着、それからあらゆる世帶道具を盜み出してゐた。

「あなた！」と氣の毒な老婆は叫んだ「私がわるかつたのですから、お許し下さいまし。陛下、どうぞ私をイワン・クージミイッチの方へゆかせて下さい！」

とそのとき、彼女は絞首臺に目をやつて、おのが夫が絞殺されてゐるのを見た。

「惡黨ども！」と彼女は氣もとりみだして叫び出した「お前たちはうちの人をどうしたつて云ふ

のだ！　立派な貴夫、イワン・クージミイッチ、勇敢な指揮官！　プロシヤの銃劍も貴夫に觸れなければ、トルコの彈丸も貴夫には中らなかつたのです。正しい戰爭には、貴夫は命を失ひませんでした。それだのに、脫走した懲役人のために殺されてしまひなすつたのです！」

「あの惡婆アをだまらせろ！」とプガチョーフは云つた。

それで若いコサックがサーベルで彼女の頭を叩き切つたので、彼女は死骸となつて階段の段々にうち殪れてしまつた。プガチョーフは立ち去つた。人々はどやゝと彼のあとについて行つた。

八、招かざる客

招かざる客は韃靼人よりもわるし。

諺

廣場は空虛となつた。私は絕えず一つ場所にゐんでゐた。そして非常におそろしい感銘によつてとり亂された意識を順序だてゝ働かせることができなかつた。

マリヤ・イワーノウナの運命が不明であることは、何よりも一層私をくるしめた。彼女はどこにゐるのであらう？　彼女はどうしたであらうか？　うまく隠れることができたであらうか？　彼女のかくれ場は大丈夫であらうか？……　私はとり亂された心を一杯に抱いて、指揮官の家のなかへはいつて行つた……すべては空虚であつた。椅子や卓子、トランクなどはみんな破壊されてゐた。食器類は壊され、みんなかき廻されてゐた。私は奥の小部屋へゆく小さい階段をかけあがつた。生れてはじめて、マリヤ・イワーノウナの部屋へはいつてゆくのであつた。私は暴徒たちの手によつて引かきまはされた彼女の寢臺を見た。衣装戸棚は叩きこはされて、内部のものは掠奪されてしまつてゐた。御神燈はからつぽになつた聖像匣の前に、まだともつてゐた。壁にかゝつてゐる姿見は安全にとりのこされてあつた……この質素な娘部屋の女主人はどこにゐるのであらうか？　おそろしい思ひが私の心の中にひらめいた。私は彼女は暴徒等の手に捉へらてしまつたのだと、思つた……私の心はしめつけられるやうに苦しかつた……私は悲しく苦しく泣き出した。そして大きな聲で、自分の愛するもの〻名を呼んだ……そのとき、かすかな物音がきこえた。そして衣装戸棚のかげから、かほ色蒼ざめてうちをの〻いてゐる。パラーシャがあらはれた。

『あつ、ピョートル・アンドレーイッチさん？』と彼女は兩手をうちながら云つた『なんといふ

日なのでございませう！　なんといふ怖ろしいことなのでございませう！』

『だが、マリヤ・イワーノウナさんはどこだ？』と私は得耐へられずにきいた『マリヤ・イワーノウナさんはどうした？』

『お嬢様は別狀ございませんでした』とパラーシャはこたへた『お嬢様はお寺のアクリーナ・パムフイローウナさんとこにかくまつて貰つていらつしやいます』

『坊さんのお主婦さんとこに！』と私はおそれを抱いて叫んだ『何といふことだ！　あすこへブガチョーフが行つたんだ！……』

私はその部屋をとび出して、また〻く間にとほりへ出た。そして何ものも見ず何ごとも無感覺で、全速力で坊さんの家へかけつけた。そこへきて見ると、叫び聲や笑ひ聲、唄をうたふ聲がきこえてゐた……ブガチョーフがその仲間と酒宴をひらいてゐるのだ。パラーシャはやはりこゝへ私のあとから駈けつけてきた。私は彼女をそつとアクリーナ・パムフイローウナを呼びにやつた。まもなく坊さんの妻は兩手に空つぽになつた角壜をもつて、玄關にゐる私の方へ出て來た。

『どうぞ、おつしやつて下さい！　どこにマリヤ・イワーノウナさんはゐます？』と私は説明しがたいほどの胸さわぎを覺えながらきいた。

『お嬢さんは私とこの寢臺でおやすみでございますよ、あの仕切の向ふでね』と坊さんの妻君は答へた『ねえ、ビョートル・アンドレーイッチさん、もうついの事で大變なことになりかけましたのよ、でもおかげ様ですつかり安全に濟んでしまひました。それはね、お嬢さんはあの惡黨が食事をするとて席につくとすぐ、正氣づいて、唸りはじめましたの！……私もう生きた心地がありませんでしたわ。惡黨はね、その唸り聲をきゝつけたのですよ。——ときに、婆さん、お前のところぢや誰がうなつてゐるのだね？——つてきくのですよ。私は泥棒めを一杯はめてやりました——私の姪でございます、陛下、病氣になりまして臥せつてをります。もうこれで二週間目なのでございます——つてね。——で、お前の姪といふのは若いのかね？——ときくのですよ。——若うございます、陛下——と云ひますとね、——ぢや婆さん、お前の姪を私に見させてくれ——つて云ひますのよ。私の心はちゞかまつてしまひましたわ、でもどうとも致し方がありません。——どうぞ、陛下、けれど娘は大病でございまして起き上ることもできませんし、陛下のお惠みを頂きにまゐることもできないのでございますが——つて申しますとね、いゝとも、婆さん、私が自分で行つて見るから——なんでせう。そしてあのいやな奴は仕切の向ふへ行つたぢやありませんか、貴方どうおぼしめす！　帷を引きあけてその禿鷹のやうな目で中をのぞきこんだぢやありませんか……でも、おかげ様で、なにごともありませんでした！　けれど貴方、主人も私もお嬢さんがどうとかいふことになれば、もう御一しよに死ぬ覺悟でゐましたのよ。ありがたいことには、お嬢さんはあの惡もの〻顏がわかりませんでした。あゝ、神樣、私どもは目出度い日の來るのを待つてゐたのですのに！　云はずと知れた事ですわ！……お氣の毒な、イワン・クージミイッチさん！　……誰があんなひどいことを思ひついたのでせう！　……それに、ワシーリサ・エゴローウナさんまで？　それにまたイワン・イグナーチイッさんも？　あの人こそなぜ殺されなすつたのでせうね？　そしてなぜ貴方は許されなすつたのでせう？　あのアレクセイ・イワーヌイチ・シュワープリンつて、何ていふ人なんでせうね？　あの人は髮をまるく刈りこんでしまつて、いま私んとこで惡黨たちと一しよに酒もりをしてゐるぢやありませんか！　もうちやんと、云はずと知れたことですわね！　でもね、私が姪が病氣でねてゐるんだと話したときには、ほんとにあの惡黨はまるで私にメスでもさしこむやうに、ぢいと私を見ましたのよ、でも私を裏切りませんでした。そのことだけはあの人に感謝しますわ』

をりしも客のよつぱらつた聲と、神父ゲラシムの聲とがきこえてきた。客たちが酒を要求したので、主人公のゲラシムが妻を呼び立てゝゐたのだ。彼女は多忙であつた。

『ビョートル・アンドレーイッチさん、お家へお歸りなさいまし』と彼女は云つた『いまは私、あなたのことゞころではありませんの。惡黨どもが酒盛をひらいてゐるのですから。貴方がよつぱらひの手におつかまりになつたら、それこそ大變ですわ。さやうなら、ビョートル・アンドレーイッチさん。なるとほりにしかなりませんのよ。きつと神樣はおみすてにはなさらないことでせう』

坊さんの妻は立ちさつてしまつた。やゝ安心した私は、自分の住家へかへつて行つた。私はかの廣場のそばをとほりかゝつて、五六人のバシュキル人どもが絞殺臺のそばにおしあひへしあつて、絞殺されてゐる人の長靴をぬきとつてゐるのを見た。やうやくの骨折りで、私は味方がないのを感じて爆發しようとする怒りをおし鎭めたのであつた。暴徒どもは將校の家々を掠奪して、要塞ぢうをかけまはつてゐた。いたる所に、よつぱらつた謀叛人どもの叫び聲がきこえてゐた。

私は家へかへつた。サウェーリイチは扉口に私を出むかへた。

『ありがたいことです！』彼は私を見てさう叫んだ『私はまた貴方が惡黨どもにとつつかまりなすつたのぢやないかと思ひはじめてゐたところなんですよ。だが、若旦那、ビョートル・アンドレーイッチ！　どうです、家のものはみんな盜みとつてしまつたのですよ、惡黨たちが。着物も

肌着るゐも、いろ／＼な品物も食器類も――もうあとには何にものこつてゐません。でもいたしかたがありませんよ！　有難いことは、貴方が放免されて生きて歸つて來て下すつたことです！

ところで若旦那、貴方はあの大將がおわかりになりましたか？』

『いゝや、わからなかつた。だが、あれや別に誰でもないぢやないか！』

『なぜ、若旦那はそんなことをおつしやるのです？　貴方は、いつか吹雪の晩にとまつた宿屋で、貴方の毛皮の袖無上衣をうまい工合にまきあげてしまつたあの醉ぱらひの男をお忘れになつたのですか？　全く新しい、兎皮の袖無上衣でしたのに、惡魔のあの奴は自分の體にむりからに着込んで、ぴり／＼と綻びさしたものですよ！』

私はおどろいた。實際にプガチョーフとあの時の道案内の男とが似てゐるのは、おどろくほどであつた。私はプガチョーフはあのときの男と同一の人間であると信じてしまひ、けふ私に示した許容の原因はあの時のことにあつたのだと悟つた。私は事件の不思議なつながりにおどろかざるを得なかつた。即ち、浮浪人に吳れてやつた子供の着る毛皮袖無上衣が、けふは私を絞首臺から救つてくれたのだ。そして宿屋から宿屋へとうろつきまはつてゐた醉漢が、要塞を包圍してこの帝國を動搖させたのだ！

『貴方何かおあがりになりますか？』とサウエーリイチはおのがいつもの習慣どほりにきいた『家の中には何もないのですよ。行つて探してきて、何かお支度をいたしませう』

私はひとりあとに殘つて、いろ〳〵なもの思ひにうち沈んだ。自分はどうすればよいのであらう？　惡黨の支配下となつた要塞にとゞまること、もしくはその一味に加はることは將校としては不面目なことである。義務はこの眞實困難なる狀況のもとにある祖國のために私の勤務がまだ有効であり得る所へ、私がゆくやうに要求する……しかし、戀は私がマリヤ・イワーノウナのそばにとゞまつてゐて、彼女の保護者となり後楯となるやうに、强く忠告するのだ。私はかゝる情況が早くも、疑ひもなく變化するものといふ豫感はもつてゐたけれども、やはり彼女の地位の危險きはまりないことを思つて寒心せざるを得なかつた。

私のさうした物おもひは、コサックが一人はいつて來たので斷絶してしまつた。このコサックは――皇帝陛下が貴方をお召しになつてをります――といふ報告をもつて、駈けつけてきたのであつた。

『どこに居られるんだね？』と私はゆくのを承諾するつもりできいた。

『指揮官の家においでになります』とコサックはこたへた『陛下は正餐のあとで、お湯におはい

りになりましたが、いまは御休息中であります。ところで貴方、何を見ましても、あのお方は貴いお方だつて云ふことがわかりますよ、あの方は御食事のあとで、小豚い蒸し燒きを二つ召しあつたのです、それもタラス・クローチキンでも我慢ができないで、フオームカ・ビクハーエフに讓つてしまふほど熱いのを召し上つて、それからあとで冷めたい水を呑んでおすましになりました。申すまでもありませんよ、みんな貴い方のなさることなんです……それにまた、お風呂のなかでは胸の上にある御自分の皇帝陛下でいらつしやる印しを見せておいでになつたといふことです、つまり片方の胸には五哥（コペック）のお金ほどの大きさの兩頭の鷲があらはれてゐて、もう片方の胸には御自分のお姿があらはれてゐたさうですよ』

私はそのコサックの意見に對して反駁を試みる必要をみとめなかつた。そして彼と共に指揮官の家へ出かけた。途々前以てプガチョーフとの會見の有樣を想像し、その會見はどういふ風にをはるだらうと豫め知らうと骨折つた。讀者諸君は私が全然無關心でゐなかつたことはたやすく想像され得ることであらう。

私が指揮官の家へ着いた頃には、たそがれそめてゐた。絞殺臺はその犧牲をぶらさげたまゝ、おそろしく黑くなつて見えてゐた。氣の毒な大尉夫人の死骸はまだ階段の下にころがつてゐた。

その階段のもとには、コサックが二人衛兵に立つてゐた。私をつれて來たコサックは私がやつてきたことを報告しにはいつて行つたが、やがてにたちかへつてきて、きのふ私がマリヤ・イワーノウナと親しく別れをつげたその部屋の中へ、私をつれてはいつた。

私は異常なる場面を見た。卓子かけが掛けられ、酒の角壜がおき並べられてある卓子にむかつて、プガチョーフと十人ばかりのコサックの首領たちが腰かけてゐた。彼等は帽子を被り、花模様のついたルバシュカを着て、酒に醉つて、赤い面相をして、目玉をぎよろ〳〵輝かしてゐた。彼等のなかにはシュワーブリンも、あのコサック下士も、新加入の內通者等もゐなかつた。

『や、君！』とプガチョーフは私を見て云つた『よく來てくれました。まあ、よろしくお願ひしますよ』

一同のものは座をつぼめて私の席をあけてくれた。私は默つて、卓子のはしの方に腰をおろした。私の隣にゐた、若い、頑丈な、美男のコサックは私にコップに普通の葡萄酒をついでくれたが、私はそれには手をふれなかつた。私は好奇心をいだいて、この集會を仔細にながめはじめた。プガチョーフは首席に腰かけて、その大きな拳で黑い頤髯の邊を支へて卓子に恁りかゝつてゐた。彼の容貌は正しく整つてゐて、快い顏かたちであり、何等獰猛な相貌はあらはれてゐなかつた。

彼はしば〳〵五十歲ばかりの男の方へむいて話しかけて、それを或るときは伯父と呼んだり、或るときはチモフエーイッチと云つたり、またときをりは『をぢさん』とあがめたりしてゐた。一同はおたがひに、仲間の樣にあしらひあつて自分たちの首領に對しても特別な尊敬の區別を見せてゐなかつた。彼等のはなしてゐる話は朝の襲擊のことや謀叛の成功、それから將來の行動に就いてなどであつた。各自は大言壯語して、自分の意見を述べ、自由にプガチョーフに駁論を加へてゐた。そしてこの不思議な軍事會議で、オレンブールグをさして進まうといふことに決まつた。これは大膽なる行動である。この行動は間一髮にして不幸な成功となり終つたのだ！　進軍は明日といふことを布告された。

『さあ、兄弟たち』とプガチョーフは云つた『將來の夢を見て、私の好きな唄をうたはうぢやないか。チュマーコフ、はじめてくれたまへ！』

かの私の隣の若いコサックは妙なる聲で、哀愁のこもつた勞働者の唄をうたひはじめた。一同はそれについで合唱した。

お騷ぎでないよ、綠の深い森の母親よ

この若者の俺を、物思ふ心をお妨げでないよ
あしたの朝はこの若者の俺は皇帝の前へ
おそろしい裁判の訊問をうけに行かなきやならぬ
皇帝は俺にかう訊くことだらう——
云へ、云へ、お前、百姓の悴
お前は誰と泥棒をしたのか、誰と掠奪を働いたのか？
お前の仲間は澤山あつたのか？
申しあげます、皇帝陛下よ
ほんとの事を、すべての事實を申しあげます
私には四人の仲間がありました
その第一の仲間は、暗い夜
その第二の仲間は、鋼鐵の短刀
その第三こそは、私の善良な牡馬
その第四こそは、頑丈な弓

私の派遣者は、鋼鐵の矢
そしたら皇帝陛下は云ひ出すことだらう——
お前は素敵だ、百姓の悴よ！
お前は盗み得た、答へ得た
私はその褒美に、お前よ、野の中の
二本の柱に横木のくつゝいた
高い館をつかはさう。

やがて早かれ晩かれに絞首臺にのぼせられなければならない運命の人々によつて唄はれた、この絞首臺の民謠はいかばかり強い力で私の心をうつたかは、説明することは不可能である。彼等のおそろしき顔、しつかりした聲、そして彼等が言葉にあらはした、しかも言葉にあらはさずとも明瞭な憂愁をこめた表現、それらはすべて或る詩的な恐怖をもつて私の心を動かした。

客たちはなほもコップの酒をのみほして、食卓をはなれて、プガチョーフに別れをつげた。私は彼等のあとを追うて、歸らうと思つた。しかるに、プガチョーフは私に云つた。

『坐つてゐたまへ、私は君と相談したいことがあるから』

私と彼とは對坐してあとに殘つた。

數分間、われ〳〵お互ひの沈默はつゞいてゐた。ブガチョーフは私をぢつと見つめて、ときをり狡猾な、嘲笑的な表情をして左の目をぱち〳〵とまたゝかしてゐた。とう〳〵彼は非常に佯らない愉快さをあらはして、笑ひ出したので、私も彼の顏を見てゐて何故ともなしに笑ひはじめた。

『どうです、君？』と彼は私に云つた『君は白狀したまへ、おそろしく怖がつてゐましたね、あの私の手下の若い奴等が君の首に繩をまきつけたときには？　私はおもふが、君はひどく怖がつてゐましたよ……だが、君はあの君の召使がゐなかつたら、おそらくあの絞首臺の横木にぶらさがつてゐたことでせうな。私はすぐとあの爺さんをおもひ出したのです。ねえ、君はあのとき君を宿屋まで案内して行つた男が、皇帝その人であつたとは考へられますか？（さう云つて彼は勿體ぶつた、物々しい樣子をした）君はたしかに私に對して罪がある』と彼はなほ話しつゞけた『しかし、私は君を君の善行のために許したのだ。また君が、私が自分の仇敵から身をかくさなければならなかつた場合に、私に奉仕してくれたがために許したのだ。なほまだ君は見るであらう！私が自分の帝國を受けとつたときには、なほ君には十分恩賞するであらう！　で、君は私にまど

ころから仕へることを誓つてはどうか？』

謀叛者の問ひと彼の大膽さとは私には笑はないわけにはゆかなかつたほど、面白いものであつた。

『なぜ、君は笑ふのか？』と彼は顏をしかめながら私にきいた『それとも君は私が皇帝であることを信じないのか？　はつきり答へたまへ』

私は困亂した。私は浮浪漢を皇帝と認め得るやうな心の狀態にはゐなかつた、卽ち、皇帝と認めることは私には許しがたい卑怯と思はれたのである。彼を面とむかつて詐僞師とよぶことは私の滅亡をまねくことであつた。そして自分が公衆の面前で、もう考へる餘裕なき怒りを抱いて絞首臺につかうと思つてゐた覺悟は、いまは無益な自負と思はれた。私は躊躇した。ブガチョーフは陰鬱な顏をして、私の返答をまつてゐる。遂に（私はいまでも滿足な心をいだいてこの瞬間をおもひ出すのであるが）義務の感情は、私の心のうちで人間的弱點にうち克つた。私はブガチョーフにこたへた。

『きいて下さい、私は貴方にすべて眞實のことをお話しませう。私が貴方を皇帝陛下であると認め得るものかどうか判斷してみて下さい。貴方は賢明なお方です。貴方は御自身で私が狡猾なこ

とを云つてゐるかどうかおわかりになる筈です』

『それでは、君の判斷では私は一體何ものなんだらうか？』

『貴方がどなたであるか、それは神様が御存じのことです。しかし貴方がどなたであらうとも、とにかく貴方は危險な道化をやつていらつしやるのは確かです』

プガチョーフはすばやくちらと私の顏を見た。

『さう云ふ風に君は』と彼は話した『私がピョートル・フョードロヴイッチ皇帝ではないと信じてゐるのだね？　では、よろしい。だがしかし、强ひてする大膽な成功はないものではないか？　むかし、グリーシュカ・アトレピェーフ*は主權を得られなかつたではないか？　自分の欲するところを自分で考へて見たまへ、そして私のそばを立ち去らないでゐる方がいゝ。君にやほかのことで、どんないゝことがある？　坊さんでなければ神父さんの譬へで、どちらでも同じことだ。私に誠實に忠實に仕へるがいゝ。すれば私は君を元帥にしよう、侯爵にしよう。君はどう思ふ？』

（*譯者註、ロシヤの古い史實によれば、ポリース・ゴドウノーフなるものその幼帝ドミイトリイを暗殺して、自ら帝位に卽く。その祕密を知れる若い修道僧グリゴーリイ・アトレピェーフは自分こそドミイトリイの再生なりと稱してポーランドより兵をひきゐてロシヤに侵入する。プー

シュキンはこの史實をその劇詩「ポリース・ゴドウノーフ」に歌へり）

『いけません』と私はきつぱり云つた『私は生れながらの貴族です。私は女帝陛下に忠誠をつくす誓ひを立てたのです。だから貴方には仕へることができません。もし貴方が實さいに私のために幸ひをお望みなら、私をオレンブールグへゆかして下さい』

プガチョーフは考へはじめた。

『だが、もし君を放免するとすれば』と彼は云つた『そのときは君は少くも、私に反抗する勤務につかないといふ誓ひをするか？』

『どうして、私はそんな誓ひを貴方にできませう？』と私は答へた『御自分で御存じでせう、それは私の意志の自由にならないからです。貴方に反抗して進めと命ぜられれば、私は進みますよ、如何ともなしがたいのです。貴方御自身がいま首領の地位にゐて、部下の人たちから服從の要求をしてゐます、それは若し私が自分の勤めが必要となつた場合に、その勤めを拒絕するとすれば、どういふ類似を見出しますか？　私の首は貴方の手のうちにあります。私を放免して下されば、私は感謝いたします。私を處刑なされば、神様が貴方をお裁きになるでせう。たゞ私は貴方に眞實のことを云つてゐるのです』

私の眞實さはプガチョーフをおどろかした。

『それあそのとほりだ』彼は私の肩を叩きながらさう云つた『處刑すれば處刑し得る。許せば許し得る。だが、君はどこへでもゆきたまへ、そして君のしたいことをやりたまへ。明日、私に別れに來るがいゝ。もう今はうちへ歸つてねむりたまへ。私ももう睡氣がさしてきた』

私はそこにプガチョーフをのこして、とほりへ出た。靜かな、寒い夜であつた。月と星とはきら〳〵と輝やいて、廣場と絞首臺とを照らしてゐた。要塞内はすべてもの靜かで、暗かつた。ただ酒場のみは灯があか〳〵とともつてゐて、夜おそい浮浪漢等の叫びがきこえてゐた。私は神父ゲラシムの家に目をやつた。鎧戸や門はぴたりと閉されてゐた。その家の中はすべてひそまり返つてゐるやうに思はれた。

私は自分の住居へ歸りついた。サウエーリイチは私が留守にしてゐるのを大變心配してゐた。私が自由を與へられたしらせは、彼を云ひやうもないほどよろこばした。

『神様、ありがたうございます！』彼は十字を切りながら、さう云つた『夜があけるとすぐにこの要塞を立ちさりませう。そしてゆきたいところへまゐりませう。私は貴方の御食事をどうにかかうにか支度いたしましたから、若旦那、めしあがつて下さい。そしてもうクリスト様の懐に抱

かれたやうに安心して、朝までおやすみなさい』

私は彼のすゝめにしたがつて、非常な食慾をもつて夜食(ウージン)を終り、身も心も憊れはてゝ、何も數物もない露(ね)き出しの床の上でねむつてしまつた。

九、別離

美しいものよ、私はお前と
ちかづきになるのは快かつた
お前と別れるのは死んでしまふかのやうに
悲しい、悲しい、實に哀しい

ヘラスコーフ

朝早く私は太鼓の音で目がさめた。私は集合の場所へ行つた。そこのまだ昨日の犠牲者がぶらさがつてゐる絞首臺のほとりに、すでにプガチョーフの軍勢は勢ぞろひをしてゐた。コサック等

は馬にのり、兵隊等は銃をかついでゐた。旌旗は風にひるがへつてゐた。五六門の大砲、私はそのなかにわれ〳〵のこの要塞のものであつたのを見たが、それ等は行軍の砲架にのせられてあつた。あらゆる住民はやはりそこへ集まつてきて、僧稱者の出てくるのを待つてゐた。かの指揮官の家の表階段のもとでは、一人のコサックがキルギス產の立派な白馬の轡をとつて立つてゐた。私はかの指揮官夫人の死骸を目で探した。それは少しばかり横へ片よせられて、蓆がかぶせてあつた。とう〳〵プガチョーフが玄關から出てきた。人々は帽子をぬいだ。プガチョーフは階段の上にたちどまつて、皆と挨拶をした。首領の一人は彼に銅貨のはいつてゐる袋を手わたした。そして彼はそれを一つかみづゝ撒きちらしはじめた。人々は叫び聲をあげていそいでそれ等を拾ひにかゝつた。これは怪我なしではぶじに濟まなかつた。プガチョーフはおのが一味のおもだつたもの等にとりかこまれてゐた。それ等のなかにはシュワーブリンも佇んでゐた。私と彼との視線がかちあつた。彼は私の目のなかに輕蔑のいろがあるのを知り得たであらう。彼は眞實憎しみと伴りの嘲笑の表情をうかばせて、そつぽをむいてしまつた。プガチョーフは群集のなかに私がゐるのを見て、私に頭を肯かせてそばへ呼びよせた。

『ねえきゝたまへ』と彼は私に云つた『君は今からすぐとオレンブールグへゆきたまへ。そして縣知事や將校一同に私が一週間たつたらそちらへゆくから待つてゐるやうにと云つたつて、知らしてやりたまへ。君は彼等が臣下としての愛と從順とを以て私を迎へるやうに、さうでなければおそろしい刑罰を遁れることができないからと忠告してやるがいゝ。それでは氣をつけてゆきたまへ、君！』

それから彼は人々の方をむいて、シュワーブリンをゆびさしながら云つた。

『お前たちよ、これがお前たちのこんど新任の指揮官である。すべてこの指揮官に服從すべし。指揮官は私に對しお前たち及び要塞の責任をおびてゐるのであるぞ』

私は怖れを抱いてこの言葉をきいた、何となれば、シュワーブリンはこの要塞の指揮官となつて、マリヤ・イワーノウナは彼の權力下にあることになつたからだ！　あゝ、彼女はどうなるのであらう！

プガチョーフは階段から降りた。彼に馬がもつて來られた。彼は彼を助けてのせようと思つてゐたコサック等の手を待たずに、すばやくひらりと鞍の上にのつかつた。

このとき、人々の群集のなかゝらサウエーリイチが出て來て、見てゐると、プガチョーフのそばへやつて行つて彼に一枚の紙をわたした。私はそれがどういふことなのか、考へてもわからな

かつた。

「これは何か？」とプガチョーフは物々しく尋ねた。

「およみ下さい。すれば、おわかりになります」とサウエーリイチは答へた。

プガチョーフはその紙を手にとりあげて、意味ありげな顏つきで永いあひだ右見左見してゐた。

「お前は何といふ六ケしい書き方をするのだ？」と遂ひに云つた「わが明らかな目を以ては何等讀みわけることができぬ。どこに書記官はゐるか？」

伍長の軍服を着た若い男が、すばやくプガチョーフのそばへかけつけた。

「きこえるやうにこれを讀め」その紙を彼に渡しながら僭稱者は云つた。

私は自分のサウエーリイチが何をプガチョーフに書いたのかと非常に好奇心が湧いて來た。書記官といふその男は、大きな聲で次のやうに讀みわけはじめた。

「きやらこ及び絹の縞の部屋着、都合二枚、代價金六ルーブル也」

「それは一體どういふわけだ？」とプガチョーフは眉を顰めながら云つた。

「もつとずつと讀ませて下さい」とサウエーリイチは平然とこたへた。

書記官の男は續けて讀んだ。

「綠色上等羅紗製軍服、一着、代價金七ルーブル也」

「白羅紗製ズボン、一着、代價金五ルーブル也」

「カフス附オランダ出來リンネル・シャツ、十二枚、代價金十ルーブル也」

「茶器入箱、一箇、代價金二ルーブル・半也……」

「なんて云ふ馬鹿げたことを書いてゐるのだ？」とプガチョーフはさへぎつた「箱だとか、カフス附のズボンなんぞが私に何關係があるのか？」

サウエーリイチは咳一咳して、その說明をしだした。

「それは貴方、御らんのとほり私の旦那樣が惡黨どもに盜みとられた財產の一覽表でございます……」

「どんな惡黨どもに盜まれたのか？」とプガチョーフはおそろしげに云つた。

「私がまちがつてをりました、只今は云ひ損なひました」とサウエーリイチは答へた「惡黨と申しましても惡黨ではございません。實はその貴方の兵隊たちが家探しをいたしまして、掠めとつたのでございます。お怒り下さいますな、馬めは四ツ足でも躓くことありといふ譬へどともあります。もつとおしまひまで讀ませて下さい」

『しまひまで讀め』とプガチョーフは云つた。

書記官の男はつゞけて讀んだ。

『更紗及び綿花の琥珀織上敷、都合二枚、代價金四ルーブル也』

『赤羅紗張の狐皮製外套、一着、代價金四十ルーブル也』

『なほ、かの宿屋に於て貴下にお禮として差上げたる兎皮製袖無上衣、一着、代價金十五ルーブル也』

『なんていふ餘分なことをいふか！』プガチョーフは火のやうにきらりと輝く眼をひからせて、さうどなつた。

私は白狀するが、このときわが氣の毒な傅役のために非常におどろいたのであつた。彼は再び說明せんとしたが、プガチョーフはそれを遮つてしまつた。

『お前はよくもそんなつまらないものをもつて、私のそばへやつて來られたものだ！』と彼は書記官といふ男の手からその紙をとりあげて、サウエーリイチの顏に叩きつけながらどなつた『馬鹿な爺いだ！　そんなものを盜みとられた、それはお氣の毒だ！　だが、お前は、老いぼれよ、お前とお前の主人とがこの廣場で私の叛逆人どもと一しよに絞罪に處せられずに許して貰つたこ

とを思つて、私及び私の部下のために永久に神に祈りをさゝげてゐるべきであるぞ……兎皮の無袖上衣だ！　私がお前にその上衣を與れた！　だが、お前はそんなことを云つて、私がお前の生きた皮の上衣を剝がしとるやうに部下に命ずることを知つてゐるか？』

プガチョーフはたしかに豪快の發作の一種におちいつてゐたのだ。彼はもはやそれ以上は何ども云はず、身を轉じて行つてしまつた。シュワーブリンその他の首領たちはそのあとに從つて行つた。一味徒黨は順々にこの要塞を出發した。人々はプガチョーフを見送りに行つた。私はその廣場にサウエーリイチと二人きりでとり殘された。サウエーリイチはその一覽表を手にもつてそれをいかにも殘念さうな顏つきをしてながめてゐた。

彼は私とプガチョーフとの和合のことを知つて、それを利用せんとしてこんなことをやつたのであるが、彼のおろかな計畫は失敗に終つてしまつた。私は彼のさうした時を得ざる夢中さ加減を叱らうと思つたが、笑ひをおしとゞめることができなかつた。

『いくらでもお笑ひなさい、若旦那』とサウエーリイチは云つた『お笑ひなさい。でも、私たちがまた新しく家財道具をこしらへなければならないとすると、それがをかしいことなんでせうかね、いまにわかりますよ』

私は急いで神父ゲラシムの家へマリヤ・イワーノウナに逢ひに行つた。妻君は私をむかへて、悲しいことを報らせてくれた。夜半にマリヤ・イワーノウナはひどい熱病を引きおこして、無意識で、囈言を云ひながら臥せつてゐるといふのであつた。妻君は私を彼女の部屋へ案内して行つた。私は靜かに彼女の寢臺のそばへ行つた。彼女の顏色の甚しく變つてしまつたのには、私は少なからずおどろかされた。病人は私がそばへ來てゐるといふことを見わけることができなかつた。私は私を慰めてくれるらしい神父ゲラシムの言葉も、その善良な妻の言葉にも耳をかさないで、ながい間彼女の前に佇んでゐた。暗い思ひは私の心に動搖を與へた。惡意ある叛逆者等のなかにとりのこされた、誰一人助け手のない哀れな孤兒の境遇と、この私の無力さとに私は苦しめられた。シュワーブリン、彼こそは私の思ひを八ツ裂きにするのであつた。皇位僭稱者から權力を持たせられた彼は、己が憎しみの的である無邪氣な、不幸な娘がとり殘されてゐる要塞を支配して、あらゆることを獨斷的に行ふことができるのである。私はどうすればよいのであらうか？　彼女を如何にして救へばよいのであらうか？　惡黨の手中から如何にして助け出せばよいのであらうか？　そこに只一つの手段がのこつてゐた、卽ち、ペロゴールスク要塞を救援するために、そして自分もそれに出來るかぎり助力するために、私は卽刻オレンブールグへむけて出發する決心をた

てたのであつた。私は神父ゲラシム及びアクリーナ・パムフイローウナと別れを告げて、彼女にはすでに自分の妻と考へてゐるマリヤ・イワーノウナのことをよろしく賴んだ。私は哀れな娘の手をとつて、涙をながしながらその手に接吻をした。

『さやうなら』と坊さんの妻君は私を見おくつて出ながら云つた『御機嫌よろしう、ピョートル・アンドレーイッチさん。きつと私どもはもつといゝ時節になつてお目にかゝれることでございませう。私どもをお忘れにならないで、時をりおたよりをお寄こし下さいまし。お氣の毒なマリア・イワーノウナさんはいまはもう貴方のほかには、慰めてくれるお方も、保護して下さるお方もないのですから』

私は廣場へ出て、ちよつとの間立ちどまり、かの絞首臺を見て頭をさげた。それから要塞を出て、私のあとにとり殘されるやうなことをしないサウエーリイチに伴はれて、オレンブールグ要塞への路をとつた。

私はおのが物思ひにふけりながら歩いて行つた。するとその時突然うしろの方で馬の蹄の音がきこえた。ふり返つて見ると、要塞の方から一人の騎馬のコサックが、もう一匹のキルギス產の馬の手綱をひいて私に合圖をしながら駈けてくるのだ。私は立ちどまつてゐた。そしてその男が

以前のコサック下士であることを知つた。彼はそばまで駈けつけてきて、自分の馬から降り、もう一匹の馬の手綱を私に手わたしながら云つた。

『少尉殿！　皇帝陛下が貴方にこの馬とそれから御自分の體からおぬぎになつたこの外套とをお贈りになりました（その外套といふのは馬の鞍に結へつけてある羊皮製の袖無上衣がそれであつた）それから、まだ』コサック下士は口ごもりながら、つけ加へて云つた『……お金を半ループル……貴方にお贈りになりました。ところが、私はそれをいま途中でおとしてしまひました。どうか、お許し下さい』

サウエーリイチは彼を横目で睨んでゐたが、ぶつ〳〵小言を云ひ出した。

『途中でおとしてしまつた！　だが、お前のポケットのなかでチヤラ〳〵云つてゐるのは、それあ何だい？　恥知らずめが！』

『私のポケットのなかで、何がチヤラ〳〵云つてゐますつて？』とコサック下士は少しもまごつかないで云ひ返した『しつかりして下さいよ、おぢいさん！　これあ馬の轡を入れてゐるんで、がちやついてゐるんです、お金ぢやありませんよ』

『いゝよ、いゝよ』と私はその二人の口論をさへぎつて云つた『お前をおつかはしになつた人に

私がお禮を申したと傳へてくれ。そのおとしたお金はお前が歸り途で出來るだけ探すがいゝよ。あつたら、お前の酒手にあげるからとつておゝき』

『それはどうもありがたうございます、少尉殿』と彼は馬をかへしながら云つた『私はいつまでも貴方のお健康をお祈りいたしてをります』

彼はさう云つて、片方の手でポケットをおさへたまゝ、もと來た路へ引き返して駈けさつた。そして忽ちに見えなくなつてしまつた。

私はその毛皮の上衣をきて、馬にのり、サウエーリイチも私のうしろにのつけた。

『そらねえ、どうです、若旦那』と老人は云つた『私があの惡黨にあゝして賴んだのも無駄ではなかつたでせう、さすがの泥棒も恥かしくなつたのですよ。こんなバシュキル產のひよろながいやくざ馬や、そんな羊皮の上衣なんか、奴等惡黨どもが私たちのものを盜んだものや、それからあの男に若旦那が呉れておやりになつた上等の上衣などの半分の値もありませんが、それでもやつぱり役には立ちますよ。でも、惡い犬から毛の一房でもとれゝばせめてもの心やりですからね』

一〇、市街包圍

草原や山々を占領して、
彼は山の頂きから鷲のやうに市街に視線を投げた。
そして陣地のうしろに斜面をこしらへ、そこに
地雷をひそめ、夜に入つて市外へ運びゆくやうに命じた。

ヘラスコーフ

われ〳〵はオレンブールグに近づくに及んで、頭の毛を剃りおとされそして顏は獄吏の鐵鉗でもつて醜くされてゐる囚人たちの群れがゐるのを見た。彼等は守備の癈兵等の指揮をうけて、城砦のほとりで働いてゐるのであつた。或るもの達は濠のなかに一ぱいにたまつてゐる塵埃を荷車で運び出し、また或るもの等はシヤベルで土地を掘つてゐた。堡壘の上へは石工等が煉瓦を運んで、町の城壁の修繕をやつてゐた。門のところに立つてゐた衞兵がわれ〳〵をとゞめて、われわれの旅行券を見せろと要求した。そこにゐた一軍曹は私がベロゴールスクの要塞から來たことを

きくや否や、私をまつすぐに將軍の家へ案内して行つた。

私は將軍が庭にゐるのを見た。彼は秋の休息のために木の葉をみな落してしまつて裸になつてゐる林檎の樹をながめて、庭男の助けをかりて丁寧にそれ等の樹に溫い藁をまいてやつてゐた。彼は私の方へむいて、私が目擊した來た怖ろしい出來ごとに就いて質問をしはじめた。私は一切のことを話してきかせた。老將軍は一方では枯れ枝を切りおとしながら、私の語る話を注意してき〻取つた。

『氣の毒なミローノフ大尉よ！』と彼は私のもの悲しい物語りが終つたとき云つた『あの人は善い將校であつたのに、氣の毒なことをした。ミローノフ夫人も善い夫人で、茸を鹽漬にするのが實に上手であつた！　ところで、大尉の娘のマーシヤはどうしたか？』

私は彼女が要塞の坊さんの妻君の手にのこつてゐる旨を答へた。

『おや、おや、おや』と將軍は云つた『それあいけない、大いにいけないね。暴徒どもの軍紀なんてものは、どうしても信ずることができないからね。氣の毒にその娘はどうなることだらう？』

私はベロゴールスクの要塞はこゝからさして遠くはないから、多分は將軍閣下は躊躇なくかの要塞の哀れな住民を救ふために軍隊を派遣なさることだらうと答へた。

將軍は信じがたい顏つきをして、頭をよこに振つた。

『ま、も少し見てゐるさ、見てゐるさ』と將軍は云つた『われ〳〵はそのことに就いて話す時期には達してをらぬ。ときに君に私んとこへお茶をのみに來て貰ひたい、といふのはけふ私の所で軍事會議があるのだからね。君はその節、無賴漢ブガチョーフのこと、それからその軍隊のことなどに就いて、われ〳〵に的確な報告をして貰ひたい。だからいまは、それまで宿舍へ行つて休息をしたまへ』

私は私に與へられた宿舍へ行つた。そこではサウェーリイチがもうすでに家事をやつてゐた。私はいら立たしい耐へがたい心を抱いて、約束の時間をまちはじめた。讀者諸君は私が自分の運命に非常の影響をもつてゐなければならない筈の、その軍事會議に出席することを等閑には附してゐなかつたことを、容易に想像することができよう。

私は將軍のところで、たしか稅關長だつたと覺えてゐるが、この町の吏員の一人である、肥つた、赤ら顏の、無地錦繡の外套をきた老人に出逢つた。彼はイワン・クージミイッチ大尉の運命のことを私に尋ねだした。彼は大尉を自分の名附親と呼んでゐたが、しば〳〵私の話をあとからあとからもち出してくる質問と道義的な註釋とでさへ切つた。それらの質問及び註釋がこの人が戰

術における博學の人であるといふことを示さないまでも、少くも聰明な、生來の才能をもつてゐる人だといふことを證據立てゝゐた。その間に、ほかの呼ばれた人たちも集まつてしまつた。一同が席につき、そして一同にお茶がくばられたとき、將軍は非常にはつきり且つ詳細に協議すべき問題について說明をした。

『さて、諸君』と彼は話しつゞけた『われ〳〵は如何にして暴徒等に對抗して行動をなすべきかといふことを、決定しなければならない、すなはち、積極的に攻勢をとるか、それとも消極的に守勢をとるかの何れかを決定しなければならない。その兩者の方法は何れともにそれ〴〵利、不利の點を併せもつてゐる。攻勢をとることは、敵に對してより早き絕滅を與へ得る、より大きな望みがあることを示してゐる。そして守勢をとることは、より確實であり、より安全なことを示してゐる……それ故に、軍紀に從つて各自の意見を求めることゝしたい、つまり、位階により年若い人たちから始めて貰ふことゝする。少尉補のピョートル・アンドレーイッチ君』さう云ひながら彼は私の方をむいて、なほ『どうかわれ〳〵に君の意見をのべてくれたまへ』

私はたちあがつて、まづ簡單にブガチョーフなる人間及び彼の一味徒黨のことに就いて述べ、それから決定的に、かれ僭稱者は正規の軍隊に反抗し得る手段をもつてゐる筈がないと云つた。

私の意見は官吏たちには明らかな不滿足をもつて迎へられた。彼等は私の意見は若いもの丶輕率と大膽とから生れたものだと考へた。不平不滿の聲があつた。そして私は誰か丶小聲で云つた——青二才が——といふ言葉を耳にした。將軍は私の方をむいて、頰笑みながら云つた。

『少尉補！　軍事會議に於ては一般にその第一の意見は攻勢的行動をとることを利とするものだ卽ちまたそれが軍紀でもある。なほ、意見を集めてゆかう。六等官のかた、貴方の御意見を述べて頂きたい』

かの無地錦繡の外套をきた老人は、そのきはめてうすくラム酒がまぜてあるお茶の三杯目をとり急ぎ飲みほして、將軍に應へた。

『閣下、私は攻勢及び守勢の何れの行動をも執つてはならないとおもふのであります』

『それあ、一體どういふわけですかね、貴方？』おどろいた將軍は問ひかへした『戰術としてはほかに方法はありませんが、つまり守勢もしくは攻勢が……』

『閣下、策略的行動をおとり下さい』

『はつはあ、なるほど！　貴方の御意見は全く賢明ですな。策略的行動は戰術として許されるものです。われ〳〵も貴方の御忠告を利用いたしませう。機密費から……七十ルーブル乃至百ルーブルを支出すれば……あの惡黨の首に賭けることができますが……』

『そしてその時にですな』と稅關長は將軍の言葉をさへぎつた『もしか彼等泥棒どもが、おのれ等の大將の手や足をしばつてわれ〳〵に差出さない曉には、私はこの六等官は誓つてうちすてゝキルギスの羊になつてごらんに入れますよ』

『われ〳〵はなほそのことに就いては考慮し、且つ御相談することゝいたしませう』と將軍は答へた『さり乍ら、いかなる場合に於ても軍事的方法を執る必要があるのです。諸君、軍紀によつて諸君の御意見をお述べ下さい』

みなの意見は私のに反對した意見であつた。官吏一同は軍隊のたのみにならないこと、成功の覺束ないこと、愼重細心を要すること、その他それに類したことを述べた。みなはあけつぴろげな野原に於て武力的戰鬪の好結果を得ようと試みるよりも、石壁にとりかこまれた要塞內に居殘つてゐて大砲の援護のもとにある方が、むしろ賢明な方法であると決議した。つひに、將軍は一同の意見をきゝ終り、パイプの灰を叩きおとして、次のやうに云つた。

『さて、諸君！　私は自分の立場として云へば全然少尉補の云はるゝところに贊成であるといふことを諸君に申上げなければならぬ。何となれば、この意見は殆んど常に守勢的行動よりも攻勢

的行動をまされりとなす健全なる戰術の、あらゆる法則に立脚してゐるからであります」

そこで、彼は話をやめてパイプに煙草をつめはじめた。私の自愛の念は凱歌を奏した。私は傲然と官吏たちを眺めた。彼等はお互に不滿足、不安さうなおもゝちをしてひそ〳〵語りあつてゐた。

『しかし乍ら、諸君』と彼は深い溜息とゝもに、濃いゝ煙草の烟をはきながら續けて云つた『問題が、わが最も仁慈にまします女帝陛下より私に委ねられたるこの地方の安全といふことに係はるかぎり、私はその方法ではそれだけの大きな責任は自分には負ひかねるのであります。從つて私は、この町に籠城して敵の攻圍を待ちうけ、一方敵の攻擊に對しては大砲の力をもつて對し、また出來うべくんば逆襲を以て擊退する方が最も賢明なる、且つ最も安全なる策と決定された大多數の諸君の意見に贊成するものでありまず』

こんどは官吏たちが嘲笑的な目をもつて私を見た。會議はそれで果てた。私は、おのが確信する意見をもつてゐるにも拘はらず愚かな、無驗驗な人たちの意見に從はうと決心した、尊敬すべき軍人の軟弱さを殘念と思はないわけには行かなかつた。

かうした立派な會議のあつたのち、なほ數日經つて、われ〳〵は己が約束に忠實なるプガチョ

ーフが、このオレンブールグの要塞に接近して來たことを知つた。私は城壁の絕頂から、暴徒の軍隊を見た。彼等の兵數は、私があの目擊したベロゴールスク要塞襲擊のときの兵數に、十倍も增加してゐるやうに私には思はれた。彼等には、すでに征服されてしまつた小さい要塞でプガチョーフが奪つた大砲が幾門もあつた。私はあの軍事會議の決議を思ひ出して、このオレンブールグの城壁内の永久の籠城を豫想して、もうほとんど泣き出さんばかりであつた。

私は、歷史に屬するもので而かも家庭に殘しおく覺え書きには屬しないところの、オレンブールグ攻圍の有樣は描寫すまい。簡單に、この攻圍はこの土地の指揮官の不注意によりて、饑餓とあるかぎりの不幸とを耐へしのんだ住民等にとつては、有害なものであつたことを述べよう。オレンブールグ要塞内における生活は、最も耐へがたいものであつたことは容易に現像し得る。すべての人々は憂愁を抱いて、自分の運命の決定を持つてゐた。すべての人々は、實際におそろしいほどであつた物價の騰貴に溜息をついた。住民等は彼等の屋敷の上をとんでゆく彈丸に馴れつこになつてしまつた。プガチョーフの襲擊すらも、もはや一般の好奇心を惹かなかつた。私は退屈のために死なんばかりであつた。時はすぎて行つた。私はベロゴールスク要塞からのたよりは受けとらなかつた。マリヤ・イワーノウナと別れてゐることは、私には耐へられなくなつてきた。

彼女の運命に就いては何事もわからないことは、私を大へん苦しめた。私の唯一の氣ばらしは、馬に乘り馴らすことであつた。私はプガチョーフのおかげで、よい馬をもつてゐた。私はその馬と貧しい食物をわけあひ、それに乘つて市外でプガチョーフ方の騎手等と射擊を交へるために、毎日のやうに乘り出した。この射擊交換に於ては、勝れた馬をもち、飽きるほど食ひ且つ飲んでゐる惡黨どもの方が、通例まさつてゐた。飢ゑたる町の騎兵は、彼等にうち勝つことはできなかつた。時をり野のなかへわが歩兵は進み出て行つたが、深い雪のために、散らかつてゐる敵の騎手に對して效果ある行動を妨げられた。大砲は堡壘の上からたゞむなしく發射するばかり、それにまた野のなかに置き去りのまゝ、馬の疲勞してゐるために進まなかつた。かうした方法が、われ〳〵の軍事的行動であつたのだ！　かうした方法が、オレンブールグの官吏ともが愼重なる、また賢明なる方法と呼んだものなのだ！

或る日のこと、われ〳〵はどうにかかうにか、かなり集團の敵を追ひ散らし驅逐することに成功した。私はおのが仲間から逃げおくれた一人のコサックに追ひついた。私はすでに自分のトルコ製のサーベルでその男を叩き斬らうとした。するとそのとき突然、彼は帽子をぬいで、叫び出した。

『ごきげんよろしう、ピョートル・アンドレーイッチさん。どうです、御機嫌はよろしうございますか？』

私はひよいと見ると、それはあのベロゴールスクにゐたコサック下士であることがわかつた。私は彼に逢つたのが云ひやうもなくうれしかつた。

『ごきげんよう、マクシームイチ！』と私は彼に云つた『お前はベロゴールスクからずつと以前に來てゐたのかね？』

『なアに、ずつと以前ぢやありませんよ、ピョートル・アンドレーイッチさん、きのふ此方へかへつて來たばかりなんです。私ね、貴方あての手紙を預つてゐるんですがね』

『手紙、それあどこに持つてゐる？』と私はもうすつかりいら〳〵しながら、叫んだ。

『こゝに持つてゐます』マクシームイチは片手でポケットをおさへながら答へた『私はあのバラーシャに何とかして貴方にわたしてあげようつて約束したのですよ』

さう云つて、彼は私に折りたゝんだ一枚の紙を手渡しておいて、すぐと駈け去つてしまつた。私はその紙をひらいた。そして動悸のする胸をおさへながら、次のやうな文言をよんだ。

神様は私の父や母を突然に奪つておしまひになりました。いまは、私はこの世に親もなければ保護して頂く方もございません。私は貴方がつね〳〵私を深切にして下さいましたことや、どんな人でも助けようとしていらつしやることを存じて居りますので、貴方にお願ひいたすのでございます。このお手紙が、何とかして貴方のお手にとゞきますやう、神様においのりいたします！マクシームイチは貴方にお手紙をとゞてあげませうと、約束してくれました。パラーシャはやつぱりマリシームイチから、貴方がとき〳〵突進しておいでになるのを遠くから見ることや、貴方のために涙をながして神様にどぶじをお祈りしてゐます者どものこともお考へにならず、御身の上にすら少しもお氣をつけていらつしやらないといふことを、きいたのでございました。私はながい間病氣で臥せつてをりましたが、よくなりましたときに、歿くなりました私の父のあとをうけてこの要塞の指揮官になつてをります、あのアレクセイ・イワーノヴイッチ・シュワーブリンが、ゲラシム神父さんにプガチョーフの名を云つて脅かしつけて私を自分の方へ引きわたすやうに無理を申しました。私は私の家で監視つきで暮してをります。アレクイ・イワーノヴイッチは私が妻になるやうに強ひてをります。あの人は、私の命を助けてやつた恩があるのだと申してをります、それはアクリーナ・パムフイローウナさんが、いつかプガチョーフに私を御自分の姪のやうに云つ

てお欺しになつたのを、默つてゐてやつたからなのださうでございます。けれど、私はあんなアレクセイ・イワーノヴイッチのやうな人の妻にならなければならない位なら、いつそ死んでしまふ方がたやすうございます。あの人は私を大へんむごく取あつかひまして、若しも私が思ひをひるがへさず、同意しないならば、そのときは私をプガチョーフの陣營へ連れて行つて、――貴女を、あのリザウエータ・ハルローワのやうな目にあはせる――と申して、おどかします。私はアレクセイ・イワーノヴイッチに考へさせてくれるやうに賴みました。あの人はなほ三日間待つことに同意いたしましたが、もし三日たつても私があの人の妻にならないあかつきには、もういかなる容赦もしないからと申しました。貴方、ピョートル・アンドレーイッチさま！　貴方は私に只一人の保護して下さるお方でございます。この哀れな私を、お守り下さいまし！　將軍さまや皆の指揮官さま方に、私どもの方へ一時も早く援軍をお送り下さいます樣、むりからにでもお願ひして頂きたうございます。そして貴方もどうぞ、出來ますことならおいで遊ばして下さいまし。

貴方に從順な、哀れなみなし兒、

マリヤ・ミローノワより。

この手紙を讀んで、私はほとんと發狂せんばかりであつた。私は情容赦もなく自分の哀れな馬に拍車をくれて、町へはせ歸つた。みち〳〵私はあれやこれと可哀さうな娘の救濟のことを考へたが、何ごともいゝ考へは出て來なかつた。町へ疾驅してはいつて、私はまつすぐ紅將軍のところへやつてゆき、せつかちにそのそばへとびこんで行つた。

將軍はその海泡石のパイプを吹かしながら、部屋のなかを彼方此方へと歩きまはつてゐた。彼は私がとびこんで來たのを見て、たちどまつた。多分、私の樣子が彼をおどろかしたのであらう。彼は私が泡をくつてとびこんできた理由を尋ねた。

『閣下』と私は彼に云つた『私は自分の產みのお父さんにお願ひすると同じに、閣下のおそばへお願ひがあつて駈けつけてまゐりました。とうぞ、私のお願ひをきゝ入れて下さいまし。ことは私の全生涯の運命に關することなのですから』

『それはどんなお願ひだね、君？』おどろいた老將軍はさうきいた『私が君のためにどうすればいゝのかね？……話したまへ』

『閣下、どうか私に兵隊を一箇中隊と五十人ばかりのコサックとをお授け下さい、そしてベロゴールスク要塞の奪還にやつて下さい』

將軍はぢいと私の顏を見つめてゐた。きつと彼は私が氣がちがつたのではないかと（その思ひは殆んどまちがつてゐなかつたが）思つたのであらう。

『どうするんだつて？　ベロゴールスク要塞を奪還する？』と、彼はつひに云つた。

『私は必ず成功することを閣下に保證いたします』と私は熱心にこたへた『ただ私をやつて下さいまし』

『いや、駄目だ、若い君よ』と彼は頭をよこにふりながら云つた『あすこまではこれほどの距離があるのだから、敵が君の軍略上の要所々々の聯絡をうち斷つのは容易なことであり、君に對して完全な勝利を得ることも易々たることだ。斷たれたる聯絡なるものは……』

私は將軍が軍略的な推理にふけつてゐるのを見ておどろいた。それであわてゝ彼の言葉をさへぎつた。

『ミローノフ大尉殿の娘さんが』と私は彼に云つた『私に手紙をよこしたのです。その娘さんは助けをもとめてゐるのです。あのシュワーブリンが娘さんに自分の妻になれと無理なことを云つてゐるのです』

『それあ、ほんとかね？　おゝ、あのシュワーブリンめが……あいつが私達の手におちたことな

ら、私は二十四時間中にあいつの裁判をやるやうに命ずるね。そしてわれ〳〵はあいつを要塞の胸壁の上で、銃殺に處してしまふがな！　ぢやが、それまでは我慢してゐなきやならない……」

『我慢してゐなければなりませんて！』と私はわれを忘れて叫んだ『だが、奴はその間にマリヤ・イワーノウナと結婚してしまひますよ！……』

『さうだ！』と將軍は答へた『それはまだ不幸ではないのだ。あの娘はいつそシュワーブリンの奴と、それまでに結婚してしまふ方がいゝのだ。すれば、あの男はマリヤ・イワーノウナを安全に保護するからナ、そしてぢや、彼が銃殺の刑に處せられた曉にや、あの娘はまた神様が花婿をさがして下さるといふものだ。娘のやうな、若い後家といふものは、いつまでもそのまゝでゐるものではない。つまり、私が云はんと欲することは、若い後家といふものは生娘よりも早く自分の夫を見つけるものだといふことだ』

『マリヤ・イワーノウナをあのシュワーブリンに奪れる位なら、私はいつそ死んだ方がましです』と私は無我夢中で云つた。

『おや、おや、おや』と老將軍は云つた『やつと私はわかたつよ、君はたしかにマリヤ・イワーノウナに戀してゐるんだね！　全く、見當ちがひのことを云つてた！　可哀さうな男だナ！　ぢやが、やつぱり私はどうあつても君にや一箇中隊の兵とコサック五十とを授けることはできない！この遠征なるものは不賢明なものだ。私はそれに對しちや責任を負ひ得ないからナ』

私はうなだれてしまつた。私はすつかり絶望におちいつてしまつた。とその時、俄かに或る考へが私の腦裏におもひうかんだ。それがどんな考へであるかは、讀者諸君は昔の小説家が云つてゐるとほり、次の章をお讀みになればわかることである。

一一、暴徒の本營

獅子は生れつき獰猛であつたけれども
このときは滿腹であつた

「何しに貴方は私の洞へおいでになりました？」
と獅子は丁寧にたづねた。

スマローコフ

私は將軍に別れて、いそいで自分の宿舍へ歸つて行つた。サウエーリイチは私を出迎へて、例によつて忠告した。

『若旦那、貴方はあんな醉ぱらひの暴徒なんかと戰ひをなすつて、何がおもしろいのでせうね！そんなことは、貴族ともあらう人がなさることでせうか？　いまはむきになつて戰爭なさるときではありませんよ、何でもないことに無駄に命をすてゝしまはなればなりませんからね。それも貴方がトルコとかスウエーデンとかと戰つていらつしやるのならそれでよろしいけれど、あんな奴等とぢや人に話しするのも恥かしいことですよ』

私は彼の話を遮つて、いま私にはみんなでどれだけのお金があるかと尋ねた。

『十分ありますよ』と彼は滿足さうな樣子でこたへた『暴徒たちがどんなに探したつて、私はやつぱりうまくかくしおほせたのですからね』

さう云ひながら、彼はポケットから銀貨の一ぱいはいつてゐる、細長い、しぼつてある袋をとり出した。

『それでは、サウエーリイチ』と私は彼に云つた『僕にいまその半分をくれないか、殘りの半分はお前にあげる。僕はこれからベロゴールスクの要塞へ出かけるつもりだ』

『若旦那、ピョートル・アンドレーイッチ』善良な傅役（チャーチカ）はふるへる聲で云つた『神樣をおそれなさい！　暴徒たちがどこもこゝも通路を斷つてしまつた今日、貴方にどうして旅なんぞ出來ます！貴方が御自分のお體が可愛くないとても、せめて貴方の御兩親樣がお氣の毒だとおもつておあげなさい。貴方はどこへいらつしやるのです？　なぜです？　もう一寸の間お待ちなさい、そしたら軍隊がやつてきて、暴徒たちをみんな取捉まへてくれますよ。そのときは貴方はどこへでもお好きな所へいらつしやい』

しかし、私の計畫は鞏固なもので動かされなかつた。

『もうかれこれ考へるのはおそいんだよ』と私は老人に應へた『僕はゆかなければならないんだ。ゆかないわけにはゆかないんだよ。心配おしでないよ、サウエーリイチ、神樣は御仁慈でいらつしやるんだから、われ〳〵はまた逢へるやうになるよ！　ねえ、ぐづ〳〵したり、けち〳〵したりしちやいけない。たとへ物價が三倍になつてゐようとも、お前に必要なものはお買ひよ。その半分のお金はお前にあげるからね。もしか三日經つても僕が歸つて來なかつたら……』

『貴方は何といふことをおつしやるのです、若旦那？』とサウエーリイチは私の云ひかけたことを云はせなかつた『私が貴方をお一人でやるなんてことができることでせうか！　そんなことは

夢にも思つてゐないことですよ。貴方がもうどうしてもゆくと御決心なすつてゐるのなら、私は歩いてゞも貴方のあとについてまゐります、貴方を見すてはいたしません。貴方がいらつしやらないのに、私がどうして安閑とこの石の城壁の中に居られませう！　ほんとに、私は氣がちがつたのではないでせうか？　若旦那、何ごとも貴方のお意志次第です、でも、私は貴方のおそばを放れることぢやありません』

私はサウエーリイチと云ひ爭ふことは無用だと知つてゐた。それで、彼に旅に出る準備をするやうに許した。半時間ばかりたつて、私はおのが善良なる馬にまたがつた。サウエーリイチと云へば、町の住民の一人がどうとも養ふ方法がつかないで無料で呉れたところの、飢ゑた、跛のやくざ馬にうち乘つた。われ〳〵は町の門へ行つた、番兵等はわれ〳〵を通してくれた。かくして、われ〳〵はオレンブールグを出發したのである。

もうたそがれそめてゐた。私の進んでゆく路は、プガチョーフの陣營であるベルドの村を通過してゐるのであつた。眞すぐな路は雪に掩はれてゐたが、その荒野一面には毎日々々新しくつけられてゆく馬の足跡が、明らかに點々と印されてゐた。私は馬を疾驅させて行つた。サウエーリイチはずつとおくれて漸くのことで私についてくることができた。そして彼は絶えず叫んでゐた。

『も少しゆつくりやつて下さい、若旦那、どうぞも少しゆつくり！　私のこのいやなやくざ馬は、貴方の足のいゝ奴のあとについて行けないんですよ。どこへそんなに急いでゆくんです？　宴會にでもゆくんなら結構ですが、私はもうまつさかまにおつこちやしないかと、おつかなびつくりなんですよ……ピョートル・アンドレーイッチ……若旦那、ピョートル・アンドレーイッチ！……あゝ、どうしたらいゝのかなア、若旦那は見えなくなつてしまふ！』

まもなく、ベルドの村の灯がちら〳〵と見えはじめた。われ〳〵はその村の自然の城砦のやうになつてゐる谷のそばへ近づいて行つた。サウエーリイチは絶えず哀願的な祈りをくりかへしながら、私におくれてしまつてはゐなかつた。私はうまい工合にこの村をとほりぬけてしまひたいと思つた、ところが、突然私は自分のまん前に棍棒の獲物をひつさげた百姓が五人ばかり立つてゐるのを見た。それはプガチョーフの本營の前哨なのであつた。彼等はわれ〳〵に呼びかけた。私は答ふるべき暗號を知らないので、默つて彼等のそばをとほりぬけようと思つた。しかるに、彼等は直ちに私をとりまいてしまつた。そしてその内の一人は私の馬の轡をつかまへた。私はサーベルを引きぬいて、その百姓の頭に斬りつけた。彼の帽子がおちた。彼はよろ〳〵と後へよろめいて、手にした馬の轡をはなしてしまつた。その他のもの等はまごついて、逃げ去つた。私は

この機に乘じて、馬に拍車をあてゝ駈け出した。

だん〳〵と近づいてくる夜の闇は、私をあらゆる危險から救つてくれた。が、そのとき私はあたりを見まはして、サウエーリイチが私について來てゐないことを知つた。哀れな老人はその飢ゑた馬にのつてゐて、暴徒のそばをかけぬけることができなかつたのだ。どうすればよいのか？彼を少しの間待つてゐながら、私は彼がひきとめられてしまつたのだと信じて、馬を返し、彼の奪還にやつて行つた。

だん〳〵とかの谷へ近づいてゆくに及んで、私はとほくから物音がするのがきこえた。サウエーリイチの叫び、話聲がするのがきこえた。私は大いそぎで、いまのさき私をとゞめたところの前哨の百姓たちの間へ再びのり込んで行つた。サウエーリイチは彼等のなかにゐた。彼等は老人をそのやくざ馬から引きおろして、縛らうとしてゐた。私がやつて行つたことは、彼等をよろこばした。彼等は叫び聲をあげて私にとびかゝつてきて、たちまちに馬から引きずりおろしてしまつた。その内の一人、うち見るところ前哨長らしいのが、これから直ちにわれ〳〵を皇帝陛下のところへ連れてゆくからと云つた。そしてつけ加へて云ふには、

『わが皇帝陛下は今すぐと君たちを綾罪にするやうにお云ひつけになるか、そゝとも明朝まで待つやうにお命じになるか何れかだ』

私は反抗しなかつた。サウエーリイチも私のするとほりにしてゐた。哨兵等はわれ〳〵を意氣揚々と引たてゝ行つた。

われ〳〵は谷をわたつて、その村へはいつて行つた。どの百姓小屋にも灯がともつてゐた。いたる所で、物音と叫び聲とがきこえてゐた。通路で、私は多くの人々に出逢つた。けれどくらがりの中で誰もわれ〳〵を認めるものも、私がオレンブールグの將校だなどゝ知るものもなかつた。われ〳〵はまつすぐに、十字路の一角にたつてゐる百姓小屋へつれてゆかれた。門のところには五六箇の酒樽、二門の大砲がおいてあつた。

『これが皇帝陛下のおいでになる御殿だ』と百姓の一人が云つた『すぐとお前たちのことを報告して來よう』

さう云つた男はその百姓小屋の中へはいつて行つてしまつた。私はサウエーリイチを見た。老人は十字を切つて、口の内で祈禱の文句をとなへてゐた。

私はながい間待つてゐた。とう〳〵かの百姓はかへつてきて、私に云つた。

『さあゆけ、皇帝陛下は將校を連れてはいるやうにお命じになつたから』

私はその百姓小屋、いや彼等百姓の云つてゐた言葉に從へば、皇帝の御殿へはいつて行つた。そのなかは、二本の脂肪蠟燭で照らされてゐて、壁は金色の紙が貼りまはしてあつた。尤も、ベンチや卓子だとか、繩でしばつてある水瓶、釘にかゝつてゐるタヲル、片隅にある鐵耙、壺でこしらへてある圍爐などは、すべて普通の百姓小屋どほりであつた。プガチョーフは聖像がかゝつてゐる下に、赤い外套をきて、背の高い帽子を被つて、兩手を椅子の肱付にもたせて勿體ぶつて腰かけてゐた。彼のまはりには、彼の仲間の重だつたもの數人が、僞りの敬々しい樣子つきをして立つてゐた。

オレンブールグから將校がやつてきたといふ報らせは、おそろしく暴徒等の好奇心をあふりたてたといふことは明らかであつた。そして彼等は私を意氣昂然として迎へようとしてゐたのは一目瞭然であつた。プガチョーフは私がはいつてゆくと、ちらと私を見た。彼の伴りの行々しさは忽ちに消えてしまつた。

『あゝ、君だつたのか！』と彼は私に快活に云つた『どうです、御機嫌はいゝですか？　なぜ、君はこんなところへやつて來たのです？』

私は自分の用事でとほりかゝつたこと、それを彼の手下のもの達が引とめたのだといふことを

答へた。

『ところで、どんな用事で？』と彼は私にきいた。

私はどう答へてよいかわからなかつた。プガチョーフは、私がそばに多勢きいてゐるものがあるので話すのをいやがつてゐるのだと察して、自分の仲間たちの方をむいて、こゝを立ち去つてゐるやうに命じた。一同のものは、その場を立ち去らない二人のものを除いては、みな彼の云ふことをきいて出ていつてしまつた。

『あの二人には構はず話したまへ』プガチョーフは私にさう云つた『私はあの二人には何事もかくさないのだから』

私は横目で、この皇位僭稱者の寵臣といふのを見た。その一人は弱々しい、腰の曲つた老人で、白い頤髯を生やしてをり、灰色の百姓外套の上に肩から空色の綬章をかけてゐるほかには、別にこれといつて著しく變つた點をもつてゐなかつた。ところが、私はそのもう一人を永久に忘れることができない。その男は背が高くつて肥つてゐて、肩幅がひろく、私には四十五歳位とおもはれた。濃い赤ちやけた頤髯、灰色のきら〳〵輝く目、鼻柱のない鼻、額の上頰の上の赤みがゝつた燒印のあと、それらは彼の大きな、痘痕面に何ともかとも云ひ表はしがたい表情を與へてゐた。

彼は赤いルバシュカをきて、キルギス風の部屋着をき、コサック風のだぶ〳〵のズボンを穿いてゐた。最初の老人は（私はあとで知つたのであるが）逃亡した伍長でベロボロードフといふのであつた。次の鼻のない男は追放囚人で、三度シムビールスクの鑛山を逃亡したもので、アファナーシイ・ソーコロフ（その綽名はフロプーシヤ）といふのであつた。特別に私を動搖さした感情があつたにもかゝはらず、私が非常の失望を抱いてやつて來たこの社會は、ひどく私に面白い想像に耽らせたのであつた。しかるに、プガチョーフは私をおのが質問の方へ引ぱつて行つてしまつた。

『話したまへ、どんな用事で君はオレンブールグを出て來たのだか？』

好奇な思ひが私の頭におもひうかんだ。といふのは、再びプガチョーフのそばへ私をつれて來た神の攝理は、私に自分の計畫を實現すべき機會を與へてくれたのだと思はれた。私はこの機會を利用しようと決心した。その決心をよく考へなほして見るひまもなく、私はプガチョーフに答へたのであつた。

『私はベロゴールスク要塞で恥かしめられてゐる孤兒（みなしご）を救ひにゆく道だつたのです』

プガチョーフの目は輝きはじめた。

『私の配下のもので、誰が孤兒なんぞを恥しめてゐるんだ？』と彼は叫び出した『そんな奴はいくら頑張つてゐたつて、私の裁判は免れることが出來なんだ！　君、云ひたまへ、誰がそんな罪を犯してゐるのだか？』

『その罪を犯してゐる男は、シュワーブリンなんです』と私はこたへた『あの男は貴方がいつかあの要塞の坊さんの家でごらんになつて病氣してゐた娘、あの娘を監禁してしまつて、强制的に自分の妻にしようと思つてゐるのです』

『私はシュワーブリンの奴をとつちめてやる！』とプガチョーフはいかめしく云つた『奴はいまに、私のもとにゐて如何に我がまゝが出來るか、人民を侮辱し得るかといふことを知るだらう。私は奴を絞罪に處してやる！』

『私に一言云はして下さい』とフロプーシヤ（譯者註、フロプーシヤとは癇癪玉といふ意味をもつてゐる）は嗄（しはが）れた聲で云つた『貴方はそのシュワーブリンをとりいそぎあの要塞の指揮官に任命なすつておいて、いまは早とりいそぎその男を絞罪に處さうとしていらつしやる。貴方はコサックの指揮官にあんな貴族どもを任命なすつて、コサック等をすでに侮辱なつたのです。只はじめての罪過で貴族等を死刑に處して脅かしなさらないがよろしいと思ひます』

『何も彼等を惜しがつたり、許したりする必要はありませんよ！』と例の空色の綬章をかけてゐる老人が云つた『シュワーブリンを死刑に處したつて、不幸なことはない。それにいま此處に居られる將校も、なぜこゝへやつて來られたか順序だてゝ訊問するのも惡くはないことゝ思います。もしもこの將校が貴方を皇帝陛下とお認めにならない場合には、貴方は如何なる處置をお執りにならうと疾ましい所はないのです。してまた、貴方を皇帝陛下と認められたとすれば、なぜ今日までオレンブールグに自分たちの仇敵と一しょに居られたのであるか？　貴方はこの將校を法廷へ連れてゆくやうに、そして拷問の火を燃やしはじめるやうにお命じになりませんですか？　つまり私には、この人はオレンブールグの指揮官たちからわれ〳〵のところへ密偵に派遣された人だとおもはれるのです。』

この老惡黨の論理は、私にはかなり有力なものゝやうに思はれた。さう思つたとき、私は寒氣がしたやうにぞつと身ぶるひをした。プガチョーフは私がまごついてゐるのを見てとつた。

『どうだね、君？』と彼は私にめくばせをしながら云つた『私の元帥の云つてゐることは眞實のことのやうに思はれるがね。君はどう思ひます？』

プガチョーフの嘲笑は私に大膽さを呼びおこした。私は平然と、自分は彼の權力下にあること、

そして私は彼が己が望みどほりにとり扱はれ得る立場にゐるんだといふことを答へた。

『よろしい』とプガチョーフは云つた『では云つてくれたまへ、君のオレンブールグの町の狀態はどんなだね？』

『おかげ樣で、すべて安泰でゐます』と私はこたへた。

『安泰だつて？』プガチョーフはくり返しきいた『だが、あすこの人民は飢餓で死につゝあるちやないか！』

僧稱者の云ふことは正しかつた。しかし私は帝國將校たるの誓ひをした義務によつて、それはみんなつまらない噂話にすぎないこと、オレンブールグには十分にあらゆる貯へがしてあることを確言しはじめた。

『どうです、どらんのとほりですよ』と老人が口を出した。『この人は貴方を面とむかつて欺いてゐるのです。こちらへ脫走して來た奴等はみんな、異口同音にオレンブールグは飢餓におちいつてゐるし疫病がはやつてゐる、そして生き殘つたものは死骸を喰つてゐて、しかもそれを幸と心得てゐるつて話してゐますよ。それだのに、この人は何もかも十分滿足だなんて斷言してゐます。もし貴方があのシュワーブリンを絞罪に處さうとおおもひなら、やはりこの人も同じ絞首臺にの

ぼさなければなりませんよ。誰にもに恨みの殘らないやうにさうなさる必要があります』

このいやな老人の言葉は、プガチョーフを動かしたやうに思はれた。しかるに幸ひなことには、フロプーシャがその老人の說に反對意見をのべはじめた。

『もう澤山だよ、ナウームイチ』と彼は老人に云つた『君はいつも人の首をしめたり、斬つたりすればいゝんだね。君は何ていふ勇士なんだ？　人間にやなぜ魂といふものがあるんだかつてことを、よく考へて見ろよ。君は片足を墓場へつゝこんでゐながら、まだ人を殺さうと考へてゐるんだ。君の良心には血といふものがないのではないかい？』

『うん、全く君はなんて云ふ聖人だらナー』とペロボロードフは云ひかへした『君のその同情はどこからやつて來たものなんだい？』

『實さいの話がだね』とフロプーシアは云つた『この俺も罪びとなんだよ。そしてこの手も（彼はさう云ひながら、骨ばつてごつ〳〵した拳固をかため、袖をまくしあげて毛だらけの腕を出した）この手もさ、クリスチャンの血を浴びて罪があるんだよ。だがね、俺は堂々たる敵を滅ぼしたのだ、客人なんぞは殺しやしなかつた。むき出しな十字路や暗い森でやつたが、夜のかげにかくれて家の中でなんぞはやらなかつた。鐵鎚（ナスチーニ）や斧の背ではやつたが、田舍女が口にするやうな譫

言ちややらなかつたよ』

老人はよこつちよをむいて、ぶつ〳〵と云つた——

『鼻つかけめが！……』

『君はそこで何をぶつ〳〵云つてゐるんだい？　老いぼれ爺さん？』とフロプーシャがどなり出した『俺は君に同じ鼻つかけを呉れてやるぞ！　しばらくまつてゐろよ、君の番がくるんだ、君もお蔭とナ、燒鰻（やきにて）の匂ひをかぐやうになるだらうぜ……だが、それまではナ、君のそのへんちきな頤髯を俺が根こそぎ引つこぬかないやうに氣をつけてゐるがいゝよ！』

『將軍たち』とプガチョーフは勿體ぶつて云つた『君たちはもう口論するのは澤山だ。あのオレンブールグの惡犬どもがみんな、絞首臺の横木にぶらさがつて足をぶら〳〵させるとなれば、結構なことだが、わが良犬たちがお互ひに嚙み合ひをやるやうぢや、まことに不幸なことだ。さあ、仲なほりするがいゝー』

フロプーシャとペロボロードフとは一言も口をきかず、陰氣な顏つきをしてお互に睨みあつてゐた。私は自分にとつては非常に不利な形で終るに至つた話を、他へ轉ずる必要を見てとつた。それで、プガチョーフの方をむいて、彼に愉快な顏つきで云つた。

『あゝさう〳〵！　私は忘れてしまふところでした、貴方にあの馬や毛皮の上衣のお禮を云ふのを。あの時貴方がゐて下さらなかつたら、私は町までゆきつくことができず、途中で凍えてしまつたことでせう』

私の狡猾な頓智は功を奏した。プガチョーフは陽氣になつた。

『恩を返すといふことは美しいことだ』と彼はぱち〳〵と目を瞬かしながら云つた『どうだね、私に話したまへ、あのシュワーブリンが恥かしめてゐるといふ娘さんと、君はどんな關係にあるんです？　たしかに君の若い心の大事の人なんだらうね、どうだらう？』

『彼女は私の許嫁なんです』私はいゝ天候に變つて來たのを見て、眞實のことなんぞ云ふ必要はみとめないで、プガチョーフにさう云つた。

『君の許嫁だつて！』とプガチョーフは大きな聲で云つた『何だつて、君は今までにそのことを話してくれなかつたのだ？　それぢや私が君に結婚させてあげて、君の結婚式の酒宴をやらう！』

それからベロボロードフの方をかへりみて『ねえきゝたまへ、元帥！　私はこの人とは古い友人なんだ。一つ坐つて、夜食をやらう、また朝の考へといふものは晩の考へより賢いものだからね。明日になつたら、君のことをどうするか考へるとしよう』

私はいゝ氣持でその申込まれた光榮を斷らうと思つたが、如何ともなしがたかつた。若いコサック二人と此の家の主人の娘たちとが出て來て食卓を白い卓子掛で掩ひ、パンヤいろ〳〵の魚汁それから酒やビールの酒壜數本をもち運んできた。私は再びプガチョーフ及びその頭だつた仲間たちと共に、一つ食卓に對つたのであつた。

私がいや〳〵ながらも眺めてゐたその酒宴は、夜更けまでも續いた。つひに醉ひは並みゐる人人にまはつてきた。プガチョーフはこくり〳〵と居眠りをはじめた。彼の仲間達は席を立つて、私に彼はそのまゝそつとしておいて此處を立ち去るやうに合圖をした。私は彼等と一しよにそこを出て行つた。かのフロプーシャの指圖で、衛兵の一人が私を法廷に使ふ百姓小屋へつれて行つた。そこにはサウエーリイチもゐた。私たちはその小屋のなかで、鍵をかけてと殘されてしまつた。サウエーリイチはそのすべての樣子を見て非常におどろいてしまつて、私に何一つ質問ができないほどであつた。彼は暗らがりのなかに寢ころがつて溜息をしたり、あーあーと悲觀した聲をあげたりしてゐたが、とう〳〵鼾をかきはじめた。が、私は夜ぴて物思ひにふけつてゐて、只の一分間もうと〳〵とするひまがなかつた。

朝、プガチョーフからの使ひが私をよびにきた。私は彼のところへ行つた。彼の居所の門のと

ころには四輪馬車がとまつてゐて、それには鞣革産の馬が三頭つけられてあつた。人々はとほりに群がつてゐた。玄關で私はプガチョーフにであつた。彼は旅行服を着て、外套をひつかけ、キルギス風の帽子を被つてゐた。昨日の宴會につらなつた人々は彼をとりまいてゐて、うや〳〵しい自己卑下の態度をとつてゐた。しかしこの態度は私が昨日目撃したところでは、あらゆることに非常に矛盾を示してゐたのである。プガチョーフは愉快さうに私と挨拶をして、私に一しよに馬車に乘るように呟ひつけた。

われ〳〵は馬車にのつた。

『ペロゴールスクの要塞へやれ！』とプガチョーフは、その三頭の馬を御する、肩幅のひろい韃靼人に云つた。

私の胸ははげしく鼓動しはじめた。馬どもは駈け出した。馬車の鈴は鳴りはじめて、馬車は飛ぶやうに疾驅した……

『まつて、まつて下さい！』といふ、あまりと私のよくきゝ馴れた聲がきこえた。そして私はそれが逢ひに駈けてくるサウエーリイチだといふことを知つた。

プガチョーフは馬車をとゞめるやうに命じた。

『若旦那、ピョートル・アンドレーイッチ！』と老人は呼んだ『この年寄りの私をうつちやらないで下さい、こんな惡……のなかに……』

『や、おぢいさん！』とプガチョーフは彼に云つた『また意外にお前さんに出逢つたね、さあ、馭者臺に乘るがいゝ』

『ありがたうございます、陛下、ありがたうございます、父上でいらつしやいます陛下！』とサウエーリイチは馬車にのりながら云つた。

『神様、この年寄の私にお目とめ下さいまして安心させて下さいました陛下に、どうぞ長生きをお與へ下さいますやうに、私はいつまでも陛下のために神様をお祈りをいたしてをります。その代り、もうあの兎皮の上衣のことは忘れてしまひますから』

この兎皮の袖無外套のことは、つひには本氣にプガチョーフを腹立たせるかも知れなかつた。幸ひなことは、かれ僭稱者はその言葉が聞えなかつたか、それとも時を得ないあてこすりとして問題にしなかつたかして、默つてゐた。馬はとつ〳〵と駈けた。とほりの人々は立ちどまつて、低く頭をさげてお辭儀をした。プガチョーフは兩側へ頭を肯かせて會釋してゐた。われ〳〵は間もなくその村を出はなれてしまつて、平坦な道路を疾驅して行つた。